

# 川柳塔

昭和五十九年十一月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷六九一号



日川協加盟

No. 691

十二月号

1985年

# 新春おめでとく会

日時 昭和60年1月15日(祝)午後一時開会  
会場 大成閣

大阪市南区大宝寺町中之町二六

〔心斎橋大丸とそごうの間を東へ約百m〕

電話(06) 271・5230

授 兼  
挨 題

西 尾 榮

〔牛〕

西 田 柳宏子 選

〔晴着〕

小 出 智子 選

各題三句

懇親宴  
会 費 五千円

◆同人・誌友の皆さんのご参加をお待ちしています。

川 柳 塔 社

60年1月から

本社句会の会場が変わります

なにわ会館改築工事のため60年1月から本社句会の会場が左記に変わります。

メンズファッションセンター(MFC)3階

大阪市東区内本町1-1

電話(06) 941-11918

地下鉄谷町線4丁目下車(2番出口) 谷町3丁目交差点南西角

開催場所附近見取図



☆なお旬会日は原則として従来どおり毎月7日ですが、会場の都合により変更されることがあります。予告にご注意下さい。

川 柳 塔 社

## 謝々

### 西尾 栗

十一月号を手にした表紙は、今尚眼底に残っている蘇州の水の姿であった。

既に十一月号を予定して表紙を描いて下さった直原玉青先生が、十一月号は中国旅行特集号だということをきいて早速労をいとわず、蘇州夜見を画いて下さった。まことに有難いことであつた。謹んで篤く画伯に熱烈御礼を申し上げる。

#### ある鑑賞

びっくり箱ぐらいで妻は驚かぬ

明日のことわからないから種を蒔く

小 出 智 子

二句とも表現のあとに起こる余情のあり方がすこぶる鮮明だ。びっくり箱から

飛び出すものぐらいでは驚かない妻は、夫からのプレゼントとして、宝石箱ぐらいなら驚いてくれるのであろう。一句の表現を「驚かぬ」とあるところからマイナス(－)向きとすれば、余情は驚くものの方へ発展するので、プラス(＋)向きと考えてよい。同じように「明日のことわからないから」は万一わかれれば種は蒔かないであろうから、(＋)向きに表現して、(－)向きの余情を引き出すと考えてよからう。カラシレンコン忘れ物の中にあるひとまずは逃げて野良大考える

安 藤 寿美子

野良犬の句を読み下すと、私たちはすぐ飼い犬に思いを馳せる。飼い犬ならば考えてから逃げる、あるいは走り出すであらうと想像する。つまり(＋)向きに述べて(－)向きに余情が発生する。この余情もまた鮮明である。さてカラシレンコンの句は、先ごろ問題になった土産物が、電車か駅か何処かのたくさんさんの忘れ物の中

に見つかったという、ちよつと取り扱いに困る状況が描かれてある。強いといえ、余情は表現の方向に広がる。つまり(＋)(＋)である。ただ、今までに見てきた諸句に比べて、その余情の行方は、はなはだ漠然としているように見える。その原因の大方は、今までの諸句が、ほとんど直線的に余情へ入ってゆくのに対し、カラシレンコンの句では、余情が立体的に膨らむことによる。この句では、読者がその忘れ物をどう処理するかが分らなくて、そのことからさまざまな想像が広がる。打てば響く面白さと、いつまでも何となく、という面白さの違いがここにある。

右の鑑賞は、昭和五十九年十月二十七日の朝日新聞の夕刊に「鮮明に広がる余情」という題で、後藤比奈夫氏が書いておられるのを転載したものである。

★ 浦中八千代さんのお祝い

人生観変った今朝のぬいこと 栗

座右の句

進む時計遅れる時計夫婦かな

(薫風)

私の句

へそのないひがみ蛙が合唱す

春城 武庫坊

## 川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

謝々

美人礼賛

川柳塔(同人吟)

自選集

■川柳太平記(9) 川柳の群像 紀 二山

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(十八丁)

上方前句付集の雄編「明石人丸大明神三万句集」(3)

水煙抄

秀句鑑賞 同人吟

水煙抄

愛染帖

西尾 栞 (1)

田中正坊 (2)

西尾 栞選 (4)

東野 大八 (34)

阿達 義雄 (38)

黒川 紫香選 (40)

舟木 与根一 (31)

波多野 五楽庵 (59)

橘高 薫風 (56)

## 美人礼賛

田中正坊

私は、国内と海外とを問わず、旅の楽しみはそれぞれの土地で、美食・美景・美人にめぐり逢うことだと思っている。

ただし、ちよつと注釈をつけたいが、美食すなわち豪華なメニューを意味せず、美味な郷土料理であれば、それに勝るものはない。美景は天然の風光だけでなく、庭園や建造物などの景観もつけくわえねばならない。また美人かならずしも美女にかぎらず、美しい人情もふくまれる。川柳塔社の中国旅行でも、当然のことながらこの三要素を期待した。

結論から先に言くと、美食という点では、すくなくから失望した。広い中国の中でも江南は米食圏であり、調味も日本人の口に合うと聞いていたが、記憶にのこるような美食には出会わなかった。もつとも、専門料理店カレセプションでもあれば、いささか事情はこ

となつたかも知れないが、これはまさに期待どおりと云つていいだろう。有名な寒山寺はさほどではなく、「名園の冠」と称される留園の成金趣味も、私にはいただけなかったが、クリ



中国吟行の旅 PART 2 ..... (60)

西尾葉／東野大八／橘高薫風／榎谷寿馬・郁子／春城武庫坊

平野百合子／赤川菊野／木嶋隆道／飯西ミサオ／秋元てる

斐伊川暮色 ..... 小砂 白 汀 ..... (66)

高木桃里氏のご逝去を悼む ..... 松本 忠 三 ..... (67)

「感謝」 ..... 渡辺 独 歩 ..... (68)

一路集「捨てる」 ..... 竹中綾珠選 ..... (68)

「欲」 ..... 川上 溪 水 ..... (69)

初歩教室 ..... 本田 恵 二 ..... (70)

柳界展望 ..... (72)

若柳潮花追悼本社十一月句会 ..... (74)

各地柳壇（佳句地10選／田中正坊選） ..... (78)

編集後記 ..... 薫風・鬼遊・史好 ..... (89)

座右の句

おだてにもものろう鞭にも打たれよう (智子)

私の句

聞きもらすリンゴの種のふるさを 春城年代

一クが縦横にはしる蘇州の街のたたずまいや  
宝帯橋付近の大河の流れに、中国らしい風光  
を満喫した。

奇岩奇峰が林立し、水青く澄む山水画の世  
界そのまの「天下に甲たる」桂林について  
は、もはや私は、表現する言葉をもたない。

おわりに美人だが、中国民航機に搭乗した  
時、赤いマニキュアをした八等身のスチュー  
ーデスの麗姿に、まず目をうばわれた。上海  
から列車で訪れた蘇州は、古来、美人の産地  
としても知られるが、「近ごろ、水が汚れて  
きたので、美人が少なくなりました」という  
通訳の申さんの冗談どおり、これといった美  
女にはお目にかかれなかった。

ところが、桂林の漓江下りの船内で、純白  
のブレザーにフレアスカートをはいた長身の  
娘さんに出会った。話しかけてみると、大連  
外語学院の学生で、日本人の新婚ツアーに同  
行してきたアルバイト通訳、出身地は蘇州で  
あることを流暢な日本語で答えてくれた。

いかにも育ちの良さそうな近代的な美人、  
名は疣玉珠さんで芳紀二十歳。早速、カメラ  
を向けたのは言うまでもない。どうやらこの  
拙文、美人礼賛で紙数がつきたようだが、ホ  
テルの庭で再会した時、薫風先生に紹介し、  
『なにわ川柳―この一句』を贈られたことを  
付記しておきたい。

桂林で蘇州美人にめぐり逢い



西尾 葉選

京都市 松川杜的

尺八の宿命という首を振り

泣き砂の泣くとききれいな星が降る

金色夜叉そんな調べが僕に合い

履歴書に平民と書きたい時もあ

廃線の運命は知らず曼珠沙華

時計ぐらい何処にでもあるのに腕時計

兵庫県 遠山可住

立退きに会う一丁目一番地

真実が見えて頑固に老いて行く

助け舟針路を変えた日の誤算

嵐吹くそんな女に出くわさぬ

去年作った服へおなが邪魔になり

職場にも漸く馴れて風邪をひき

松原市 谷垣史好

暖衣飽食死者を忘れていませんか

風情どころか坂はただ息苦し

申訳ないとは陛下おっしゃらず

教養とあらば粘土もいじります

集金に来るならお日さまあるうちに

昨日今日二の腕寒き冬仕度

八尾市 高杉鬼遊

十二月ヒラにはヒラの宴あり

この人を知っていますか野球帽

目的は同じ金なり善と悪

新聞が売れてお菓子が売れ残り

矢を持たぬ男が弓を持っている

夜の底どこかで人が起きている

桜井市 岩本雀踊子

尼寺に秋が落ちてるこぼれ萩

古傷の痛みは女のうらみかも

かたつむり引越し先はどこですか

忘れたい酒に酔うている日銭  
旅の風竹人形に顔がない  
風になる男がくれた火種です

岸和田市 高橋操子

岸和田祭り(四句)

筋書のないドラマです地車祭り  
肩ぐるまの子も踊ってる地車まつり  
宮入りの城を取り巻く二十台  
年番の祈り無事故で祭すむ  
国と国結べば子等も手をつなぐ  
しのびよる老化さからう術がない

米子市 八木千代

旅支度笑い袋も忘れずに  
さびしいことに絶景ばかり見つづける  
はるばると来てはるばると人想う  
睡蓮がゆらぐ旅愁のまん中に  
円い蚊帳貴妃のポーズで眠りましょう  
旅の火の残るかぎりの微熱かな

和歌山市 西山幸

一善のない一日の陽が沈む  
逢うためのたたかいがある鏡拭く  
従いてくる影もやっぱり意気地なし  
鈍行のわたしに無人駅ばかり  
返答を洩る小さなブライドよ  
臆病におんなを生きるまわり道

下関市 国弘 半休門

捨て印をおした余白が振りまわす  
みの虫の安全ポーズはぶら下り  
逃げ道を開けて叱ると謝し易い  
難民に生きる厳しさ教えられ  
嬉しさが絶句しましたインタビュ  
鶏の羽交の下で家鴨孵化

倉敷市 野田素身郎

子育てが終って秋の夜が長い  
曼珠沙華いつしか父の歳を越え  
折角の夜長を酒とカラオケと  
店内放送たしかに今のは夫の名  
芝枯れて老人ホームの昼静か  
行革で僕の机が隅に寄り

竹原市 小島蘭幸

情けなどいらぬ十九の眉である  
胃の底に妻の金切り声がある  
子に隙は見せぬ妻にはなお見せぬ  
我を忘れる遊びをひとつぐらい持つ  
隙あらばカラスは高いとこにいる  
栗の毬二三個置いて秋とする

大阪市 西森花村

虫の音も人の鼾も出で湯の夜  
国防論地球もガタが来てまっせ  
有れば使う小遣錢も原爆も  
心付け学校の先生も葬儀社も  
電光ニュースまでは燈台未だ付けず

香奠の事でもめてる〇Ｂ会

倉敷市

小野克枝

壁に突き当って得たり長き友

旅先で米の成る木をみて帰り

欠点が無くてねじ曲げられた枝

寛容の心を詰める袋縫う

幸せに見える他人の月明り

中年の足にまつわりつく小石

岡山県

嘉数兆代賀

白足袋の白がわたしを主張する

言い分を通して負けたナとおもう

生きていく汗に交りはないピエロ

ご破算をしても白紙になれません

この橋を渡れば他人のかおとなる

鈍行の温もりといく喜寿の旅

大阪市

小出智子

銀行の自動ドアも十二月

面白いことが出ている古新聞

向田邦子を買って電車の隅にいる

偶然に逢うても人の旦那様

友達がいちばん楽しくしてくれる

秋深しすべてのものに音がある

富田林市

岩田美代

円満な男が梅を干している

美人から見られて美人の目が光り

愛憎にしがみついている風と逢う

とっておきの言葉が出ない足袋の白

一本の傘で流れに添うつもり

へそくりに目を通して秋の底

八尾市

宮西弥生

捨てられた情に出会う秋の道

枯山水秋の女を連れてくる

アクティで出会うた人に尾行され

友達のを知ってからの仲

コスモスが揺れてなにもかも許す

噴水もロビーも夜長人の宴

島根県

堀江芳子

のん気そうに見られ幸せだなわたし

不可思議な財布には無理もきき

熟れきって青い蜜柑ももうおとな

使いよう知って鉢も向きを変え

茶飲み友そんな暮らしにお手を貸す

気軽うに返事したけど嫌な役

和歌山市

福本英子

穫り入れの秋古古米の水加減

菊花展肌の手入れも急がねば

桐一葉ひとりの夜を怯えさす

落葉掃いて掃いて冬至まで戦さ

箸と口だけは確かに呆けてない

四人姉妹揃うて見舞う父の老い

和歌山市

浦野和子

風吹けば吹いたで椎の実ぎんなんよ



あたふたと帰り念仏など申し

言いつのる程に言葉の貧しくて

何う言えば解ってくれる萩零る

岐路に立つおんなは優しい風を待つ

塔昏れてかごめかごめの輪が解ける

封筒の白さに満ちる墨の彩

この指環のテトラポットに歌がある

夕焼雲は天上びとの酒盛りか

シンクロの動きを想う水中花

すすき野の月へ美人の色ざんげ

叢に天馬の羽根がひとつ落ち

青い鳥追っかけ追っかけ年を取る

お酒飲むポーズに女の過去をみる

手鏡に古傷痛む秋がある

言い勝った胸の鼓動は鉛色

雨の日の花の鼓動が遠くなる

何事も聞かない耳のない地蔵

バラ色のページを開く誕生日

まごころを受けるページがあいている

昂りを押さえるページ繰っている

哀しさのページを開く秋ざくら

思い出のページに嘘が見当らぬ

来年のページが白い風になる

米子市

林

瑞

枝

吹田市

藤

村

女

女

大阪市

津

守

柳

伸

桃源のくにへ夫婦で連れ添いて

中国や媼と翁の山と川

漓江下る仙人となり王となり

麻の花満開民家は見当らず

自転車の列建国へ眉太し

悠久や十連船がゆく蘇州

嫁が来てリズムを変えた台所

手八丁口八丁を利用する

ロボットがやがてボナス呉れという

余生とは幸福そうな文字なれど

靖国も皇居も外人さえ拝む

銀ブラを歩行者天国揉まれて来

出直しの夫婦が拾う忘れ貝

目立たないように小出しの知恵袋

両の耳塞げば少し先が読め

里芋を盛れば絵になる秋の皿

重役をタイムカードが笑い出し

慾が絡むと胸算が狂い出す

爪に泥菜園秋の風が吹く

笑えない話老体けつまずき

淡水化反対湖は秋の色

伊丹市

恒

松

町

紅

榎

谷

寿

馬

出雲市

原

独

仙

東京にて

(二重橋)

平田市

久

家

代仕男

雑巾を持つと女はよく動き

老婆の和服に残っていた色気

買い溜めの癖がぬけない戦中派

松江市 柳 楽 鶴 丸

翔んで見なさい怪我をせぬように

社会的には女房は未熟児で

考えなくちゃ僕等も離婚適齢期

私を真似て駱駝が坐ってる

デュエツトなら五線譜などいらぬ

男は狼承知で単身赴任させ

松江市 小 林 孤 呂 二

ポリシーの乏しい役人ばかりなり

落し穴ばかり気にしてる太郎冠者

いざこざの心がお酒を飲みたがる

死の意味を聖書のなかより拾いだす

汚れても女シンデレラの夢捨てず

コーヒーの数にも喜怒哀楽がある

松江市 舟 木 与 根 一

奥様のほうが勲章よく似合う

美女と野獣恋は不思議な病です

納沙布岬にて(四句)

国境の海を挽歌が流れ行く

「祈りの火」心通いて雨になる

日本の霧笛ばかりがなぜ叫ぶ

北方領土は悲しい蜃気楼

米子市 石 垣 花 子

五十年連舞いの幕まだ引けぬ

絹の糸吐いた日も有り蛾の眉毛

親思い笑い袋を置いて去に

鯛雲見えたぞ浜は大漁旗

終りまで引きずって行く影法師

ビーナツの皮へ邪険な缶ビール

和歌山市 松 原 寿 子

遮断機の手前で耐える冬の花

絡ませた小指すてきな刻をくれ

約束へ冬の誤解が溶けてゆく

岩をかむ怒濤へ慕情だき続け

だからこそ契りへ賭ける寒椿

距離があり綾取りさえも赦されず

大阪市 天 正 千 梢

ストッキング虚勢をかるくはがして

力で行くか頭で行くかせまられる

その思想歴史の歯車につぶされて

女の城サボテンの要塞で

秋深し老子の言葉に衿正し

しずかを愛す三年坂の歩をかぞえ

倉吉市 奥 谷 弘 朗

革新が弱者の味方でないみたい

はっとけば線香花火で済む噂

身についた勿体ないがまだ残り

貯金する金があつたら飲むという

実力はないがハタタリだけは持ち

親戚も来ない祭を淋しがり

京都市 都倉求芽

水たまり晴れるも曇るも空次第

ライバルに余白の苦労は見せるまい

振り込みの給料妻は見もしない

ひと月を引き算ばかりで暮らしけり

みな寄ってから決めるさとの御仏前

電話口何々商事の誘蛾灯

藤井寺市 児島与呂志

忙しい靴に追われている男

山茶花の処で親切かみしめる

逢うて来た女は朝を早く起き

気がかりを背負うてだんだん老いてくる

遠廻り無気味な猫に横切られ

冬の日の言訳きれいな影を見る

岡山市 時末一灯

狂いたい男にくもり空つづく

知りたくはないこの先を占い師

少しでも曲って嘘の世にびたり

涙あと眠り給えよ神の子よ

楽あれば苦ありとパチンコ玉笑う

善戦の一生だった敗北者

松原市 玉置重人

掌の胼胝に居職の自負がある

管理室一人勤務の失語症

誠実と真面目で話が進まない

うやむやにする気せぬで散る火花

パートまだローンが残っている定期

先生の鼻が大きい齒科の椅子

米子市 小西雄々

ロビーでは勝手に呪文さがさせぬ

筋曲げて赤鬼どもと手をつなぐ

オープン粗品へ鬼の手仏の手

さすらいの風駅前で向きを変え

得意顔すると見えない矢が刺さる

気配りをそらす秘密へ梨を剥く

美祢市 安平次弘道

絵日記はわが家の恥部と知らず書き

避妊薬性の乱れは知らぬこと

不信心だんだん核が太りだす

栗だつてイガイガがある自衛論

気の弱い鬼が叫んでいる平和

温室の花に歳時記無視される

豊中市 安藤寿美子

モカブルマンわからんけれどコーヒー好き

天気図にいわれんかつて秋の晴れ

ウーロン茶愛用一家肥満型

孫抱いてどうか美人になるように

母哀れ昔の話くりかえし

母哀れ憎まれ口をきく時も

富田林市 藤田泰子

頼もしい風を待つてる風媒花

お迎えの馬車が来そうな月の夜  
低気圧の気配で締るドアの音  
式場の計算通り泣かされる  
正直に写すカメラで嫌がられ  
煩惱を流して帰る奈良は雨

大阪市 藤田 頂留子

風雪にまだまだ浅い人の知恵  
北風と落葉にほうきからかわれ  
おごるまい一日ずつのつみ重ね  
一人ぼち病原菌にも見はなされ  
盗まれるもの何んにもないという強味  
デパートの先着順に並ばされ

倉敷市 小幡里風

背伸びして咲いてコスモス羞恥めく  
松茸の匂をかいだ日のゆとり  
ナポレオン嬉しい人に封を切り  
三面鏡シャネルの空瓶置いてある  
良心がその時嘘をつかせない  
不器用な夫婦儲けた五男五女

羽曳野市 塩満敏

トマホーク第九条を知らないな  
尾がついた話にひれをつけてやり  
けつたいな犯罪日本に増えてきた  
グリコ犯に針千本の刑をせよ  
トレパンで体育の日をすごすパパ  
禿げ頭これも一種の髪型の型

東京都 増田 次章  
地位名誉ないが手応えある一生  
口だけの同情が降る左遷の日  
風雪に耐えた世代がうとまれて  
ふりかえりあれでよかったとも思う  
乾坤一擲そこで風向きふと変り

恩師逝く

真っ直ぐに生きて誇りの旅に発つ

島根県 堀江 正朗

飛躍への空想負けたくない歩幅  
見えた日の夢はとんちんかんになり  
ウン分ったウンわかったと寝てしまい  
鍼もてば自信湧き出る指の先  
アハハハ年取りましたと逃げておく  
電線の雀よおまえには目があった

岸和田市 福浦 勝晴

妻二句

下り坂妻とびったり寄り添うて  
野菜食べ残したら妻の笛が鳴る  
豆秋はんに笑われるぞけちな感傷は  
金髪に染めても碧眼に染まらない  
マツタケに言わすと人間ケチばかり  
金策に走る途中のコップ酒

八尾市 内海 幸生

遺伝子の魔法に酔うな雑草よ  
全山の真紅に葬送曲贈る



私にも生きる権利とあぶら虫  
ドリンクを飲む釣り人を見る仏  
算盤よすこし指図をしすぎぬか  
秋祭り過疎を派手にという便り

仙台市 川村映輝

倅せは傘寿迎えてひまがない  
感謝してくらせば倅せついでくる  
厨から停年のない老妻の音  
アルバイトしてから汗の価値を知る  
三人の子持ちの娘甘えに來  
不平不満この人これが生きがい

熊本市 有働芳仙

影法師心の揺れを見逃さず  
人生を曲がりきれないまま落ちる  
台風一過真昼灯台眠りこけ  
青春が哀しい詩で眠る島  
看護婦の動く風だけ生きている  
若返るつもりのヨガへ骨が鳴き

倉吉市 渡辺独歩

ハンストを見てロボットは腑におちぬ  
手袋がノルマを知った日の乾き  
神棚に先祖の指紋落ちてます  
愚問する妻に愚答の恙なし  
駅舎から見る街の灯は温そうで  
奄美から大島袖を着せにくる

岡山県 白岩文衛

熱烈歓迎のバンドに「塔」も迎えられ  
近代化の流れ魯迅は椅子で見る  
虎丘斜塔人は栄枯を繰り返す  
漓江夢幻山々の色水の色  
漱石を読む姑娘と乗り合わせ  
麻の花村の乙女の髪がざれ

和歌山市 堀端三男

久闊の道を隔ててお辞儀され  
新人は彩に染まらぬ強味あり  
垢抜けぬ言葉だ信用しておこう  
借金を死ぬまで嫌い抜いた亡父  
ギブアンドテークうまくみ合う嫁姑  
蹟くと亡母のやさしい声がする

岡山県 土居耕花

無花果が好きで少うし鼻べちやで  
洋傘を差して少うしトカゲじみ  
後家さんとこの猫が又妊み  
農繁と書いてゴロリと横になる  
鬼の面ならサラ金が持っている  
背を向けて寝るこだわりは直ぐ解ける

今治市 矢野佳雲

人少し恋しくなつて森を出る  
嫁がまだ憎い間は呆けません  
菊が好きですとは日本人らしい  
成程と言えば相手の気もなごみ  
竿売りが困った路地の行き詰り

赤字線お盆が来ると少し混み

新宮市

川上溪水

欲のある耳でおいしい話好き

小金ある噂で付き合い悪くなり

夕食の今日は近所に勝つ匂い

近所中居場所を知らず衛生車

無芸では済まない役が一つ付き

水たまり園児の列がふくらんで

弘前市

波多野五楽庵

水涸れやもう出稼ぎにゆく河童

木から樹に変わる山頂近い道

胃洗滌地獄の門を見て還り

薬局で水虫お茶を飲んでゆき

ハトバスへ津軽訛の舌が乗り

旅先で息子の嫁にほしい髪

大阪市

西出楓楽

曇天の今日は思索の日としよう

小春日へ心に届く言葉待つ

想像力が豊かで困る時もある

栄光の影をひきずらないように

聞き役に終るつもりのティーカップ

中流を演じ続けて疲れ気味

吹田市

西川景子

金ペンで男のいけずに立ち向う

気をそそる一筆箋が添えてある

冬の雲にとっくに読まれた胸の中

広がってほしい噂は吹き消され

カクテルにすこうし入れる軽い嘘

ライバルの少し無気味な中休み

大阪市

本間満津子

掌を合せて幸せ包みこむ

二人の私が相談してゐるひとり言

西へ行く地図書き直し書き直し

いそいそと出て行くお紙幣たのしくて

喜怒哀楽それが何だという背中

飲めるなら人誘いたい虫の音よ

守口市

羽原静歩

別れ道輪廻の風を聞いている

桂林の額が新居に生きている

クレヨンの中からピカソ誕生し

眼薬をさして無口に近くなる

巫女の鈴シャンシャンと神を見せ

善人の嘘ははつきり透いて見え

寝屋川市

稲葉冬葉

白さぎの残暑見舞いが落ちていた

裸婦像の乳房いとしいとも思う

文鳥の墓を忘れた庭伝い

一本の松に庭師は喋りすぎ

万歩計持つと横雲追ってくる

宴会へ小咄ひとつ用意する

米子市

野坂なみ

勝どきに酔うて伏兵気づかない

許せない意地が女を啞にする  
炭の皮小さな謀反したくなる

果物の皮は化粧を嫌い抜く

受け皿をいつもピカピカ光らせる

皮剥くとリンゴの器量一緒だね

米子市 青戸田鶴

近づいてくる足音に身構える

今日の事吊皮だけにうちあける

許しあうなかで絆が太くなる

彼岸花仏がひとりふえている

会者定離むくげの花はまだ匂う

しじみ蝶秋の深さにたじろがず

米子市 寺沢みどり

風向きへ芒すなおに穂を揃え

思いきり鈴を鳴らして神を呼ぶ

今日までを生きて飽かない秋の天

天国に待つ人があり掌を合わす

そよ風に揺れる萩にも主義があり

正直にこころ見透かすピアノ線

出雲市 板垣夢酔

あくびした虫歯が歯医者気にかかり

帰宅して職場のトゲを酒で抜く

髪白くなっておとぎの夢も白

ほどほどのほどを忘れた慈雨の害

万円を崩して財布ふくらます

かといって離婚してまで添う気なし

名古屋市 越村枯梢

多数派の中流からも落ちこぼれ

色懺悔半分残して父は逝き

一ときは笑ってみたい仁王さん

海の宿娘は今日も海女に出る

多情多恨ロボットには縁がない

古里に知れない街の暮し向き 唐津市 浜本久仁於

十月の制服残暑まだ続き

敬老会老人ほけの舞扇

ふる里はよしけじめけじめの花が咲き

子の声で呼ぶか岬の海鳴りは

花束の行方に鷗翔んでいる

言訳を待ってたように母が祈れ

高石市 牛尾緑良

追憶が切れぬ女の小物入れ

一方の耳で謀反を考える

よく喋る女よ妻でなかれかし

貧しさを笑う葉が多すぎる

喪の家に仕事を詰めた紙袋

理由を持つ息子が夕食待ってくれ

八尾市 山下みつる

気前良い二代目さんとおだてられ

頭から横文字よまぬ石頭

可愛げのないカッブルも居るデート

生きる欲あるから痛い手術うけ

悪友にふられて僕の妻になる  
芝居小屋今パチンコで稼いでる

尼崎市 春城 武庫坊

母の家祭太鼓を聞き昼寝

すぐ切れる女の城の縄梯子

内巻きの髪に男の眼がたまる

止ったら又動き出す女独楽

待ちぼうけブルース調の雨に遭う

冗談がすぎて肴になってやる

倉敷市 斉藤 通風

食い扶持のバランス崩し赴任する

不肖の子前触にして自慢する

豪快の笑いに淋しい皺をよせ

何事も節度を越さぬ長寿法

ぐい飲の静けさ何もなかりしか

言葉にはならず頬には紅をさす

大阪市 西村 芙佐女

妻の皺一つに一つの朝がある

目をみればわかつてしまふ淋しくも

主義の無い女肩を揉んでいる

花活ける妻でも母でもない私

花束にうもれる女意地失せる

このままでびつたりの妻にはなりませぬ

大阪市 鈴木 節子

御在所の秋へストレス置いてくる

良い妻にもなれずふとん干している

あしたの朝も同じ言葉で送るだろう  
迷惑をかけて付合い深くなり

みやげにもならないみやげ買ってくる  
打ち明け話もしたそうなおぼろ月

西宮市 奥田 みつ子

透明になってあなたの胸に棲む

入院へ急ぐ車窓の曼珠沙華

ロボットも恋をしそうな星月夜

楽しみは逸れ優しさを倍貰う

すすき野を往くと聞こえる亡母の声

青空に弱気を笑う葉鶏頭

尼崎市 春城 年代

読書欲盛んな頃を周五郎

ストレスはシャボンの泡で消せるほど

読書好きばかりではない紀伊国屋

ねむれない夜を有吉佐和子の死

お屋敷の塀を曲っていった風

男にも年頃があるはたちかな

尼崎市 西村 かすみ

老夫婦ロマンに遠くしじみ汁

蜂蜜とレモン女系のホームバー

真ん中に姑が坐る指定席

何年目に効くとは薬草書いてない

嘘入れていつも話はきれいすぎ

銀婚の仲よく持病一つもち

島根県 松本 はるみ



本棚に埃がたまるうす情

魔がさしてなどと都合のいい言葉

ほほえみが本音ばかりと限らない

プログラムに足の痛さは問うてない

病葉の悲しき踊り野分け吹く

一方へ傾いている猫じやらし

八尾市 宮崎 シマ子

帰省子へギョウザの皮のひだをよせ

清算した罪におののく白い萩

泊らずに帰った訳は言えなくて

曼珠沙華の赤さが欲しくフルムーン

あれもこれも後生の石よ恐れ山

外人二人美人の噂してゐらし

和歌山市 坂部 紀久子

今日になりもう後悔のある昨日

夕闇が静かに文字に迫り来る

負けてると知らぬ驕りの勇み足

雑踏の孤独地下街通り抜け

誕生日小豆が小踊りして煮える

簡単に剥かれたくない栗の意地

高知県 赤川 菊野

中国旅行(一旬)

タラップへ手を高々と旅を終え

白昼夢消えて一人の米をとぐ

企みを知らぬ乾杯たか高と

冬眠も出来ず孤りの灯を守る

かぶき門娘三人売れ残り

距離おいてみればそこらに居る男

大阪市 川口 弘生

アフリカの飢えを身近に戦中派

清潔な夜具しみじみと妻に謝す

医者要らずと呼ばれアロエの青くさき

山動く日も二人の絵を描く

出前ずし肩の凝らない妻の客

柳井市 弘津 柳慶

ガスが出て付添いホツと安堵する

土の香が消えて道路が延びて行き

仏壇の花の水でも替えようか

嘘になれて真実を聞き逃がし

政治家の裏をのぞけばエゴに触れ

島根県 小砂 白汀

嫌な尻尾とも見事な尻尾とも思い

ぬっと来てぬっと帰って気をもたせ

笑顔かと思えばあれが生れつき

掌に包むコーヒークップ冬に入る

カナリヤが喋ると秋の陽が当り

大阪市 中川 滋雀

爪の垢見習うことが多すぎる

家計簿の出たとこ勝負十二月

病みなれて体を騙すことに馴れ

笹舟の過去を流したわらべ唄

七十五日素知らぬ顔で来た噂

中国の旅

伊丹から二時間ニイハオと着き

十億の民目のあたり上海市

百幅の墨画漓江の水青く

桂林の一枚パンダ撮ってる

ツアイチエン誓う別れの暖かさ

東大阪市

斉藤 三十四

純情は涙が先に訴える

悪友が来ない日妻も淋しがる

平均寿命まで生きたいは欲だろか

糟糠の妻の味に慣らされる

一喝を肚に決め手もっている

鳥取市

小林 由多香

仔を守る耳足音に身構える

ユーターン酒とたばこを習うて来

税金の戻りでポトルキープする

店構えだけでは見えぬ火の車

夕焼けに今日の宿題思い出し

兵庫県

辻 文平

中年の貧しき嘘を編む叛旗

悔い一つ一気に流し込む茶漬

折返す靴がつまずく葉ビン

慰謝料をかぞえて知恵のない暮し

言い分を笑ってすます嫁の知恵

奈良市

森田 カズエ

奈良市 宮口 笛生

炊事場いっぱいにして娘の料理

鹿せんべいいいたずら代もこめて売り

青丹よし陛下のお声待ちつづけ

オシヤレではないサングラス買い換える

松茸がバックの中で苦しそう

岡山県

川端 柳子

へその位置皆わが母を忘れまい

噂うわさ巷に変曲して流れ

語りべになろうか抱こか秘中の秘

お人よし以前をころりと又忘れ

札束の重みを想像する事件

堺市

高橋 千万子

血液型よりも信じる目鼻だち

そんな事ないよと笑った胸さわぎ

亡き夫の持ち味をつぐ子の育ち

しのび逢うスリル覚えたコンバクト

宝石選ぶささやき夫婦でないらしい

和歌山市

若宮 武雄

ごまかしが効いて大事な親爺さん

子を案じても思うても道は別

とんとん拍子あしたの風が怖くなり

いい事もない安らぎが欲しい齡

シルクロード男の夢の行くところ

兵庫県

河原 みのる

海の向うがよっぽどおもしろい選挙戦

毒米を卸し政商肥ゆる秋

コスモスがニッポンの花になつて秋  
丹波霧日毎に名画描き変えて  
菊の日や居眠り起立でクン何等

玉野市 小谷仙山

夫婦喧嘩の種はまいたりまかれたり  
平和主義言いたい事を溜めている  
都市計画コスモスの花踏みじり  
妻の知恵も入れて七十の曲り角  
どうでもよい話聞かねば気がすまぬ

竹原市 森井菁居

昇進の辞令に鎖がついている  
セールスに生きて苦手な事務机  
おでん屋の壁に安らぐものがある  
コンクリートランドに生きて山を恋う  
新聞を斜めに読んで管理職

大阪市 江城修史

妥協して他人の顔となる老父よ  
楽させる筈の約束反古にされ  
どん底が想い出となる日を信じ  
万言を費し果ては断われ  
二人三脚積木崩してなるものか

京都市 山本規不風

読み過ぎる裏に燃えてる火の女  
傷口を温め女諦める  
犯人が使う女は恋人か  
弱虫の本音が酒に浮いている

ライバルに見せた手の内ひるがえす

大田市 藤田軒太楼

無駄花と知りつつ注ぐ愛もあり  
正座した妻にたじろぐ宿酔  
持ち寄った意見五十歩百歩なり  
秋さやかロマンの湖や嫁が島  
口辺に笑を浮べて折れていず

大阪市 河井庸佑

定石で崩せる相手とは見えず  
守備範囲越えてつまらぬミスをする  
純粹な心大人の手が汚し  
一徹なところ長所とも短所とも  
どんぐりが互いに足を引っ張って

綾瀬市 大山と金

口喧嘩するわけ夫婦仲がよい  
二人して木曽路を歩く桧笠  
世の中の一つ一つに不平持ち  
内緒事バレて気持が楽になり  
相談をする前すでにきめている

倉敷市 藤井春日

願わくば老い美しく終り度し  
会社では怒鳴られ戻れば敷かれ  
共白髪明日を定めて歩みましよ  
老人ホーム枯木に花が咲いてます  
かすみ草脇役としてバラの花

堺市 藤井一二三

人生はこんなものかと石を蹴り

同行二人仏にすぎる花の道

秋哀し鳥の声まで透き通り

道一すじ歩いた父を継ぐ誇り

買いの手を男のロマン賭けて振る

呉市 横田英詩

めだちたい少し濃いめの紅をさし

飾るものないが玄関掃いておく

人生の秋を鏡で知りました

リラックスすれば素直な筆になる

正直な鏡に妥協せぬ女

岡山県 直原七面山

愚痴一つ零さぬ妻で恐い妻

名人の吐く一言にある重味

母さんの情夫を刺した少女A

孤には孤の安らぎがあり眼閉ず

火を抱いてガラスの城に住む女

鳥取県 清水一保

組に乗ると男の顔になる

精進の汗を採点する菊花

家計簿に王手王手と不況風

大の字に寝て中流と知る生活

地震まで地球の怒りかと思ひ

笠岡市 松本忠三

病床の母には嘘も方便か

病名も無くて天寿を全うす

お題目唱えこの場を乗り切る気

目には目を歯だけ頼りになりません

振出しにもどるさいころなど振らぬ

桜井市 河合茂雄

振り向けばいつも泣いてた僕の道

母の呼ぶ声が聞えた曲り角

井の中で世間知らずか背伸びする

アイロンの裏が錆びてる倦怠期

踊りの手振りで赤ちゃん泣いている

大阪市 神夏磯道子

彼岸花横の野菊に魅せられる

定年の夫と三食忙がしい

ハリヤイトいうて食慾笑われる

目標のない一日の鳩時計

新しいこと知りたい慾が耳にある

大阪市 黒田真砂

そこそこに家事片ずけて見るドラマ

そこそこの倅せでよし兎小屋

音たてて崩れる愛や彼岸花

少し依怙地になって林檎の皮をむく

更年期強がり言っではばからず

寝屋川市 宮尾あいき

空地にも秋が咲きますキリン草

今年や豊年雀の肥満体

月下美人栗名月を追うて逝く

指切りも曼珠沙華にはかなわぬ



お仲人家の息子はまだ一人

寢屋川市 柴田 英壬子

ニューメデア地球の回転速くなる

ニューメデア琵琶湖の水位知ってるか

李白の詩心の友へ近付こう

立冬へ乾いた今年振り返る

浅利貝小さな蟹を食べていた

和歌山市 内芝 登志代

天からの恵みは大手で頂こう

満足な日々が長寿のいい笑顔

好きな本読んでふたりの茶がうまい

決めてからいい縁談が次々と

部屋貸して互いの孤独を温め合い

和歌山市 細川 稚代

自問自答これつきりにしませんか

ストレスを溜めた結石いとおしむ

これ以上過保護に出来ぬ足の裏

一人旅好きな娘でゆきおくれ

三歳の本よみ親が期待かけ

宇部市 平田 実男

命拾ひしたブレーキをもう忘れ

好きだよと言えば馬鹿馬鹿しいと妻

恋愛が余計家裁の世話になり

エリートへ横波どうにもならぬ梶

羽曳野市 榎本 吐来

父母の血を沁々と知る齢五十

男だけ知ってる過去があり無口

悪友は大のおふくろフアンである

詩のない一日だったコップ酒

秋の宵テレビに妥協した枕

鳥取県 林 露杖

傷心の夕べがまっか燃えに燃え

老後とは悲し枯葉の音に似て

露草やきみの薄命偲ぶ藍

白寿まであと三年の母の自我

焦燥と悔いと諦め去年今年

鳥取県 森田 布堂

親分に貫禄という眉間疵

質流れ着て新調かと聞かれ

三角の顔でカマキリ鎌を振り

景品の粗品で釣った客が混み

美しき掌に占い師ケチをつけ

鳥取市 森田 熊生

やり直す決意の腰を陽に伸す

不景気に又保険屋のビルが建ち

城跡で男のドラマ描き直す

自信ある声に納得して帰り

父に似て来たがんこさを指摘され

倉吉市 渡辺 菩句

夢の世の恋の翼はよく燃える  
彼女にはシンバルを叩いてみせる

いい人の前では旋毛曲らない  
結論を出すや毬栗落ちて来た  
蟬螂の鎌に切られた怪我だとき

倉吉市 野中御前

全身で人の噂を聞いている  
台風が残した余波の時刻表  
風の子が夫婦喧嘩をみな喋る  
喋るのが大儀になったポンコツ車  
宴酣けて男素顔をのぞかせる

福岡県 横地雅風

お歳暮に贈賄の線考える  
分別がセールス舌に丸められ  
遠回し上手な口で子の自慢  
木の葉揺れ神経とがる金を持ち  
空の旅がくんがくんに弥陀祈る

東大阪市 森下愛論

雀もメダカも学校があるぞと追い立てる  
金もひまもあつて女にもてぬ奴  
鈴虫のいのちは牝に喰べられて  
カラカラのセミが九月のオモチャ箱  
こおろぎの中を夜警はひと廻り

米子市 菅井とも子

桃太郎に逢えそうそつと皮を剥く  
制服を着れば誰でも疑わぬ  
両耳が違った話聞いている  
神父さんの帽子の中を覗きたい

すられても財布どこかで鈴鳴らす

米子市 桑原伊都

蛍草あしたの露も信じよう

ふた開けば少女にもどるオルゴール  
過去みんな消して砂丘の今朝の貌  
蝶になる日を神さまに許される  
小石ひとつなげて水面動き出す

米子市 田中亜弥

鶏頭のつや急がねば冬が来る  
青空はいつもおしゃれな服を着て  
夕焼小焼帽子の影が長くなり  
はねかえりの強いボールを抱きしめる  
さ迷った森でのろしを打ち上げる

米子市 澤田千春

忘れぬ風に逢いたい途中下車  
曇天の日々にも心あたたく  
許されて夕陽の中に溶けている  
浮いた日は蛇口の水も踊り出す  
スタミナとなった一言胸に入れ

高知県 松岡三吉

歯がなくて豆腐のかたさまで申し  
チュウハイにレモンが浮いて且那さま  
門をでて居酒屋までの軽い靴  
すり鉢の手料理愛はくずれない  
あと何年生きるか旅にでる夫婦

七尾市 松高秀峰

深入りをせず助けてる母子家庭  
左遷は言わず下りの汽車に乗り  
嫁が来て姑は上手に啞になり  
利口にも馬鹿にもなつて里の母  
印鑑の要る郵便にある不安

羽咋市 三宅ろ亭

鋸の切れ味試す秋の天  
晩秋の一日米を搗き糠を撒き  
血迷うな秋も半ばに蚊の攻める  
百メートル血は争われずピリの孫  
マラソンのピリ一周に湧く拍手

和泉市 西岡洛醉

老眼鏡今日のニュースが解けました  
安楽椅子頼る人生とは淋し  
定退のそれから離婚話消え  
雨後晴こんな心根嬉しくて  
誘蛾燈飛び込んだのは雄なのか

寝屋川市 江口度

ノッポビル冬がこつそり忍びよる  
ずぼん履いた妻にキッチン狭すぎる  
猫捨てにゆく歩幅が子等と狂いだす  
わが粹にはめようとする日の疲れ  
貰い物好きな隣で公務員

松原市 北野久子

思い出を追って歩けば通り過ぎ  
心齋橋親娘きよときよとして通り

大金でないがバッグはしかと抱き  
趣味の無い夫へペンは控え目に  
先生に恵まれ医学に見放され

加賀市 細呂木魯木

代理はしやぎ次はと勘ぐられ  
仲よしになる喧嘩の調味料  
雨宿りばかりして居た人生譜  
自慢とは言わず悩みにすりかえる  
名人の癖が出てきた春の宵

町田市 竹内紫鏑

出席報らすのも大安日  
録画かなわぬホールインワン  
留守番電話へ噛みころす声  
子とまちがわれ受話器の苦笑  
百歳超せばテレビに映る

鳥根県 榊原秀子

山鳩の声我が家の樹も達者  
花言葉愛のこと愛のこと  
強情は捨てたと背を娘が叩く  
お米まで出る自販機が驚かせ  
同じ子であるのに姉妹へ気を遣い

島根県 松本文子

誕生日だけを忘れぬ夫であり  
騙す方ではなくて良かったなど思い  
給料日までやりくりの豆も煮え  
恋多き人本棚の本閉じる

やがて一人にかえる夫婦のひとりごと

島根県 石田 清泉

母という沽券托児所の門で消え

凡夫にも合掌をする術があり

白旗を老いの依固地がまだ見せず

残り火を燃やし陶芸にも凝りぬ

唇を染めて秋風に立ち向い

島根県 木村 はじめ

今日だけは時計も止まれ嬉しい日

核の世に過疎は水車で米をつく

見送りの長さを救う発車ベル

頼れるは我のみと知る老いの杖

金婚の終って残るものは風

島根県 北川 民子

北風もけつこう楽し大根抜き

お小言をジョークでかわし無事な朝

この辺が我慢のしどころ茶をすす

思案顔見抜き一声犬が泣く

午後三時雨の中なるうす煙

島根県 藤原 鈴江

信じ切る心へ朝の窓をあけ

どのへんでこうも纏れた糸車

消えるから虹はあまきず色を見せ

自転車のチェーン切れるとは自転車屋

うっとり陽ざしけだるい残り柿

唐津市 仁部 四郎

他人へはカネで測った迷い事

常識に富んで批判にまどわされ

ここだけの話に顔がほころびる

条件が消化不良で負け戦

ふた親が待っていそうな曲角

唐津市 浜本 義美

退院へ我が家の夜があたたかし

舊空今日も感謝の汗を拭く

曳山囃子遠くに聞いて逢う二人

雨は静かに忘れた筈の人憶う

ボーナスもない定年の背が冷える

唐津市 久保 正敏

午前二時女一人の鍵の冷え

ライバルの風にも廻る風車

すぐに脱ぐなかな脱がぬのも女

峰打ちの温情知らぬ逆恨み

才女とは度し難きかな愛を説く

唐津市 田口 虹汀

本州も知らずハワイの旅に出る

紹の簾かすかに秋の息吹き聞く

昼と夜新宿の顔裏表

苦を楽に置きかえて見る千羽鶴

九州も浪花も旅の味は味

西宮市 野呂 鶴汀

お人好し顔一杯に笑いこけ

片意地へ失う物の大きさよ



野良犬は迷路に來てもあわてない  
せめてもの慰め僕も病んでます  
もう帰るかと思えば坐る話し好き

西宮市 林 はつ 絵

約束が秋の歩幅を弾ませる  
爽やかにまた来年へ賭をする  
たましいの毛先も見せずふみ絵踏む  
白粥の一口ごとに神宿る  
デジタルが冷たく暮れの陽を刻む

西宮市 妹 尾 春 江

武家屋敷歩けば維新のシルエツト（萩）  
夕陽かなし乙女峠に膝まずく  
（津和野）  
あの日から秋の夕陽が好きになり  
喜寿へきて姉妹げんかの羨まし  
栄転を告げる弟髪薄く

西宮市 杉 浦 婦美子

逆光線に佇てばまだまだ美人です  
いい事が今日は聴けそう受話器拭く  
止り木で自分の時間買うてます  
一冊の出会いへ天から届く声  
張り替えた障子に深いふかい秋

尼崎市 奥 山 美智子

赤トンボあしたのことは問わずおく  
自分から自分を逃げてゆく弱さ  
たまゆらの思いへ萩が咲きこぼれ

したたかに生きる女の座りだこ  
昼の月男心は解き難し

尼崎市 角 野 かず子

下心隠しきれない荷が届く  
造反をおくに訛りが説き伏せる  
わが町の風の旨さで添いとげる  
島に橋かかってからの朝寝坊  
欲のない子に四捨五人がむつかしい

富田林市 田 形 美 緒

中国旅行にて

主婦の目は哀し民家を覗き込む  
歩いてた鶏並べあり自由市  
治安良し飯店の部屋カギがない  
はるばると逢いに来ましたパンダ園  
待つことに馴らされ馴れて旅終る

神戸市 山 口 美 穂

彼岸花きつちり彼岸に咲いてくれ  
雨蛙墓守りの如く今日も居る  
食欲へ一日のばしのダイエツト  
占いのカード吉が出るまで繰っている  
秋の雨熱いコーヒーに思うこと

岸和田市 原 さよ子

歩かねばご利益ないと二里の道  
内職を励ましてくれる虫の声  
コスモスの花に写経の眼を休め

試験曳き朝からそわそわ祭好き  
好きなこと出来る余生を感謝する

岸和田市 古野 ひで

無愛想な男が呉れたおもいやり

又会える楽しみ言葉残しとく

老いてなお甘い言葉にほだされる

再会にひとり芝居と言う焦り

迷信も老母が言うから信じよう

岸和田市 島 崎 富志子

スチームアイロン熱い吐息をはいてくる

聞きあきたとは言えぬ八十路の母の愚痴

状差しの文の私語聞く長い夜

羽のばす女が増えたツアーの旅

自己暗示かけて一日乗りこえる

大阪市 北 勝 美

盛り売りの梨にも老いの挫折感

罰当ることを教えた母明治

保険にも入れぬ齢よ秋ざくら

木屋の香りへ朝の深呼吸

水晶米値段のことは書いてない

守口市 野 呂 右 近

食養生夫唱婦随で減らす塩

亡父母の齢を越えたと祝われる

信じ切り券売機の釣銭たしかめず

方便の嘘さえ言えぬ律義者

腹八分の掟を破る秋の天

大阪市 大野 武 太

犯人の悪のり憎むインタビュー

代筆を頼む眼鏡のせいにして

時たまに明るいこともきく受話器

十二月ペンキの色も変えて見る

赤ちゃんの泣声もきこえる保健所で

大阪市 長谷川 春 蘭

さすが秋澄み切る空に昼の月

孫の期待ぬか喜びにならぬ様

スズメバチ神経過敏が人を射し

棒グラフ伸ばせる腕を持ちながら

生いたちを何処で狂たか御曹子

大阪市 山 根 いつを

あなかしこ長生きするも疎まれず

孝行もせずにと娘ふともらし

さてその後伴せうすき友なれば

言訳のいの字もいわず妻厨

いつまでも長居はできぬ世は世でも

大阪市 柳 原 静 香

秋の天母の足音弾み出す

彼岸花故郷の便り聞きもらし

米を研ぐリズムも弾む旅前夜

へそくりを夫に知られた旅仕度

旅の宿神経痛は忘れられ

大阪市 杉本 智慧子

赤帽白帽無邪気に跳ねて陽が光る

秋色濃し野立茶碗の肌ざわり

見つめれば吐息聴こえる技芸天（秋篠寺）

指先の白さたしかに深む秋

膝抱いて寂しがりやの十二月

大阪市 中西 兼治郎

相談を叱り相談受けてやり

仲人の言葉にうそのない美人

階段へ好意が寄った車椅子

ナイターのテレビ名月から写し

ホームランも台風なみに号で呼び

羽曳野市 中村 優

秋風のなぞが解けない電卓器

約束を破る踏絵が置いてある

糸を巻く手まりの嵩に母の唄

A席で寛美の説法きちと聴く

六法の誤読が恐い裁判所

羽曳野市 佐野 白水

半袖で来た紀三井寺に秋の風

健啖な米寿二の膳空にする

紀三井寺の桜の向うは秋の海

子と別居老人いろはから始め

草取りをサボる老女のゲートボール

出雲市 園山 多賀子

曼珠沙華自己燃焼の彩に咲く

黄に咲いてカンナもやっぱり倦怠期

聞き上手年よりの回顧談

尼の足袋純潔を穿く挫折感

貧乏ゆすりやっぱりあなたは焦ってる

出雲市 吉岡 きみえ

立話タイムカードが急きたてる

ぐらついた歯還暦の夜の冷え

どことなく阿呆に近い顔になり

職なくて痩せた男の入歯鳴る

コスモスの素直さ風に身をまかせ

浜田市 佐々木 裕

熟年とおだてられてる空財布

年齢届くゲートボールのステイックに

夫婦酒無事乗り切った倦怠期

美容体操貴方いるからするという

一方の将は側近多く持ち

浜田市 中川 幸一

弥次馬の中のひとりわたしです

老化現象おんなじことを今日も言う

七癖のうちのひとつで逮捕され

根がなくて花を咲かせる週刊誌

跳び越える勇気がなくて廻り道

米子市 林 荒介

追伸の半分残す昼の月

昼の月あれは親爺の忘れ物  
春風を待たずに去年の芽がうごく  
空き缶のころがり止まぬ昼の街  
百本の杉植え了えて百の天

岡山市 行吉照路

割り勘と師の命令に勇み立ち  
日に焼けた男の貌が鏡脱ぐ  
雑兵の歩です定年骨軋む  
涙腺が太くなつて六十路  
ブリズムの裏に汚ない面が出る

岡山市 花田たけ志

矢印の方には行かぬ現代っ子  
満足度千差万別のさしがいる  
来年の役が行かせる運動会  
近道へ逃げずに生きて幅ができ  
人生の相談所詮は己れだけ

岡山市 岩道博友

事務服を脱いで綺麗な夕日見る  
落し穴見付けて仮面のままでいる  
再就職白旗持った気で勤め  
許すとも言わず悟れと受話器置く  
不揃いの年齢並べて写真撮る

鳥取県 中原諷人

柿熟れて九代目の産声待たす  
水甕には澄みきる空を溜めました

もう一本の松葉杖から別れる歩  
寒い夜は貴女へ首つたけになる  
文化人の貌が造幣局を発つ

鳥根県 森山盛桜

嘘に嘘塗れば真赤な爪になる  
銀行の裏に落ちて子守唄  
ビーナスの線へ一瞥くれて過ぎ  
夕焼けも失意の色に見えて来る  
逢いに行く素振りも見せぬソバの音

豊中市 田中正坊

中国の旅

空港に立つ中国の土に立つ  
サルビアと金文字に映ゆ魯迅像  
軟座車でゆつたりと飲む中国茶  
服務員冷たく麦酒なまぬくし  
漓江下り蘇州美人と肩を寄せ

樞原市 岩井本蔭棒

資産みな積もう若さが買えるなら  
悪人が優遇される黙秘権  
地震禍の後でどうこう専門家  
権利主張する時人は豚になる  
実力の不足が搦手へ回る

河内長野市 井上喜醉

暖かい噂でホットな妻の胸  
保険屋は賭かりまつせ長寿国



善人の汗を知つて登山靴

ゲートボール熱戦すめばやはり酒

逆らえば権力おかしな理屈こね

西条市 片山明水

ふるさとをひと色で描く秋の暮

片方の耳で女房の愚痴を聞く

菊日和職安までのバスを待つ

内側の傷みがひどい母の羽根

姥捨山の地図がタンスの奥にある

和泉市 岡井やすお

桶越しに米ソの巨頭振手する

大脱税埋めにマル優外しそう

秋祭りと月仕事手に付かず

マツタケ狩お疲れさんを収穫に

気が付けば小言幸兵衛になっていた

境港市 細木歳栄

この花にすこし不足な花言葉

この帯にわたしの手足しばらく

帳尻が合うも合わぬも無い生活

落ち込んでたまるかネアカの性とおす

虫達の伴奏の中でのデート

兵庫県 藤後実男

言い切った夜がなかなか寝つかれず

各部屋にテレビを置いた孤独感

髪切つてきれいさっぱり名を忘れ

手術後は生きることしか考えず

相部屋で笑う患者に泣く患者

姫路市 松浦輝月

手術待ち無口に時計見る家族

古稀の旅孫に引かれる掌の温み

一線を守り飛び乗る終電車

甘言の罠に落ちゆく胸さわぎ

黒猫が揺れる心を追つて来る

今治市 越智一水

十三夜月冷々としてまるい

北山しぐれそれもまたよし京の旅

童心に妻と返つて息が合い

燃える秋しつとり歩くも歳なるか

芦屋市 竹中綾珠

テニスコート青春の恋育てられ

スクラップになりたくないから本を読む

この頃の散歩の道の草紅葉

勧善懲悪の丁髷テレビ見てあかす

神戸市 仲 どんたく

履歴書のように個展を見てもらい

舞扇翳して立てば老いの艶

もどかしい二人の距離の朧月

熟年の個展が古稀を吹っ飛ばす

大東市 土岐 トク子

芒穂のさやさや秋の声がする

孫に問い孫に叱られ他愛なし  
ラマーズ法母は体験ものがたり  
独りきく演歌の胸にすきま風

東大阪市 崎山美子

齒車の一つとしての自負がある

適齡期売手と買手が逆になり

お月様にうっかり見られた忍び逢い

月並なお世辞へ宴の座がしらけ

貝塚市 行天千代

朝顔の大きな種に夏終る

昨日真夏日今日涼風にうろたえる

角砂糖溶けて親子の温かさ

天高く減量するに辛い秋

岸和田市 清野こう

古里の墓へ姉妹久しぶり

すばらしい明日を約する大夕陽

老い達者喧嘩も幸と思う日々

入院の夫婦寄り合うベッド

岸和田市 芳地狸村

おしゃべりな口が女の彩を消し

合掌に母の面影蘇る

お互いに許す心でする対話

お祭りにカレーが出てくる子沢山

岸和田市 吉水照江

終身の保険満期を先に取る

年老いて祖母の仕草が今わかる  
大根の煮ている香い秋の味  
皮膚老化皺の絵柄は地図のよう

大阪府 欄蘭

義を忘れ筋の通らぬ事ばかり

羨望もちよっぱり新築はめておき

真珠湾の戦果に酔った日の若さ

七十のまだ力あり餅を掲ぎ

大阪府 坂本仙吉郎

墓参り七十過ぎた子が五人

たどり来てガツカリ祖谷のかずら橋

祖谷までも道幅広し定期バス

錦秋に時雨れる祖谷のかずら橋

大阪府 鍛原千里

だまし舟騙すつもりがだまされる

指輪くるりと廻って罪を問う

忘れたくないので憎みつづけてる

八人目の敵になるかや冬の月

大阪府 吐田公一

健康に恵まれず余生もてあまし

雑兵の汗が染いた天守閣

熱心に保険すすめる怖い妻

母と子のドラマ乳房の匂いから

大阪府 坂口公子

土に生き四季くみあげるつるべかな

化け学の四季へ貧しい瓜の貌

寝転んで夢を見ている意気地なし

女丈夫のどこか哀しい高笑い

西宮市 草刈 墮 駄

読経する坊主を想えば死に切れず

グーウィン虫の擬態は神まかせ

虫めがね見たものだけを大きくし

観音の合掌とマリアの祈りの掌

西宮市 津山 冬子

着て見ると意外に似合う赤い服

試着する服を鏡にすすめられ

耳鳴りが秋の余生を愚痴にさせ

毎年を欠かさぬ郷里の秋届く

姫路市 大原 葉香

チアガール獣があなたねらってる

紙ヒコーキソビエトまでもとんで行け

地に埋もれ大根太ることを知り

秋天の高さが虚無になれと言う

姫路市 丁坪 サワ子

コアラ来てバンダ エリマキかすみけり

祭り季姑同士の寿し自慢

孫よりも家中湧いて運動会

松茸は絵にみるだけのものとなり

岡山市 井上 柳五郎

満中陰見栄を張るなと亡父の声

中心の輪から外れて秋陽落つ

ときどきは目を見張らせる凡夫の勇

団交へ金魚の糞たち騒ぐ

唐津市 木塚 素石

行先をばかして紅葉狩りにけり

親戚の個性かみしむ葬儀の日

建て前と本音を市民知りたがる

タバコ止め酒も減らして喜寿祝い

枚方市 稲葉 星斗

カタコトの研修生は和室好き

外人のドウモアリガト良く通じ

外人の目に不思議な常夜燈

湯どうふのひと味賞めて嵯峨暮れる

和歌山市 富上 光代

帰り際本音らしきを漏らされる

片方の耳だけ貸して義理を詰め

子の家で坐る場探し落ちつかず

お留守番雨の音まで寂し過ぎ

和歌山県 天満 三千代

一泊二日観光かねた寺参り

清水の舞台に優る水の味

湖に映える大津の日の出拝む老い

一期一会道連れ手をふり下山する

鳥取県 新家 まさる

みぞおちに夕陽残して暮れにけり

野の駅で吹かれていますのは俺か  
目標はとうに忘れた流れ玉  
一徹な汗には勝てぬインテリ―

島根県

岸 本 輝 水

人間を小莫迦にしてか秋の蠅  
風鈴の真下でごろ寝をさめる猫  
折込みは妻の献立メモ用紙  
古傷に触って見たい妻の顔

尼崎市

伊 藤 春 子

砂時計暗示をかける鬼がいる  
修羅何度埃かぶった六法書  
極道が母に詫びてるお燈明  
すり切れた辞書へ亡夫の声を聞く

寝屋川市

堀 江 光 子

一人旅古い渡しを探し当て  
咳一つして亡父に似た人ベンチに居  
秋深し留守番電話なっている  
集まってまたちりぢりに雲の旅

奈良県

宮 川 古 都 路

一しずく七難の川海に果て  
秋茄子の馬に子供の知恵がある  
山小屋で気疲れ取れたランプの灯  
非常出口事故がないので開かずの戸

交野市

山 本 テ ル ミ

鈴虫よ育ての親は私なの

栗飯がメニューに入る古都の秋  
御所拝観砂利ふむ靴は秋の音  
生きねばのどん欲はない老夫婦

豊中市 上 田 登 志 実

句碑の石句意考えて選んだろ  
新旧の暦で足らず西洋暦  
週一度落語を聞きに行く余生  
ユニホーム揃えて走る老夫婦

藪内千代子著

### 句集 千 代 子

昭和の初期から川柳をはじめ、女性ばかりの「い  
ざよい会」を設立して五十年になる同会会長の句集。  
お人柄通りの優しく風格のある作品が多い。

ソーダ水向こう岸から灯がともり

三の糸切れたも余技のおもしろさ

母の咳起きてあげようかと思ひ

郵便はまだか箒目美しい

古手紙まだ返せない恩一つ

好きな人お酒に弱いところ好き

ろうそくの炎に運の無い手相

猫抱いて女冷たい返事する

じゃんけんはいつでも負ける大きい手

すらすらと話が運ぶ落し穴



— 同人 吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

舟 木 与 根 一

ほっとする位置に小さな椅子を置く

小 出 智 子

ほっとする位置には安らぎがあります。小さな椅子には、妻として母としてのささやかな休息があります。

ああジンタ古い柳詠を読んでいる

小 島 蘭 幸

昔懐しいメロディが聞こえます。そしてジンは衷愁を奏でます。

コスモスをこらん喧嘩はもうようよう

小 谷 仙 山

二人ともながあい黙秘権でした。コスモスがピツリ効いています。

カルテの字すらすらと癌に見え

遠 山 可 住

癌と判れば、殊更さりげなく振舞う。すらすらに医者の横顔が見えます。払えど消せぬ疑心暗鬼。

秋の実が長い昔ばなしする

宮 西 弥 生

秋の実には古里の味があり、物語があります。歳取るほどに思い出話は身が入る。

ごみの箱だからきれいに洗つとく

奥 田 み つ 子

この頃こんな人が少なくなりました。精神訓話とは違つ穿ちの味です。

若返る呪文を教えてくれるひと

西 川 景 子

やつぱり—そんな人居たんですか。少うし妬けました。呪文は良かった。

七十五日耐えた噂の髪洗う

波 多 野 五 楽 庵

下の五は鮮やか。心機一転は洗い流すに限ります。

田を売ると大きな指が邪魔になる

片 上 明 水

根っからの百姓では転職の門も狭い。不細工な指が悔まれる。邪魔の誇張は面白い。

地下足袋の仲間で四季の花が好き

高 橋 操 子

純朴な素晴らしき仲間たち。

むつかしいことは言わないわらび餅

岩 田 美 代

素朴な心で賞味しよう。

目刺し焼く幸せ少しおろそかに

春 城 年 代

小さな幸せだから大切に。たとう紙へ今日の煩惱たたみ込む

辻 文 平

着物は女こころをくすぐる。

男三人豚の顔して飲んでゐる

松 岡 三 吉

これは左党に対する痛烈な風刺。階段の一番下を踏みはずし

藤 村 宏 子

油断です。終りはきつちりしましょうね。鶴の一声にころりと口説かれた

八 木 千 代

ほのかな期待へB面磨いとく

松 川 杜 的

大空が青い吸取紙になり

川 端 柳 子

音信の絶えた男の傘一本

斎 藤 通 風

逃げ腰でねずみ花火に火を点ける

藤 田 泰 子

兄貴より上手になろう逆上り

林 荒 介

ユニークな表現に惹かれました。芸術ですね。

おばはんを抱く豆腐屋の冷たい手

谷 垣 史 好

気兼ねなく大きなクシャミして我が家

堀 江 芳 子

探険隊転んでペンギン気を許し

西 村 花 村

ラブシーン中ゴキブリ天国行きはった

宮 尾 あ い き

思わず相好を崩してしまいました。楽しくしてくれる句です。

# 自選集

## 山内静水

表彰狀馬鹿に徹して三十年  
親類にまだなり切れぬ嫁の里  
なまじつか走れてタツチアウトされ  
盗人のように窓から入る破目となり  
誰にでも好かれる大事な旦那さま

## 水粉千翁

秋の彩探し疲れてありがとう  
しのび寄る登音高く虫の秋  
計算が外れてもよし余生踏む  
晩鐘に乗る生甲斐の重さかな  
わがものにする余生かな雪月花

## 金井文秋

新紙幣へ洗脳される両替機  
敵もさるもの泣きどころ知っている

## 市場没食子

自分の馬鹿を知っているから馬鹿やない  
スペースに融通の利くペンを持つ  
うさぎ小屋に中流が住むお国柄

長命の微笑曾孫が肩叩く  
ボケてても老妻洗濯もし飯も炊く

大相撲(二句)

蔵前の最後の場所の大波瀾  
小錦旋風楽で琴風やつと止め

悼む潮花氏

師の許へ惜しい柳が逝く残暑

空想は痺れるまでの肱枕

サンマ焼く煙に露地は暮れ易い  
ボールペン楽書をして書き始め

## 月原宵明

蟬螂の斧振りあげたままの死期

胆石手術

胆のうにいつから抱いた黒い石

若き日の潮花君と

ちいささを託ち乍らにもつ絆

奈良までを歩き通して月と逢う

兵役をどっちも丙でパスしたり

カフェーでコーヒ長居をして笑う

嫁はんをもろた話でぜんざい屋

箸置に箸おいたまま待たされる

弁当をひらいて敵意消えている

そこそこの煩惱でよし虫死ぬ

風吹けば昔栄えた寺のあと

秋彼岸 花屋の花が人を恋う

脱税をしなけりや馬鹿のような国

一生に嬉し涙は何度ある

七十になっても酒にまだ飲まれ

唐辛子かっかつかつという赤さ

### 黒川紫香

鼻先を番トンボにかすめられ

還暦や日々日曜となるも良し

とぼけてるような答えて的を射る

勝利ではないライバルの不幸見る

有名校だから馬鹿げた事も出来

福祉どこではないと言われる世が迫り

限りなく試行錯誤の道を追う

大陸を彷徨う遍路の夢ばかり

犇めきは有象無象の嫉妬かも

遍路から帰れば灰汁が抜けている

年の暮父の思想を書いておく

奇巖重疊影かと思れば影の山

岸は五百羅漢のメリーゴーラウンド

水牛に雨笠煙蓑の情あり

秋の月餅春風点心店にありや

妻に買う小さい翡翠の色定め

妻に買う小さい翡翠の色定め

### 工藤甲吉

### 正本水客

### 野村多茂津

### 大矢十郎

### 橘高薫風

川柳太平記 (79)

川柳の群像

紀

二山

東野 大八

山紫水明の禁裏王城の地として、静寂な伝統のなかに生い育った京都は、前旬附の初期に発展し、幾多の雑俳書を刊行した環境だけに柳壇の流れは、保守的伝統を基盤に、いち早く新川柳の興隆もみられ、阪神地区に劣らぬ実勢を誇示して今日に及んだ。

この近代川柳の大御所格の柳人は齋藤松窓（一八八二—一九四五）であろう。明治39年小島六厘坊が大阪で興した「新編柳樽」を改題した「葉柳」設立同人で参加、その編集人ともなり当百、日車、半文銭、路郎らと活躍。大正二年創刊された関西川柳社の「番傘」の設立同人でもあった。いわば京都における新川柳の先達はこの松窓であったが、彼のスタートは大阪であった。

京都における柳誌の草分けは「訝」（土岐光・明治44年刊）で久良伎社系の京都柳友会が支援し伝統川柳を掲げた。ところがその翌年の明治45年に「水鳥」（本田溪花坊）が出現し、のち平安川柳社が生れた。このあと多田孤山、藤本蘭華（福造）、小西富士子、後藤千枝らによる京都川柳社が結成され「きおん」（大正3年刊）を出した。

しかしこうした京都川柳界も新川柳派の台頭となり、大正7年ごろから伝統派による「大文字」「擬宝珠」などが「きおん」を解体し分裂したのに対し、新川柳派は「紙衣」「馬場緑天・大正8年刊」が松窓、孤山、半文銭、富士子らを擁して発刊され新傾向川柳の旗幟を明らかにした。京都川柳界の戦前における

最盛期はこの頃と推定してよさそうだ。

こうして大正中頃から昭和初年にかけて、幾多の柳誌が興亡し、やがて「京」（大正14年刊）の孤山、千枝、蘭華らの伝統派に対し、革新派は「対照」「紙魚」「川柳タイムス」「野菊」「木馬」を合同し、松窓を擁立した布部幸男らの「川柳街」（昭和5年刊）が誕生、大いに勢威を示した。

明治以降、京都の川柳界を担った多士済々の川柳群像の指導者的先輩としては、松窓、蘭華、富士子、千枝、幸男に池田柳舟、本田溪花坊の名が挙げられるけれども、この連中によく伍した紀二山を京都柳界の生きたモデルケースとして挙げておきたい。

明治も末から大正にかけて中江一山という目立たない川柳人がいた。

「夏の夜の須磨の電車の揺れ心地 一山  
—見送りぬそれが別れとなりしかな—  
—といった句が残っている。この一山の実弟が二山である。

本名豊三郎。明治45年6月四条の木綿問屋中江家の次男に生れ、大正14年写真材料店紀家の養子に入る。作句は19歳頃から藤村青明、西田当百に師事。神戸の「ツバメ」（前田青岸・明治45年刊）の同人。京都では「水鳥」



に参加。「大文字」同人を経て福造（蘭華）

千枝らと京都に柳社を創立した。久良伎、剣花坊、水府、三太郎、紋太と親交を結び、昭和32年平安川柳社創立同人にもなる。昭和39年山科に隠棲。昭和42年7月22日死去、享年75。法名顕蒼祥道豊山神定門。

右の略歴は昭和48年平安川柳社編の故人の遺句集「桐火鉢」に拠る。

— 桐火鉢京で育った指を見せ 二山

— 針を持つ手に母親の急に老け 〃

— マッチする女給の指の荒れをみる 〃

いかにも京だたみのような京都人らしい作品である。推察すれば二山の川柳人の関心は実兄一山譲りでその薫陶のように思われる。

「どんな縁故があったか知らないが、神戸花隈のお寺の向いの質屋で句会があり、二山は京都から参会していた。明治45年2月椿元紋太は、当時ツバメ句会へ出席して、それが柳界入りのはじめとなったらしく、その時が二山と初対面でもあったらしい。忽ち心やすくなり、文さん、文やん（紋太の本名）とか呼んでいたとの話であるから、ひょっとしたらそれより先からの知り合いで、二山が紋太を柳界に誘ったのかもしれない。紋太は二山に兄事していた。（略）

— 居留地の日なたはちぎれちぎれなり

二山のこの句を見ても、二山が神戸になじんでいたことが想像される。（「ふあうすと」昭和48年6月「関西柳界の潮流」堀口塊人）

松窓も一山も阪神地区への渉外柳人としてのプラス面はかなりの比重を示していたことがわかる。松窓などは藤本福造（蘭華）と作句上かなり個人的対立感情を抱き合っていたらしい。だが二山は京風川柳で紋太にある程度作句上感化を与えていた点は、一つにはその円満洒脱な人柄によるものと思われる。

だがこの二山に対し「川柳平安（昭和48年5月号）で北川絢一朗がつきのごとき注目すべき意見を述べている。

「さきごろ、紀二山遺句集（註・桐火鉢）を刊行するにあたって、故人が長年ノートしておかれた四千句近い作品を整理して感じたことは、句の価値はともかくとして、作品に表れる言葉、物の名称、しきたりなどあまりにも現在通用しがたいものの多いのにおどろきを喫した。

大正初期から昭和のいわゆるよき時代を背景に、故人独自の情緒でめんだる境地の句材に作られたものが多いいいもあろうが、わずか半世紀足らずのあいだに死語化した言葉

や、行事、家庭用具のいくつかまでが、もはや今日理解されなくなっていることに、その時代の大半を生きてきたわれわれ先輩の郷愁的なものが多少はあるにしても、いままさらながら時代の変転におもいを新たにさせられた。

川柳の本質論は別としても、明治以来の作品のほとんどががえりみられなくなっている昨今、もう一度先輩たちの遺産を吟味鑑賞することによって、現代作品とのギャップを見きわめ、今後の川柳のあり方に資するものがあれば活用する試みがなされてもよいのではないだろうか」

「私の最も信頼し、いつも忘れられぬ人に京都の紀二山君がいる。二十五歳からのつきあいので私と同年、あえは今も昔の話が出て懐かしい。二山君は京都人に似ぬ男らしさがある。お上手のないザックバラン調であるが、言葉に真実がこもっている。福造、千枝と二山のトリオで京都川柳社を永年支えたということはその人柄によろう」（「川柳雑誌」永遠の友二山「安川久留美」）

★次回は「岸本水府」

# 誹風柳多留廿六篇研究 (十八丁)

鈴木 黄・石田晋一・南 得二

小野 真孝・本多正範・石田成佳

大屋六郎・八木敬一・多田 光

故岡田 甫

294 一ツけん勝負井をつきこぼし

鈴木「けん」は「拳」ではないかと思つ。さらに「井をつきこぼし」の語から想像すると、現在でも時々見かける「拳酒」ではないかと思つ。

夢中で拳酒をして、思わず知らず井の中の酒をこぼしてしまつたと言ふ所か。拳の罰盃。

「つきこぼし」の「つき」は「突く」で「拳を打つ」の「打つ」との関連の中で「こぼす」意味を強めたもの。実際に拳であやまつて井を「突いた」のであらう。

八木 拳酒。

拳酒にかつて上戸のうらみ顔(小塩山)

多田「井」とあるから八木説か。

岡田 拳酒であらうが、ドンブリはもう少し考えたい。酒を井に入れる例ありや。あつたとして、「つきこぼし」は罰盃であるから酌きこぼすのか、突きこぼすのか。恐らく前者とは思ふが。

295 七種に伊勢屋もとほしかけを取

鈴木 いつもは爪をともして暮しているけんぼの伊勢屋でも、七種の一月七日には万病にかからぬ為に、ともしかけの爪の切初めをして七種爪を取つた。

いつも爪に火をともしているから、剪る爪がないだらうにというユーモアの句である。

南 賛。

七くさに遣りても長い爪をとり

一一・12

七ナくさに遣り手もおしいつめをとり

一四・26

多田 賛。

岡田 「とほしかけ」の語の追求なし。次回までに書いて下さい。

296 乳を貰ふ内栗虫を抱て居ル

鈴木 「栗虫」は、辞典によると、クリシギ

ゾウムシの幼虫。ほぼ内筒形で甚だ肥大する  
とあり、もう一つの意味に、嬰兒の肥えて美  
しきをたとえて言う、とある。

乳貰いの間、栗虫のように肥えている先様  
の子をだいている、という句。

やせこけてていしゆ赤子をだいて居る

一七・42

南〓賛。

乳もらひハあつちの子をハおもたがり

宝二二・仁5

こころぎに栗虫の乳をかわかされ

二四・94

多田〓賛。歌舞伎「お染久松色説販」に、「こ  
れなアこちは此様な、くりく栗虫見るよな  
子迄有る」とある。

岡田〓賛。

297 手を出して足をいたゞいたハ子房

鈴木〓「子房」は張良。張良は漢代の人、字  
は子房。其先は韓人。韓のために秦に仇を報  
ぜんとして始皇帝を博浪沙に狙撃し、後、高  
祖に従い、天下統一に功あり、留候に封ぜら  
る。

張良が圮橋の近くで黄衣の老人の沓を二度  
拾ってやったお礼として太公望の兵書を受け、

これを研究して兵法の奥儀を会得。

近松の浄瑠璃「忠臣蔵」の中に、「手を出  
して足をいたゞく章魚肴」という一節がある  
が、この文句取りであらう。「手を出して足  
をいたゞく足袋の礼（四八・10）」の句もあ  
る。

本句は、三度橋下に落した沓を拾って黄衣  
の老人（黄石公）にはかせてあげたという故  
事を詠んだもの。

沓を落したと黄色な声で言 二四・91

多田〓賛。「手」と「足」を並べたもの。後  
期にはだんだんにこういうのが多くなる。

岡田〓「手を出して足を頂く」という俚諺、  
そのもとは「忠臣蔵」かどうか？お調べ下さ  
い。もう少し古くはないか。

298 暮の文てへげへあかんべへをされ

鈴木〓川柳で「暮の文」といえば、遊女が馴  
染客に出す年の暮の無心の手紙のことをいう。  
本句、読んだままの句。

くれの文こまつたものと封をきり 玉12  
くれの文今死ますと書て来る 拾七・15  
くれの文いやなきみだと封を切

拾八・9

多田〓賛。

岡田〓同。

299 座頭の坊足袋屋の前でけつまつき

鈴木〓不明の句。ご教示下さい。

石田晋〓盲人が足袋屋の看板にぶちあたった  
と解したい。

小野〓不詳。けつまずくというからには、足  
許に何か邪魔なものが置いてあるのであらう。  
本多〓看板にぶちあたったとは解し難い。

多田〓不明。

岡田〓不明。もう一考したい。

300 三会目隣あるきをせずに乗る

鈴木〓遊里における△三会目▽は今迄にも随  
分と礎稿にもあつた。一度目は初会、二度目  
は裏、三度目は三会目で馴染になる。馴染に  
なると先ず専用の箸を作り、遊女が預り、客  
は床花を出す。この際やり手にも一分の祝儀  
を出すのが作法であつた。

句意は、このままであり、馴染客の所へ真  
直ぐにやつて来る。

多田〓賛。

岡田〓同。

上方前句付集の雄編

# 『明石人丸大明神三万句集』

(三)

阿達義雄

## ① 李坡点と川柳点

瓦竹堂李坡は雑俳の評者として、『俳諧心の種』(寛保二年)、『桜狩』(寛保三年)、『誹諧金笠』(寛保三年)、『旅硯』(延享元年)、『明石人丸大明神三万句集』(延享四年)等、その名を見ているので、寛保・延享の頃、大阪又は堺などの前句付万句合界で有名な人物であったと考えられるが、誹諧大辞典などでは全く之に触れてはいない。

しかし、李坡撰の『明石人丸大明神三万句集』などから考えてみると、松木淡々の

『俳諧高点附句集』の流行に對峙して、上方前句附の盛況の一翼を担うと共に、京の雲鼓系の前句附に對して、大阪系の前句附の特色を助長し、延いては江戸の前句附(万句合)にも少なからぬ影響を与えたもののように考えられる。

そして、その傾向を最もよく示しているのは恐らく『明石人丸大明神三万句集』であろう。本書はその勝句九百句を収めたものであって、前句と共に、四季句(発句)、小倉、折句、面々笠などの出題が見られるが、ここに主として収められているのは前

句附であり、これ等の句の傾向を考えてみると、京都系の雲鼓門の句とは異なり、大阪系の前句附の特徴が見られ、談林系統の前句附であったと推定することができる。

本書について特に注意されることは、前句(題)が四十六も提出されていて、江戸万句合の前句題の漸減的傾向に對し、對蹠的な姿を見せていることと、江戸万句合には次第に衰え、川柳評万句合などには全く見ることの出来ない五七五の前句題もあって、短句が盛んに作られていたということである。



なお、仔細に調べてみると、ここには宝

暦五年江戸板の湖月撰『あづまからげ』や川柳評万句合の先蹤と考えられる幾つかの句が発見されるばかりでなく、この書の中から、宝暦三年大阪板の『折句式大成』に採られている句も見られるなど、雑俳史上重要な地位を占めていることが知られる。

酷似句については後に述べることにして、先ず同想句の一例を挙げてみると、「うき世じゃくく」という前句に附けた句に、

青黒う父の腕に残る母 (下二〇)

というのが見られるが、これは川柳評万句合の宝暦十三年礼印に見られる前句「命なりけりく」に附けられた

母の名ハ親仁のうでにしなびて居

(宝暦一三礼三)

とその想が似ているので、後者は前者からヒントを得て作った句ではないかと思われる。

又、そうでなかったとしても、この二句は、上方の李坡点と、江戸の川柳点との句風の相違を示すものとして、注意すべきも

のであろう。

すなわち、前者は表現的には殆んど技巧が認められず、名詞句として述べられているだけである。ただ、この句では「青黒う」という語の中に、文身の時間的推移が読み取られる程度であり、含蓄的ではあるが印象的な表現ではなかった。

然るに川柳点では、入れ墨にされた母の名を主語として、「青黒さ」を言外に含ませ「親仁のうでに萎びて居」として、遠い過去の情熱と肉体の衰えを対照的に印象づけこれをさりげない日常生活の中から穿ちとして掘り出している。

視点がいずれも、その息子の立場であることから考えてみても、川柳点の句は李坡点から暗示を受けた句ではないかと思われる。

川柳点の「萎びて居」は、李坡点の「青黒う……残る」よりは滑稽感が増殖されている。又、句調としても、李坡点の名詞句は上品ではあるが、直線的で少々重く、しいのに反し、川柳点では軽快で曲線的で

あり、リズムミカルになっている。

遊女が客への心中立に、二の腕へその客の名を彫る「いれぼくろ」(入れ墨)の句は、李坡点の中に、

文字に皺よりし病後の入痣

(明石人丸大明神三万句集・下三)

肥るほど太う成りたり入レ痣

(家原文珠堂奉納五千句集・一)

などと見えているが、前者は「入痣」という名詞に修飾語をつけた名詞句であつて、表現上から見ると、「青黒う」の句と同巧である。

李坡点には着想において見るべきものがあり、川柳点には、これ等の先行句の着想を採りながら、更に趣向を凝らして優れた句にしたものがかなり多い。

勿論、ハメ句として殆んど其の儘採ったものも見られる。

(つづく)



黒川紫香選

高槻市 竹内 花代子

尼崎市 田中 晴子

逝く日とは知らず亡夫の髭を剃り  
幸せを癌細胞にさらわれる

これからは私一人の般若経

形見分けどなたも合わぬ亡夫の服  
悪戯なブザーへ開けたあほらしさ

尼崎市 福田 礼子

灯台守は海の素顔を知っている

美しい言葉で弱味突いてくる

月はもうおとき話をしないだろう

禁猟区月と女が冴えてくる

おみくじの凶から貰う挑戦状

八尾市 高杉 千歩

夏の暑さ口癖にして十二月

ひと言がグラスに未練口紅のあと

夜半時雨夢のつづきをせかさされる

バラ病んで自画像無常冬の蝶

血縁の町ひっそりと宿の下駄

米櫃が空っぽになる日の負い目

泥靴にかぞえきれない借りがある

言うことが言えず口笛弱く吹く

髭面のなんとももろい涙壺

道しるべ信じて山の背をあるく

名古屋市 藤井 高子

日めくりの薄さを風がもてあそぶ

ローヒール選って恋風はるかなり

拘束を解かれ無職の欄に〇

てっぺんに何が見えるか縄梯子

「あんたには着てほしくない」と毛皮言う

大阪市 藤森 小雅子

昼の月種なし葡萄に似た男

盲導犬利口そうな顔で寝る

小利口な女は薄い化粧する

イヤリング男は同じことを訊く

胸襟を開けばボトル既に空き

藤井寺市 赤木和子

好きという言葉ブーケにして贈る

飛石のここから先は冬の景

冬天を貫くように吉野杉

宣戦布告そんな握手のようでした

堕ちるかも知れぬ林檎だ触れてみよ

大阪市 清水康恵

秋風に気になる事を聞かされる

ドラマにはならない日記の一ページ

ジョーカーを持っているのはいつも母

枯野から五百羅漢の私語が舞う

道しるべ少女素直について行く

宝塚市 丸山よし津

秋雨の電車樟脳の匂い乗る

四捨五入のいつも五に在る運の良さ

宅急便子の宛先はそらんじる

赤信号婦警の笛に叱られる

鬱の日は鬱の儘いる意気地なし

東予市 小山悠泉

札束を読む職僕に金がない

かも知れぬ影におびえるレントゲン

こつこつと休む暇ない小商い

血統書も渡し小犬と別れの日

箸枕が聞いた政治の裏話

米子市 茂理高代

柿一つ残して冬の空となる

一願をかけて地蔵の頭まで  
独り者燃える椿を活けてまつ

定年にネクタイ山と残るだけ

塵一つない県庁で堅くなる

熊本県 大川幸子

一オクターブ低い言葉で口説かれる

ポケットベル待機ばかりでももの足りぬ

秋風へ邪魔とは何事扇風機

札束へ縁ない小銭がさわぎ出す

靴音へ胸はずませた日の日記

近江八幡市 前川千賀子

赤い風船わがふる里も売りに出す

みの虫の私語はだあれも聞き留めぬ

松茸はないが山栗子と拾う

不覚にも腹の空きだす偽病い

百舌鳥が来て秋の小道具揃う村

今治市 野村京子

耐え抜いた女の私語の吹き溜り

童話から抜けたふる里貧しすぎ

試してごらん少女の胸に愛がある

埋れ火を抱いて男に妥協せず

矢印ばかり追うて翔べない女です

和歌山市 福井桂香

緊張のあとの夜風で風邪を引き

月光をビルの谷間で忘れかけ

待つだけの物たりなさよ紅を引き

コーヒーがやたら優しいサンルーム  
ホーム炬燵置くと一氣に冬が来る

和歌山市

後藤正子

賑やかにお喋りをする早生みかん  
晩秋へ想いを残す葉鶏頭

不揃いに心惹かれる山の幸

落胆を見破っているレモンティー

御主人のお帰り家中動き出す

寝屋川市

平松かすみ

神様が少しとまどう缶ビール

白魔女のパワー画面から貰う

地下鉄で人間臭い風に逢う

二十年連れてる姑のマイペース

くすりにもならぬ話を聞いて上げ

熊本市

永田俊子

せっかちな電話にとぼけるオルゴール

教育勅語まだおぼえている律義

思い出にいつも邪魔する磨り硝子

チャンネルのどれも歌っている平和

熊本市

宇野昭代

信じてる背中へ引き金など引けぬ

貞淑な仮面の下のしたたかさ

カメラのいたずら美人に撮れちまい

バラバラにする氣か整骨荒々し

尼崎市

鈴木良征

銭湯の鏡はヌード見飽きてる

パレットに在ってはならぬ香が残り  
ポケットベル不用になって窓の席  
戦友の死が浮ぶ軍歌は唄わない

富山市

舟渡杏花

たまさかの逢う瀬つれない砂時計

代替り名石漬物用となり

表裏磨かれ美女が出来上り

本当の飢えは知らないゴミの山

尼崎市

丹下玉子

地下街の出口で秋の風に逢う

子が掲げる花火も見ずに父は逝く

盛装の少女がおんな匂わせる

秋晴れに知人の入選画嫁と見る

長岡京市

木本如洲

祭笛鱧の料理に母がくる

夏萩のはげしく散って堰の水

すこし疲れた畳に母の手内職

無料バス無縁な人の眼に出会う

京都市

松川芳子

細々と暮して女敵が無い

生き残る蚊へ少しの血を分ける

言い合って母の背にある孤独感

髪を梳く手間も短かく老いて行く

豊中市

満仲きく子

仲が良うて嫁姑の長電話

さんま焼く煙は出ないロースター



清流を蛇が泳いでゆく真昼  
この一年何をしてきた十二月

伊丹市 榎谷郁子

寒山寺テレビの様に撞いてみる

体制の違いを越えて可愛い娘

売り声がなくても売れる文字の国

桂林の墨絵の中に我も立つ

米子市 足立由美子

呼鈴へ母の合図を決めておく

内情を聞けば許せる気にもなり

秋空へダイナミックな夢描く

倅せは心許せる友多き

大阪市 上田柳影

子からメモ煙草やめたと書いてある

仏壇の立派さ前身唄はせる

編棒を止めて男かな女かな

ロボットへ日銭のつもりさす油

和歌山市 山川克子

浴衣着た母が女に見えた夜

マナ板は母の機嫌を知っている

聞くだけは聞いております母の耳

子等を皆母の味方にたせた父

羽曳野市 吉川寿美

一連托生病夫と摘えた白脚絆

地獄の底覗いて還った男下駄

シナリオを書き足す夫の薄い胸

母の日の亡母エプロンの白かりき

高槻市 笠嶋恵美子

豊作の柿鳥たちよ食べに来い

遺伝子に組み込ませたい整形美

舞い込んだ蠅追う妻のヒステリー

日の高いうちあれもしてこれもして

芦屋市 上田佳秋

このボトル空にしてから訣れよう

髪形を変えて訣れを言う女

熟年というには早いループタイ

薬代いるので医者へ行かぬ風邪

尼崎市 吉永伊三郎

「骨まで愛す」程に持てた唄を聞く

無頓着のようであまな男はん

白い旗男は腹に巻いている

ねんねこにでんでん太鼓添寝する

羽曳野市 天崎只士

幸せの絵本は妻が持っている

耐ハイの軽さ女を喋らせる

氣にすれば名前も家もみな悪い

罪深い噂が妻を夜叉にする

吹田市 井上照子

ロボットに首の不安をあおられる

カーテンをはずして洗う秋の朝

成長の証シタクトに合わぬ歌

新しい門出に過去を火にくべる

尼崎市 児玉歌子

届かない想いを飾る日記帳  
一番を守っていたい机の灯  
月一つ独占してる庭の池  
姑さんの弱気同居を匂わせる

鳥取県 中原 汲 香

教職の三十年を子等に炎す  
喜びが包みきれない唄となり  
赤い羽根つけ忘れして買いました  
自炊する厨おんなを寄せつけず

鳥取県 中原 みさ子

里帰り三食昼寝ほぐし過ぎ  
父の詩三十年の下積みで  
恵まれて今の倅せ見失う  
安らぎのダブルベッド買いかえる

大和高田市 岸 本 豊平次

衣更えて来た襟に赤い羽根  
セーターを腰に巻いてる若い街  
さつま芋もぐらも大きいのかから食べ  
襟足を見て追い越してみたくなり

枚方市 二 宮 山 久

人当り良いのか休日妻の客  
今日も又生きねばならぬ靴をはく  
欲のない話を友がつれてくる  
聞き上手いるから話とぎれない

大阪市 古 川 美津枝

八月三十一日午前四時頃

泥棒がくれた真夏の夜の夢  
とても楽しくて松茸上を買う  
絵日記は雨あめ降れふれ母さんと  
中流のかん声あげて土びんむし

和歌山市 神 平 狂 虎

人情に溺れて死線見つめてる  
砂時計の早さを知っている私  
いらだちを押える酒が切れてくる  
貝になる知恵はやっぱり母のもの

高石市 浅 野 房 子

ノアの方舟乗りたい時もある女  
女坂男に弱い過去を持ち  
年金の脛ノラ猫にかじられる  
夢のない男と女で長持ちし

尼崎市 山 田 保 蔵

理屈屋と飲んでは見たが酔わなんだ  
座ぶとんを裏がえしながら席ゆずる  
土地柄か橋の上でももの売れる  
幼稚園胸のリボンをうれしが

熊本市 高 野 宵 草

売った家解体されてかわいそう  
パイプぶかぶかまたも煙に巻く話  
お別れをいうハンカチを用意する  
気付いたら我が家へゆかぬバスに乗り

滋賀県 安 田 志 津

影だけが味方私に素直です

ライバルと決めて余計に好きになり

絵はがきで季節便りをくれる友

糞虫がぶらり干物邪魔をする

川西市 野村 静雄

芸事を仕込んで親にある打算

姑に嫁は喪服も見てもらい

可愛さもとくに過ぎた孫の数

老眼鏡かけて蚯蚓をつけてやる

寝屋川市 岸野 あやめ

何不足ないと見えてる遠眼鏡

主義主張通し明日は雨かしら

地獄耳老人ホームで幅きかせ

見かけとは違う人ねと評価され

守口市 森川 まさお

中年の女性に運動場を取られ

一番風呂の熱さチクチク肌をさす

寒い窓明けて雀の声入れる

電柱が斜め展覧会を出て

西宮市 山片 紀雄

庭の隅主役になった山椒の実

町内の名士が並ぶ赤い羽根

渡り鳥日本の旅はせわしかろ

本読んで区切りがつかぬ長トイレ

米子市 堀江 純子

音痴でもおぼえた歌に自負を持ち

白砂の浜に青春埋めて来る

策を練る男はいつも四面楚歌

耐える事知りつくしている紙人形

出雲市 落合 正江

秋夜長豆を煮てますコトコトと

栗の皮むけば秋が走り出す

夫に愚痴こぼしてやつと軽くなる

何事も笑って済ます座をさがす

和歌山市 桜井 千秀

母まねた電話父だけ騙されず

母恋う児晴衣着せても泣きじやくり

北風に種を託して木の眠り

五十坪地球の芯までうちのもの

西宮市 松本 一郎

人間の弱い心が酒に酔う

惜敗の流す涙は美しい

ピンチにはお金に化けたこのカメラ

年寄りを三人抱え長寿国

守口市 結城 君子

新居招待反感持った顔もあり

栗をむくロボットはまだ出ないかな

学歴で人生の坂越せますか

老眼鏡かけてじっくり萩の花

吹田市 茂見 よ志子

雨戸繰る手を休めさす月の冴え

正論を吐いたばかりに座が白け

ゴミの日にうっかり朝寝てんでこ舞い  
薬袋の中味確かめ出る医院

和歌山県 寺田裕美

泥吐いてシジミ明日を考えず

名門校出た風当たりにも惚れる

余り苗もらう畔道軍手脱ぐ

お隣の幸せもれる笑い声

唐津市 浜本ちよ

峠には峠の風が吹いている

投げやりな言葉の裏の温か味

少しばかりの上手がマイク離さない

神代からかかあ天下の国でした

熊本市 黒田緑

飄然とロマンに遠い顔で来る

忘れてはこまると鏡語りかけ

桎梏をはなれてぬるま湯に溶ける

埋めるのにホネ人生の以下余白

大阪市 布施サチコ

建前のポケットがある婦人服

香煙に舞台がかすむ追善能

警察の運動場の破れ堀

倉吉市 淡路ゆり子

影法師のようについて来る噂

平凡に暮れて秋刀魚が二匹焼け

泣き虫の子が放さない風の糸

鳥取県 羽津川公乃

喜びを語る言葉がリズムカル  
もうろうと記憶途切れて手術済み  
観念のまなこに麻酔の針太い

吹田市 栗谷春子

階段に腰かけること忘れてた

急な客駄菓子ひと役買うて出る

隠すほど深刻な過去もない私

青森県 福士トキ

未来像見ているような老母と座す

名句を作らんとすれば月笑う

また寒くなりましたよと仏間開け

弘前市 田中叶

鴉鳴いて過ぎる一つの村があり

解体屋雲一つなく晴れわたり

たった一人の弟好きな人ができ

鳥取県 灘尾民子

顔触れが揃い焼鳥匂い出す

途中下車出世コースを棒に振る

豊作に負けぬ休耕田の草

尼崎市 野瀬昌子

飽きもせずセールスマンに狙われる

くすり飲む白湯一口で足りている

この堀がつづいて欲しい二人連れ

和歌山市 森三枝子

春夏秋冬庭に咲かせて妻の幸

秋まきの種へひそかに期待かけ



うっかりと破れば孫の宝物

西宮市 秋元てる

底意地の悪い姑になりそうな

おぼつかなく歩いていると道聞かれ

ころころと小石を連れて波が引く

岡山県 山本玉恵

ベレー帽一寸あみだで酔いました

からませた指が夜風に又うずく

カラオケの合間を縫うて虫の声

兵庫県 森脇和子

裏切りのベンが重たい文机

菊を背にみんない顔幼な友

三面鏡流行おくれを笑ろている

長崎県 岩崎和子

指先のくせをボケツは知りつくし

梅干が赤く染まって母の味

打ち明けて曇りガラスは透きとおり

岡山県 戸田種子

ストレスに蹴飛ばす石が重すぎる

蔭口も耳に入って落ち着けず

七人の敵に刃向かう靴磨く

出雲市 小玉満江

だあまって牛が話を聞いて居た

病む孫は一人窓辺で鶴を折る

愚痴一つ聞かせて老婆安心し

米子市 光井玲子

姉だけが若い笑顔の亡母を知る

定退へ鍛えた体もてあまし

本当の言葉を貰う別れの日

羽曳野市 麻野幽玄

退院するそんな見舞いに行つときまひよ

何時頃からか傷負けをする薬指

胃カメラの結果知らないまま手術

岡山県 小林妻子

両の手に九人家族重すぎる

松茸を皆んな匂うてからしまい

何となく亡父の言葉が分りかけ

和歌山市 玉井豊太

吠え面を好きな女へ覗かせる

頼まれた留守居仏間に音を聞く

誤字ばかり並べ女の恨み文

大阪市 板東倫子

留守番も楽しき哉と玉露入れ

可愛いが孫の重さが背にこたえ

新米を松茸飯で賞味する

尼崎市 佐藤美代子

新しいスの子の香り湯は溢れ

許し合う同じ痛みの仲間達

袋菓子喰べてマンガのエンドマーク

羽曳野市 田中隆二

塔賞に見事に実る柿の種 (吉川寿美さん川柳塔賞受賞)

赤とんぼ恋の相手が見つからぬ

ほかほかも愛妻弁当には勝てぬ

大阪市 稲本 凡子

子沢山性格通りに脱いであり

愛犬に引っぱられつつ散歩道  
鼻動かして木犀見つけたり  
うらおもて束子のような妻でいる

押入で夢二が長い冬眠す

伊丹市 山崎 君子

男臭い男の涙は腹へ落ち

夏すぎて母の便りに虫が鳴く  
腰まげて車押す手はあせらない  
美しいお花晶の罨に落ち

八尾市 松下 蕉露

デザートに女房胃薬持つて来る

岡山県 伏見 すみれ

てこずった息子が一番役に立ち

平凡な愛でよかった共白髪  
愛のある家庭と分る笑い声  
倅せは百姓好きな子が一人

冷戦の女房他人行儀なり

高槻市 梁川 吉子

畦道で胸張って咲く彼岸花

泉南市 坂根 流水

木犀の触れれば落ちる日の香り

もどかしく柿の落ちるを待ちわびる  
グリコ犯損益勘定試算ずみ

泣けば泣き笑えば笑ってくれる月

八尾市 驚見 章

その先に浄土見るよな茜空

豊中市 小畑 幹子

流れ星月にさよなら言うように

美人でも写真嫌いと写真好き  
疲れてもガイドはしゃべり客眠る

難民に悲しい彩の星が降り

高槻市 芦田 静江

情熱が裾に消えた過疎の村

歌手にさえ田植が出来るコマージュル  
父に似て父の寿命に手が届き

許し合う心で築くマイホーム

秋の田に瑞穂の国を意識する

駐車禁止こも駐車場所がある

大阪市 町田 達子

神秘ともシンクロナイズに魅せられる

猫の恋夜露に濡れて朝帰り  
すすきの穂揺れてとんぼのひと休み

野良猫に気合い負けする散歩道

満ち足りた世に未だ残ってた不発弾

田辺市 染道 佳明

満ち足りた世に未だ残ってた不発弾

田辺市 染道 佳明

満ち足りた世に未だ残ってた不発弾

田辺市 染道 佳明

満ち足りた世に未だ残ってた不発弾

田辺市 染道 佳明

満ち足りた世に未だ残ってた不発弾

田辺市 染道 佳明

満ち足りた世に未だ残ってた不発弾

田辺市 染道 佳明

田辺市 染道 佳明

二階の灯気づかう母の塩ラーメン

吹田市 山田里子

天王寺経木に先祖とペット書く

怖そうな言葉を選ぶこけ威し  
教えるべきものが背にない父の影  
だまされた自分が写る壁鏡

娘なき我が家に咲いた赤いバラ

愛媛県 石手武

おくやみの後は喫茶へ友三人

新宮市 山田平和

情があるてんのじ村のぬくい風

山の子が海に大きな深呼吸  
四、五手先読んだ基石にあしらわれ  
たらい回し住所不定にされる老い

買って来た亀翌日が万年目

貝塚市 池田寿美子

条件がいいのか蟻にストがない

ハイキング赤松の下探してる  
方言をちよっぴり覚えローカル線

竹原市 岩本笑子

土曜日の声で学校行く子等よ

枯葉聞く越路吹雪はもういない

歓声の中で障害児ゴールイン

島根県 岩佐富子

先生と踊れてうれしい車椅子

竹原市 信本博子

いつからか仕舞い込んでた思いやり

嬉しきにとび出す下駄の片ちんば  
たこやきの匂いを運ぶ秋祭り

解からぬに耳傾けて聞くお経

洗濯をたたんで今日をしめくくる

夢の中自由にとんでる二十なり

秋はよし三方峠の七曲り

島根県 森山英子

水商売らしい女の裾さばき

秋晴れの鶴見緑地に鴨がいる  
海のある故郷若狭は斜陽線

斐伊川の釣り絵日記に充ちあふれ

生活が掛る柱は折れそう  
猫と犬わたしを知っていてくれる

覚えたと思う端から辞書を引き

角帽のなくて大学生の列

姫路市 人見翠記

敬老の日孫のセーター編み続け

病院へ頑固な父を連れてくる  
再会の意外に近いところに住み

我が庭で育てた花で墓詣で

逢えば又食事を共にしたい人

広島市 望月晴彦

職人の不思議法被のよく似合う

吹田市 西岡 豊

叱られて覚えた舞の祝い酒

鳥羽旅行船盛料理豪華版

舞いおえて一呼吸するさわやかさ

八尾市 椎尾 公子

美容院で読んだ週刊誌の話題です

配膳の音に病人快方期

親ゆずりの音痴でこまる宴です

大阪市 横山 為子

自信家の鼻先いつもぬれている

自信など有りませんわと爪みがく

はしやぎ過ぎ行かぬうちから旅疲れ

大洲市 横田 放人

運動会カメラの親も駆けどおし

呆けがきて血色のいい老母となり

障子張る背が老母に似てきたり

大阪市 山田 妙子

標的が有るのでしゃにむにつっぱしる

コスモスがゆれて女をとりもどす

句集はねぶとんを読んで

「はねぶとん」身につまされる涙壺

高知市 北川 竹萌

取ることの苦しい程の栗が熟れ

ドライブと洒落て故郷の栗拾い

穫れた栗売る気さらさら無い悩み

妻の留守一気にマンガ本を読む

スーパードコッそり掛けて見る眼鏡

母と娘の防衛がある物干場

鳥取県

福田 あや子

遅咲きの鶏頭蜂をひとり占め

眼の鱗落として家中はい廻り

離縁状つるべ落しに男枯れ

益田市

里本 たかし

食指動く頭がぐんぐん良くなる本

三人の子を持ち紫好きになる

かまきりに身構えられて転居する

米子市

宮本 佳女男

悟り度く太公望の真似もして

この病やっぱり因果なのかしら

幸先のよい茶柱に今朝を発つ

島根県

園山 世似

栗拾い山蚊が鼻へ紛れこみ

案山子にはすぎた着物が着せてあり

栗拾い栗にこつんと叩かれる

島根県

喜島 ノブ

味噌汁の香りの中に秋なすび

病院も秋の味覚の栗御飯

回診が済んだ途端に音がする

島根県

深田 ふさえ



原点にもどれば呼吸の合う二人  
肩おとす老父の背にある孤独

大阪市 亀井円女

爽やかなジョークで遊ぶ老夫婦  
顔中が口になってる同窓会

高槻市 上原逸

縄のれんぐれば長も平もなし

寝屋川市 立床晴風

じゃれて来る小犬ママごとから追われ  
ごますって見るも大人の社交術

弘前市 真喜内實

五線譜の中で情熱タクト振る

青森県 波ただお

ストレスを大空に向け吐いて見る  
理髪屋で町のニュースを耳に入れ

山口県 高崎雀声

再入院の息子の顔をそっと見る

和歌山県 山田久子

味噌汁の格別美味し空が澄み  
真白にしておく心の章を読む

岡山県 福原悦子

幸せは何か悟った日の電話

和歌山県 森敏子

少女の日しきりに恋し虫の声  
お見舞の葡萄おいしいジャムとなり

八戸市 島田昭治

きげんよく点滴おちてよく眠り

熊本市 北川一進

温めるだけの机にある左遷  
フラッシュの今日は嬉しい勝訴旗

兵庫縣 平和茂一郎

鐘のなる丘を歌った子も大人

箕面市 坪田紅葉

朝夕が涼しい箕面の山ぐらし  
大正の生まれは人がよすぎます

涼風がふいて洒落気が顔を出し

若き日の恋の炎の曼珠沙華

高槻市 上原逸

村祭り別れたままの人に逢う

想い出の人がホームに立っている

孫と居る時増え小春日和増え

弘前市 真喜内實

五年振り豊作の稲刈る笑顔

豊作の稲だ大きな貌して刈ろう

豪華なる服着て人形笑み変えず

山口県 高崎雀声

宝くじ又くじ運に見はなされ

エプロンの汚れが目立つ料理づき

畦道にちゃっかり燃えてる曼珠沙華

岡山県 福原悦子

武蔵祭あの子此の子も古里に

雲湧いて闘志信じる子の巢立ち

墓が好き墓誌を読んだらやめられず

八戸市 島田昭治

お迎えが遅いことにも老母愚痴

兵庫縣 平和茂一郎

穂芒の伸びてゆれいる廃坑口

町並の白壁修理赤とんぼ

豊中市 小林 一夫  
同姓同名きつといい人だと思ひ  
戒名の暫く文字を見つめけり

岡山県 松本 元江  
幸せを持つて逃げそな風が吹く  
ことりことりと風もわびしい一人言

西宮市 飯森 泰世  
階段を登つて降りて年を知り  
出ぬ乳を欲求不満でつねつて

竹原市 佐藤 令子  
息拔きの趣味締切に縛られる  
限りなき欲を小出しに今日生きる

今治市 月原 つくし  
なで肩の女に涙よく似合い  
ころころと笑うているが隙見せず

岡山県 杉本 伊久栄  
雀が一羽窓へ見舞に来てくれる  
ああ生きて良かった朝日の美しく

兵庫県 奥野 テル  
秋を描くくれない溶かす絵具皿  
つつましく帯を結んで女秋

岡山県 矢野 山人  
笛吹いて孫の歩幅へ夢をやり  
丸顔で丸いお鼻がそつとのり

指宿市 渡辺 伊津志  
耐えること再就職で鍛えられ

酒酌いでやれば掌のシミ数えられ  
理容師の耳学問が喋り出す  
佗び住居電話が鳴ると嬉しくて

大阪府 北山 悟郎  
顔の汗拭けぬ男の負けいくさ  
きき耳をすると夜更けに靴の音

泉佐野市 大工 静子  
何一つ教えを知らぬ姑です  
嫁姑互いの姉妹一寸ほめ

大阪府 渡部 さと美  
ふところの軽さ読まれた自動ドア  
団地なら三階あたりがよろしいで

大阪府 平井 露芳  
しんせいを二個すい儉約とは行かず  
昔話出てきた狐どれも化け

鳥取市 武田 帆雀  
横着な男が作る小鳥の餌  
恰好の囲碁の相手と呼ぶ隠居

大阪府 権安 達一郎  
秋晴れにギンナン拾う御堂筋  
すてる石だけをよるのも骨折れる

岡山県 千原 理恵  
時間などまるで気にせぬ話好き  
許すしか知恵を持たない亡母でした

高槻市 大池 好古

久方の茶席に一寸かたくなり  
ほめられて自信たつぷり歌ってみ

岡山県

後安江山

氣遣うて書いて下さる大きな字

背を向けて見てもやっぱり眠られず

岡山県

後安ふさえ

お彼岸に亡母のすきな栗おこわ

回る酔いチビリチビリと出る本音

京都市

森川春子

この前の婦長がおつて安心し

お見舞のひそひそ話に耳をたて

岡山県

池田半仙

コスモスを左に右にバスの旅

新道の未完を見つづくねり道

和歌山県

北山凡太

死ぬなんて思うても見ず母の通夜

風船の行方は風にまかせとく

唐津市

山口高明

両替機ひったくるよう札を取り

地球儀を廻せば硝煙けぶり出し

広島市

花田繁子

はた目には丁度よいのにやせたがる

やせたくばアフリカの旅してらっしゃい

西宮市

松尾志保

平凡に日々を過して感謝する

食欲をそそる我家の鍋料理

黙秘権妻は適度に行使する

盲点を突かれた欲にだまされる

サンタさん若さの小瓶下さいな

趣味多く昼間は留守で老母元氣

杉並木朝の景色はすみすぎて

病む身にはやさしい母の面影が

風呂敷に愚痴を包んで里帰り

四国路の旅も久しい連絡船

議長席ねむたい時だつてある

秋風に恥ずかしそうな扇風機

ロサンゼルス歌舞伎公演応援団に参加して

日米の拍手を受けて辰之助

裏街はドラマの世界ロスの朝

スーパームたまたまに出掛けりや定休日

形見分け欲の深さを知りました

バーゲンへ野球の知らぬ妻と行く

墓参り隣の草が気に掛り

大阪市 松本 ただし

竹原市 石原 淑子

大和郡山市 岡田 すみれ

大阪市 今西 静子

島根県 田中 ヒデ子

議長席ねむたい時だつてある

秋風に恥ずかしそうな扇風機

ロサンゼルス歌舞伎公演応援団に参加して

日米の拍手を受けて辰之助

裏街はドラマの世界ロスの朝

スーパームたまたまに出掛けりや定休日

形見分け欲の深さを知りました

バーゲンへ野球の知らぬ妻と行く

墓参り隣の草が気に掛り

大阪市 山脇 正之

大阪市 服部 頼一

新宮市 船越 正

一生の不作と妻も言わず堪え  
代替りしたのか医院字が替わり

和歌山市

三 谷 周 三

大観の富士であるまい高すぎる  
ヘルメット脱げば三児の母である

大阪市

橋 本 悦 子

1DK刑務所みたいで五万円  
文楽へ招待されて肩こらす

鳥取市

若 林 一 止

ハイヒール提げて砂丘の朝を踏む  
電文に叱られている披露宴

兵庫県

野々口 ゆう也

孤を埋める炎ゆるもの欲し老いの旅  
句友逝き独り酌む酒音がない

大阪市

田 中 節 子

雨の尾瀬の木道を行くひたすらに  
平凡に暮せる日々が感謝です

高知県

小 沢 幸 泉

消すことのだんだん多くなる手帳  
女房の名前はみえぬ古手帳

兵庫県

円 増 貞 子

鯖寿司の押す手かげんに母が生き  
したたかに生きて喜寿の共白髪

岡山県

牧 野 秀 香

孫からの注文受けて旅に出る

脱ぎ捨てた夫のシャツの汗を知る

大阪市

長 岡 周 太

三歳の孫へ余命を考える  
俺が先逝くとは妻にまだ言わぬ

高知県

山 下 登 舟

一杯は遺影の父に月の酒  
一医師に身をあずけし日より良く眠り

大阪市

川 原 章 久

秋深く次第に重い洗濯機  
幼児が空想の絵に独り言

大阪市

塩 田 新一郎

旅の中に又旅があり秋の宿  
出しゃばって嫌な主席に坐らされ

八尾市

古 川 覚然坊

コマーシャル程に酔ってない缶ビール  
敬老日歯ブラシ敬うやしく贈られる

鳥取県

松 本 みをき

ブレーキをかけても駄目な粗大ゴミ  
老いのうた楽しく通う塾がある

大阪市

松 尾 柳右子

末席で赤いコップがしゃべり出す  
嫁がせて父が手にするコップ酒

岡山県

二 宗 吟 平

自転車で見舞いに行ける幸思う  
ふだらく門とわずがたりに耳を寄せ



大阪市 野村 八重  
おまいりをすれば曾孫も手を合せ

欲秘めた親切皆に嫌がられ

守口市 長谷川 司

一線を越えても罪の無い女  
恩人は薬のような味がする

大阪市 山本 炉 斉

天王寺釣鐘鰻頭孫に買ひ  
野球には勝ったがセール安くない

島根県 岩田 三 和

地下水に水神おわすワサビ花  
本わさび使うすし屋へお客こむ

倉敷市 赤沢 沢の藤

細指で大の男を振り廻す  
訪ねたが靴脱ぎ石が高過ぎて

橿原市 中島 正 次

したたかな女架空の住所書く  
段々に孤立して来る社内地図

兵庫県 市橋 茂 樹

散歩道落葉ちらちら秋深し  
ボランティア知らぬ間に感謝状

八尾市 向井 しづ子

名月もくもりでだんご泣いている  
運動会帽子押えて駈ける孫

大阪市 大倉 圭 介

一人買ひのお金が欲しい孫四歳  
マンネリはプロ内幕の暴露記事

西宮市 待田 麻 黄

欲呆けで与えず食はず腐らせる

仏壇の初サラーの使い道

京都市 小林 英 子

潮花先生を悼む

帰りなきはるかな旅路雲の峰

悲しみや蓮のうてなへ一人旅

大阪市 田 渕 晴 子

感謝せず福祉に小言ばかり言う

強欲に金貯めポックリあの世行き

富田林市 松 本 今日子

まだ少し私の時間でみかんむく

子が一人嫁して残った冷御飯

### ジュニアの部

藤井寺市 赤木 奈 々

オセロですゆだんもすきもありません  
ながいかみおもいきってきつちやった

枚方市 二 宮 摂 子

れいぞうこたまにはあつくなくてみろ  
どうしてもカメラだけにはうそつけず

枚田市 二 宮 正 彦

お手つだい新聞とりをするやくめ

お母さんビールを飲んでまっ赤っか

# 愛染帖

## 橘高薫風選

東大阪市 市場 没食子

台風が地震に遠慮してる秋

この歳で亡父の有難さに出合い  
力瘤の弛んだ皺をつまみあげ

富田林市 岩田 美代

彼岸花仏の初潮告げている

レモン厚く切り中流の自負である

大阪市 朝倉 利義

どんないい名をつけようとして老人会  
五つ玉余分な玉と思うなよ

笠岡市 木山 遠二

寝たきりが一畳ほどの空を持つ  
下戸かなし座ったまんまひる寝もし

和歌山市 西山 幸

亡母が居る落穂ひろいの絵の中に  
短日を女おんなの無駄はなし

寝屋川市 岸野 あやめ

それぞれの胸に詰まった石の数  
むごいことあつけれかと言つ若さ

米子市 政岡 日枝子

問いつめていけばモナリザ泣きますよ

許すたび女化粧が薄くなる

岡山県 土居 耕花

豊作の案山子に笑う顔を描く

老婆の寝息で一句まとまらず

寝屋川市 堀江 光子

メリーゴウランド降りたいときに止らない  
自分だけ写す鏡を女持ち

西条市 片上 明水

万国旗仲の良くないのが並び  
噛みながら飲まねばならぬ甘い酒

吹田市 栗谷 春子

花びらをもとに畳んで枯れる花  
目覚めれば昨日のレールの上にある

米子市 林 荒介

仏飯につながらる朝の茄子の彩  
少年のポケットにある電話帖

和歌山市 松原 寿子

寒風へ想いは変えぬ風ぐるま  
砕け散る波にすんでる面影よ

大阪市 渡部 さと美

菊花展背すじ優雅に伸ばされて  
菊花展出れば枯葉のたむろして

吹田市 井上 照子

一寸声出して新聞姑読む  
過去の夢宝石箱に桜貝

堺市 高橋 千万子

老いらくの恋は語らず詩に残し  
乗り換えた愛もやっぱり行きづまり

青森市 工藤 甲吉

人を焼く火は赫赫と赤くあれ

大阪市 小出 智子

银杏散るみんな他人にちがいないし

名古屋 藤井 高子

暦から冬をはずして老いはじめ

羽曳野市 吉川 寿美

柿の種たわわな夢をみています

西宮市 奥田 みつ子

旅支度娘の入院に役に立ち

和歌山市 福本 英子

丸描けばはみ出す位置にいる私

守口市 結城 君子

背降りにも行者の歩幅変らない

羽咋市 三宅 ろ亭

晚鐘に祈る農夫の影を見ず

田中 隆二

歳月の戻らぬ道に兵の墓

米子市 八木 千代

かなしいことに他人の傷が見えすぎる

富田林市 藤田 泰子

あみだ籤みたいに通る京の地図

伊丹市 榎谷 寿馬

唐三彩の馬に跨る夢を見ん

島根県 小砂 白汀

端然と月天心に立ちどまり

高槻市 梁川 吉子

三日月に腰かけ下界みてみまし

米子市 菅井 とも子

この齢で知らぬ童話が多すぎる

大阪市 西森 花村

秋の空財布の底のように澄み

守口市 長谷川 司

鱗雲紅葉前線南下する

外は雨まず酔醒めのコップ酒  
西宮市 草刈 墮 駄

酒好きの父の遺影に月の酒  
高知県 山下 登 舟

編笠を目深かに越中風の盆  
新宮市 山 田 平 和

よく冴えた声の電話だ儲けとる  
鳥取市 武 田 帆 雀

植木鉢並んだ路地を近廻り  
吹田市 茂 見 よし子

惚けもよし口惜しさ少しすつすれ  
鳥根県 堀 江 正 朗

水の上の暮らしに生きる濯ぎ水  
岡山県 白 岩 文 衛

残照の塔へミューズは舞い降りる  
和歌山市 浦 野 和 子

孫命名裕介小春日和貌  
弘前市 真喜内 實

まつたけをやめて中流サンマにし  
鳥取県 清 水 一 保

弁当の時間が読めて名議長  
唐津市 仁 部 四 郎

仏間から食後のデザートを貰う  
藤井寺市 赤 木 和 子

哀しさにふと天国に電話する  
米子市 沢 田 千 春

学位記に妻の遺影もほほえみぬ  
豊中市 田 中 正 坊

山おもうことあきらめた街の石  
明石市 清 水 拓 味

失ったものを探して冬になる  
和歌山市 神 平 狂 虎

子無し草童話の桃がほしくなる  
米子市 茂 理 高 代

彼岸会に背中背中の天王寺  
大阪市 川 原 章 久

尻からげ時の流れが判らない  
浜田市 佐々木 裕

虚像と虚像寂しい秋の風景画  
近江八幡市 前 川 千 賀 子

グイエットお口へチャックかけたよう  
寝屋川市 平 松 かすみ

履歴書にひとときわたくしと書く  
和歌山市 三 谷 周 三

何かを待ち何も無かった日の安堵  
高槻市 河 瀬 芳 子

大文字若き焰を思い出し  
大阪市 兼 松 宏 安

庭の柿やとと孫呼ぶ色になり  
寝屋川市 宮 尾 あいき

ひと言を返しそびれて帰りにけり  
和歌山県 北 山 凡 太

ロボットを使いこなし主事である  
八尾市 山 下 みつる

老夫婦ぬくい言葉を探してる  
大阪市 亀 井 円 女

殊更にうそをならべる許しかた  
堺市 吉 本 千 代

句を作る喜び様にならずとも  
東大阪市 津 雲 一

踊り過ぎた帽子は風にまかせよう  
鳥取県 新家 まさる

三面の記事は身に沁む事ばかり  
大阪市 大 塚 節 子

道行のあとさきとなる秋の蝶  
川西市 野 村 静 雄

言うまでもないと長なが聞かされる  
岸和田市 原 さよ子

生返事早速町の役がくる  
大阪市 川 口 弘 生

病院で時間で刻む生命みる  
和泉市 岡 井 やすお

自衛官曳山を引く平和国  
宝塚市 丸 山 よし津

失敗を何時まで胸でおりたたむ  
倉敷市 齋 藤 通 風

濃淡の紅の夕べで知る心  
米子市 光 井 玲 子

いつとなく艶の出できた夫婦箸  
平田市 久 家 代 仕 男

野仏が一度にもらう曼珠沙華  
鳥根県 木 村 はじめ

部屋温し五十二年を妻と老ゆ  
島根県 堀 江 芳 子

落葉でも炎ゆらゆら見せて燃え  
唐津市 浜 本 久 仁 於

棹させば対岸少しづつ流れ  
唐津市 久 保 正 敏

吹けば飛ぶ証紙に男裁かれる  
唐津市 木 塚 素 石

尼崎市 春城 年代  
昔の四季はさだかだったと秋桜

高知県 小沢 幸泉  
酒の味忘れた頃に客が来る

島根県 榑原 秀子  
山登りはるかの隠岐へ万歳す

羽曳野市 麻野 幽玄  
お隣の噂お向いから聞え

岡山市 川端 柳子  
つき放すネオン死のうが生きようが

福岡県 横地 雅風  
百年の樹齡は人に遠い山

岡山県 松本文江  
心豊かに生きたし孫のおむつ積む

米子市 寺沢 みど里  
過ぎた日のやさしさ秋の天に浮く

高知市 北川 竹萌  
いごっそう我が墓も立て八十の冬

米子市 堀江 純子  
おめかしの木綿よ皺にならないで

今治市 野村 京子  
むらさきの好きな女が抱いた思慕

豊中市 奥田 満  
善人へバラは報いてくれないに

大阪市 大野 武太  
致死量も知らず毒舌吐く男

京都市 森川 春子  
点滴がすめば一日暮れかかり

倉吉市 淡路 ゆり子  
風吹けば炎ともなる火種抱き

姫路市 大原 信好

幾星霜つかず離れず夫婦行

奈良市 森田 カズエ  
サザエさんファンの老母で慌てもの

岡山県 山本 玉恵  
あの人には涙は見せられぬ

鳥取県 福田 あや子  
日本丸よ男の意気を帆で飾れ

唐津市 田口 虹汀  
カンガルーのように園児を前に抱き

唐津市 浜本 義美  
減塩に食欲もなし箸撫然

唐津市 浜本 ちよ  
痛む手に母の法事の近づきぬ

豊中市 上田 登志実  
しあわせは過去の悪夢を薄くする

島根県 松本文子  
故郷の伝言もなく渡り鳥

岸和田市 古野 ひで  
秋の海夏の名残りの見えかくれ

京都市 都倉 求芽  
自衛隊の砲声富士が悲しくて

岡崎市 春城 武庫坊  
パン焦げて今日のドラマの幕を開け

米子市 野坂 なみ  
一人になって天職を持つ有難さ

吹田市 西岡 豊  
酒にとけ酒にうかれて灯に沈む

岡山県 小林 妻子  
口裏を合せて涙ふいてやる

貝塚市 行天 千代  
血圧が少し下って墓参する

倉敷市 藤井 春日  
野菊一輪おほこの髪にさして秋

笠岡市 松本 忠三  
病床の師が代筆で出句する

鳴門市 八木 芳水  
こつこつと処世の道を知った皺

愛媛県 石手 武  
配置替え合理化というワラジ履く

弘前市 波多野 五楽庵  
繕いの針は戦争忘れなない

芦屋市 竹中 綾珠  
西部劇時代劇に似て痛快だ

西宮市 朝山 千世子  
八十路にも女おしやれは忘れなない

豊中市 中桜塚三丁目13-15  
投句先 千560 橘高薫風宛(ハガキに3句)

## NHK川柳募集

課題 「歩く」 選者 森中恵美子

締切 12月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

大阪放送局「さわやか広場」係

発表 12月23日(日) ラジオ第一放送

午前11時5分から



— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

波多野 五楽庵

やさしさの渦がわたしを弱くする

田中 晴子

やさしさにひたるのは人のもろさではない、  
ひたることのできる感受性と弱くなれる女ら  
しさが大切なはずです。

衿あしのほくろの見える位置で泣く

前川 千賀子

不幸の涙を流しながらも前の人の衿あしを  
観察していられる、そこに人間のすばらしさ  
がある。喜怒哀楽がお互いに循環しあってい  
るからこそ哀しきも忘れる事が出来、ノイロ  
ーゼにならなくてもすむ。

虚と実の谷間で少し寝ておこう

藤井 高子

虚と実、裏と表、両面の世界で生活してゆ  
かねばならぬ人間のわずらわしさがある、そ  
の谷間で一休みしている時こそ、かけ引きの  
ない生きたまんまの顔をしているのかもし  
れません。

髪を梳く女の掌から鬼が出る

野村 京子

残念ながら男性にはこの様な句が創れない  
かもしれない。女の業の葛藤がこのような句  
をもたらすのかも知れません。同じ作者の

愛しあう夏の小指はお人好し

この句も私の好きな句です。

再婚の話アイロン焼けすぎる

八塚 三五島

男が一人でアイロンがけをしている味気な  
さと、スイッチを入れっぱなしにして再婚の話  
に聞きいつている長い苦勞が目に見えるよう  
です。下五に私には出来ないうまさがある。

盆三日休めぬ人の靴みがく

安田 志津

こんなに優しく、いたわりに満ちた奥様を  
おもちの旦那様、おいしいお料理とビールが  
ご苦勞様でしたと待っている筈です。

たよりない男で皮をむいてくれ

田中 叶

たよりない男が本当はたよりになっ  
て男であるかもしれない。皮をむいてくれる指  
先にある友情と氣くばりを見ぬいてやってほ  
しい。

でも残暑のどこかで秋の音を聞く

岩佐 富子

二、三度声を出しているうちに、ああ川柳  
をやったよといったしみじみ感じさせられる  
句です。台風もなく、どうやら出来秋を迎え  
られそうです。私の住むみちのくは一足先に  
晩秋になってしまいました。秋の音も、冬の

音も間違ひなく皆さんの耳に聞こえてくる筈  
です。

酒代は父の財布で飲みに行こ

玉井 豊太

来世の契り妻から断られ

北山 悟郎

台風の進路でんがな周遊券

古川 美津枝

こんな素敵なユーモアがなぜ現代の川柳か  
ら姿を消してゆこうとしているのか。そして  
なぜ言葉遊びの川柳が選ばれるようになった  
のか。時代だと言えはそれまでですが、こん  
なすばらしい人間性あふれる川柳をもっとも  
っと大事にしてゆきたいと思います。

一本の糸をたぐって亡母に逢う

山本 玉恵

私の母も五年前にねぶた祭りの笛が聞こえ  
る病室で亡くなりました。以前亡くなった父  
に宜しくと言ったら、かすかにうなずいてく  
れた母を今でも思い出します。私の一本の糸  
は毎年めぐってくるねぶた祭りの笛の音だっ  
た事に気がつきました。

かゆいなあまつくろいかにさされたの

いぬづかゆかり

ゆかりちゃん、まつくろいかってかゆいん  
だよ。でもゆかりちゃん、きつとこめんな  
さいっていつてるよ。まつくろいかをかん  
んしてあげてね。

# 中国吟行の旅 PART 2

59. 9. 24~29

上海・蘇州・桂林



## 団長の箱詰と七千円の丸損

西尾 栗

「先生！ここ動きなや」岳人はこういうて、もと来た道を行って行った。

ここというのは、桂林動物園の入口で、切符のもぎりの姑娘が詰めている箱の中である。半時間程したら、ガヤガヤと声がして、はぐれた二十二人がもどって来た。そして、薫風副団長の細い目は笑い笑いで

「団長さんが迷子になったら、あきまへんがな」と言った。すると、すかさず岳人は

「団長の居るところが本隊じゃないか、君達が集団迷子やがな」

一同声なし。

九月二十八日の桂林の空は、からりと晴れていた。

中国の迷子は大きな口をきく

× × × × ×

飛行機の小さい窓から、下を見ると淀川の流れて自動車の流れが見えてきた。あと数分で伊丹空港へ着陸という時に、機内の空気を破って一行の中から

「七千円丸損や」という声が響いた。

「どつした」とたずねると、

「俺は三千万円の保険に入ってたんだ」  
七千円はその掛金だったのである。

重い鞆を手にタラップに佇つと、ぬけるような青い空に、あきつの群がとんでいた。

既に馴染みの日本の秋であった。

掛軸と七千円の命もち帰る

蘇州・桂林

橘高 薫風

戦中派の私は、今と較べたらとてつもなく暗い中学生時代を過したが、親子断絶などとかましく言われている今の若者の方が、むしろ精神的には不安定なのではなからうか。バスの中で誰かが、中国は日本より、ある点では五十年ほど遅れていると言った。また、誰かが、五十年進んでいる日本ではすでに失くなったものが、中国には残っていると言った。今度の旅で、始終私の頭からこびりついて離れなかった思いは、この一事であった。さて、あこがれの蘇州へ。早朝からの行動開始もさして苦にならず、旅情豊かな軟坐車の窓から、広大にして繊細な田園風景の展開を楽しむ。それらはすべて絵になり詩になり。そんな東洋人の心の古里だった。いよいよ憧れはふくらみ、私の胸は今にも咲こうとする

桃の蕾のようになる。

それというのも、私は中学三年のとき、友人と二人で梅田の阪神地下映画劇場で、長谷川一夫と李香蘭の主演する「蘇州の夜」を見た。いや、見ようとして劇場に入った途端、大阪府の補導連盟の教師に見とがめられ、帽子の名前を書き留められて、翌日学校へ知らせが来て、母親が呼び出された。それでも、驢馬に揺られて、柳の橋を

渡る旅人 小雨にけむる  
花の中から 鳴る鳴る鐘は  
想い出の寒山寺

蘇州なつかし

と歌う李香蘭の声や、その前年にヒットした渡辺はま子の歌「蘇州夜曲」の、

花を浮べて流れる水の

明日の行方は知らねども

今宵うつした二人の姿

消えてくれないつまでも

などの詞は、さながら唯一の青春讃歌であったから耳に残り、以来四十年越しに、水の蘇州は私の桃源境であり続けたのである。

これは夢、衣裳の裏布の甘美な絵そらごとであるとするれば、現実の水の都は如何かと、期待の弾むのも無理からぬことなのだった。

古都蘇州、虎丘への散策は、大八さんと行を共にしたのだが、その面魂、やがて孫権に見えてくる。さすればおのずから私は劉備玄德かと思う前に、試剣石があったのは、痛快

千万だった。名園留園では黄色い睡蓮との出会いもうれしかった。刺繍と言ひ玉と言ひ、蘇州はやはり夢を見させる雰囲気にあふれていた。ただ寒山寺で撞いた鐘の音の、余韻のない冷たい響きには、即座に現実に取り戻されたことである。

### 寒山は留守拾得がテレビ見る

「桂林の一枝、崑山の片石」という諺がある。桂林は木屋の林ということ、ひよっとして芳香を満喫出来るのではと期待していたのだが、今年の花期は遅れているらしい。飛行機の到着時と落日の荘厳が重なったので、峰影殊に映えて見事だった。

翌日の漓江下りは、やはり今度の旅の圧巻だった。山谷夢幻、河川の曲折また無限の如くして飽きさせない。羅漢の像と見れば見え太古の巨大な墳墓と思えば思える。私は、一峰に一字ずつを置いて見た。所謂、千字文の一字一字をだ。天地玄黄から焉哉乎也に終る四言古詩の二百五十句、正に美しいハーモニではないか。影を蔵した鋭峰、影を抱くを厭う奇岩、日が射せば移ろい、雲影を得て変じ、実にすばらしい。ひと時はまた霧がかかり、小雨模様を呈して、芒芒の昔に還る感をすら抱かせた。船室でビールを傾けてはデッキに出て、格調のある竹林の続く風情を前に漁る漁夫、水牛の親子、家鴨たち、楽土の景観に見入りつつ舟行時間を堪能した。

桂林でもう一つ印象に残ったのは、広西チワン族の踊りを見たことで、その一つが、安来節のどじょうすくいと同じなのだ。若い女性のコミカルな踊りようが際立っていて楽しめた。これは旅立ちの前、同人の草刈墮駄氏から新聞の切り抜きを見せて頂いて、少しの予備知識はあったが、こつとも似通っているとは、感じ入ったものである。別に石林という所では、銭太鼓に似た所作の踊りがあると云う。

正に中国は日本の源流、一衣帯水の思いを強めるばかりで、これからの日中の提携をしまじみと考えるではないらなかつた。

### 団体で来ても旅愁の湧く漓江

## 悠久と俗と

樞 谷 寿 馬  
樞 谷 郁 子

敗戦で専制から一挙に民主に急変した国民の一人が、儒教大陸を統一に持つて行った革命の国の社会主義の姿を一見したいという物見遊山の甘いものが無かつたと言えは嘘になる。が然し

大陸や牛を追う子の瞳がきれい 寿 馬  
体制の違いを越えて可愛い娘 郁 子  
外国を訪ねることのよい点の一つは、自分



の国を振り返えられることでしょう。狭い日本をしみじみ見返りました。

悠久の濱江に委す小半日

寿馬

悠久の大陸踏みしめつつ旅行

郁子

こんな所を予め察しられたのか、句会という俗事を避け、ひたすらに大陸を見よとの今度の企画に敬意を表しました。

が扱って昨日、今度の打上げ式？というのに参加させて頂いた時点では又元の俗人に還ったようでした。

妻一人が見おとりのした中国行

寿馬

夢に見た寒山寺の鐘肌に触れ

郁子

とはいうものの「川柳」という吾等の祖国を離れて、遠くまで広い大陸から見直してはと賢そなことを考えたりもしております。

## 申さん有難う

平野 百合子

九月二十五日の蘇州日帰りツアーのガイドさんで日本語がとてもお上手な申さん。敬語から日本古来の諺までご存知で、道中のガイドもわかり易く説明して下さい。質問にもはきはき答えて下さるので現在の中国の実情や日々の生活様式、進んで将来の考え方等、込み入った事までお尋ねしても心置きなく打

明けて下さいました。私達が中国を知ろうとして参考書を調べてもこれまで知る事は出来なかったでしょう。申さんの友好精神とガイドとして接する人々に満足感を与える熱心さに深く感謝し、頭の下る思いでしっかりと胸にたたんで忘れてはならぬとベンにとどめました。

申さん有難う。大事な大事な日中友好のかけ橋、申さんのたゆまぬ努力を大いに期待して、いつか訪日される日は双手を上げて歓迎いたします。

ほんとうに有難うございました。



寒山寺の鐘をつく大八・ミサオ

## 蘇州にて

春城 武庫坊

### 宝帯橋守る相棒無いまに

隋の煬帝が天下に権力を誇るために多数の人民の労苦の結晶で完成した京杭大運河（六一〇年）以来昔の留学生も通ったかもしれない蘇州の街の東部を流れ市街地の東南部に眼鏡型の古代アーチ橋を延々と続けた長い橋が架っている。これが宝帯橋である。

蘇州案内担当の申錫出先生によると中国では橋、寺、大邸宅等の入口には悪魔除けのために必ず一対の獅子を飾る風習とのことである。

宝帯橋北端には獅子が一匹戦禍で無くなったと淋しい顔を見せられた。然しこれは清朝の時代此の地でイギリス軍が砲撃で橋の北部を壊したと言う記事を後刻見付け、その折に無くなったと思い一安心した。

中国史で豪遊驕奢の標本とされる煬帝の大道楽の結果が後世の交通に大いに益し、今日も名産の竹材を土嚢を満載した船が走っている。

### 千年の歴史を抱いた宝帯橋



## 再見を誓う

赤川 菊野

初めての海外旅行、それも憧れの中国へ川柳塔の皆さんと行けたことは生涯の思い出になることでしょう。

上海空港に着陸、なんと大きな国だろうと目を見はつていると空港の一角で目に入った赤旗に何んとなく緊張感をおぼえました。街には真赤に炎えたサルビアが私達一行を迎えてくれました。一歩街中に出ると、人、人、人、両側に並ぶ露店さんながらの店は、土佐の日曜市を見る思いでした。人間は勿論のこと街全体にとってもエネルギーなものを感ぜました。

何故か心の古里にふれた思い、それは蘇州への途中、車の中で申さんも皆と一緒に唄った蘇州夜曲、何故か涙が出て困ったものでした。蘇州での刺繍工場、可愛い少女がおしゃべりしながら一針一針刺していたあの刺繍、裏表同じものが同時に出来るあの技術、同じような仕事を持っている私には、とても興味深く、唯々感嘆の一語につきます。これが刺繍のウルトラCと言っべきでしょう。

独学で学び今の仕事に炎えてる申さんの姿

## 訪中点描

東野 大八

### 再見上海

想い千々ガーデンブリッジひた走る

### 蘇州回顧

姑蘇台はいずこあの雲呉か越か

### 寒山寺殷盛

塗粉濃し寒山拾得ただ哀し

### 桂林機上

虹の朱の雲海くまなく染めて落つ

### 漓江逍遙

水牛と竹山茫洋と競いたつ

### 虹口公園感慨

われよりも若き魯迅の像重く

には心から頭の下る思いでした。申さんがんばって下さい。

桂林の美しい山水は私の筆では書きつくせません。楽しかった六日間の旅も、薫風さんの「星影のワルツ」で幕を閉じました。

申さん、ご一緒して下さいました皆さん、ほんとにありがとうございました。

再見を誓う握手の温かし

## 中国雜観

木 嶋 隆 道

### 人と自転車上海

上海は人口一千二百万人、歩行者と自転車の洪水。そこで自転車どうしの衝突は珍しくないらしいが、それでもお互いに争うのではなく、重荷で倒れた車を助ける人があり、娘さんの荷台から豚の腸が路上に転げ落ちるような光景にも出会った。

歩行者の中に緑色の軍服を着た若い兵士たちもまじっている。中国では今、深刻な就職難で、軍隊に三年間つとめると、国が職をさがしてくれるのだという。市中の人の波は、早朝から夕方まで続く。人口が多いので、職場ごとに時差出勤、日差休日なら道路はパンクするだろう。日本のように自家用自動車が行くというのは、目下のところ、論外というくらいらしい。

### 日本人好みの蘇州

蘇州は古くは呉の都、豊かな土地の中心地で、大運河はこの地を起点とするとか。水の都といわれる市街も、水はかなりよこれている。古画を見ような風景は美しいが、古い

陋屋も多い。家に窓がなくて暗いが、これは蚊が多いのと直射日光を避けるためらしい。水路には蛋民の舟が通っていた。

虎丘の高層はさすがに見事だが、かなり傾いている。「多分、今は倒れないと思います」と言っている。ガイドさんが笑わせる。日本人が訪れるので、中国人も来るようになったという寒山寺に向かう。なるほど憧れの地で写真を撮り、鐘を撞き、拓本や書をもとめているのは日本人ばかりだ。楓橋を訪ねて胡同等に足を踏み入れたが、旧式の家並みは綺麗とは言えなかった。

名産の刺繍研究所では、製品の豪華さに比べて、その手作業が面倒で時間のかかることに一同、吐息をもらす。照明が暗いのは、糸が変色するので許されないということであった。

### 春城 武庫坊

支那海の濁りが見えてバンド締め  
着陸の虹橋空港すきゆれ  
先ず一杯大陸のお茶を飲む  
你好が素直に口から旅三日  
自由市場梨一色の果物店  
再見と手を振る子等の幸祈る  
誰が乗る輪タク並ぶ榕湖畔  
仙人が住んでいそな岳続く

### 旅情をそる桂林

奇峰に陽が沈む時刻、空港に到着。翌日、漓江に向かう沿道は水田が少なく、綿、麻などの畑で、民家も豊かそうではない。川下りの観光船は四十隻あり、乗り場には日本人のほかにアメリカ人の姿が目立った。漓江は、晴・曇・雨のいずれもそれぞれの風情があるとされるが、当日は天候に恵まれた。

江水は青く、兩岸の奇峰奇岩もさることながら、水に遊ぶ家鴨、水牛にも旅情をそそ



武庫坊・美緒・泰子・菊野

れた。岸边近くでは、竹三本ほど組んだ筏で漁をし、水草を採っている住民の無表情が印象に残った。宿舎の榕湖飯店のレストランの入口では、真紅の中国服を着た美女がにこやかに迎えてくれた。もとより今回の旅行では、このようなきらびやかな服装の女性には市中では見かけなかった。

### 飯西 ミサオ

はじめて飛行機に乗った感激を

すべてを忘れて今雲上の人

空は遠くどこまでも青く

下界は何も見えない

さほど飛んでいるようにも思えないが

時々視界をさえぎるちぎれ雲がとぶ

そしてそれとは別に下界をさえぎっている

白い厚い雲

雲の形は刻々と変っていく

さざ波のような 砂丘のような雲

宝島のような 龍宮城のような雲

水爆のようなきのこ型をした雲

金魚の泳ぐような そして又

ソフトクリームのような 綿菓子のような

食べてしまいたい雲

その雲の隙間を輝らす光は

まるで極楽浄土の絵のよう

やがて雲が切れ海が見え山が見えてくる

広い広いはずの大陸も空から見れば

まるで小さな箱庭のよう

山、川、田、畑、家、道はまるでパズルをはめこんだようにぎっしりつまっている

これが大陸か ああこれが上海か

中国民航機は無事着陸

ここから旅の第一歩が始まる

## 上海で

プラタナスの街路樹は広い道の両側から緑のトンネルを作って見渡す限り続いている

昔すずかけの道と唄われたのもこのあたりとか

ガイドさんの説明を聞きながらバスは行くあふれる人の波 自転車列は道幅一ぱいにつづく

二輛連結のトロリーバスもはちきれんばかりの人を

つめこんでゆつくり走っている

省エネの徹底した町は暗く殺風景である

その中を人も自転車もバスも

まるでゆるやかな大川の流れのように

よどみなく流れて行く

バスの警笛だけがやけに鳴っているけど

不思議なくらい何のトラブルもなく流れる

歩道ヘテーパーを出して食事をしている人もある

街路樹と家の軒をつないで洗濯物を干している人もいる

道端で太極拳らしき体操をしている人もい

る

それらの人たちに激突することもなく人の流れは緩やかにどこまでも続いている

## 桂林で

いよいよ待望の桂林到着

空から見る山の集団

まるでモグサを高くつまんだような

つんとすましたとんがり山が無数に並んでいる

おおこれが桂林の山々か

聞きしに勝る

この見事さ

口にも筆にもあらわしようのない美しさ

皆んな黙々とシャッターを切る

数えきれない程のフラッシュが光る

悠久の山河をこの眼でしかと見る

夕日が沈む もう最高

心は茫然と見とれるのみ

秘境にも土産かざした売子の列

外人と呼ばれ財布の紐ゆるむ

わだかまり

秋元 てる

私は狙っていた、二人切りになるチャンス

を。とは言っても残念乍ら艶っぽい話ではない。中国の人達、しかも声なき人々の、日本

人に対する本音を聞く事である。しかし中国語の解らぬ私にはその機会がなかった。私達は敗戦国民なのに、先進国面してゾロゾロ歩き廻り、札ビラを切って買物をする。自分を中国人の立場に置いて見る時その胸の中は……と絶えず後ろめたさがつきまとっていた。

中国の人が二人以上の時は決して本音は言わない。上からの指示通りの返事しか貰えないと聞いていたし、それがやっとチャンスが来た。六面山の動物園からの帰り、老いたバ

ンダが青い笹の葉を食べて見せてくれ、人々の心が和んでいた。その時、上海から同行の方が一人で歩いておられた。若い人であり北京師範大卒の中央教育研究所に勤務する公務員だとも知っていたが、今を置いて外にない

と決心して、自分の気持を話し一個人としての本音を話して下さいと真剣に頼んだ。彼は「あれは戦争という不幸な一時期の事で、もう過去の事、それより今後が大切。気にしないでもよい」と紋切り型でなく言ってくれた。そこへ千代さんが顔を出され、話に加わり涙を流されながら頭を下げられ、君子さんも同調された。私は胸のつかえが取れた気持ちで、涙を拭く代りに天を仰いだ。そこは大陸の青い空と大きな楠の梢、眼を転ずれば特有の桂林の山々があった。あの言葉が中国の一般大衆の真実の気持ちであってほしい。切に祈るのみ。

わだかまり吸い上げて更に青い空



## 斐伊川暮色

### 小 砂 白 汀

日本列島に冬が来ると、神話と伝説の川、斐伊川（簸の川）にも霏々として雪がくる、

この川はその頃奥出雲（仁多、飯石、大原郡）の鬱蒼たる大森林地帯の水を悉く集めて豊富な流れを形成して年中その水量は変ることなく、道路その他交通機関の無かった時代の唯一の動脈の役を果たした。がその反面、降雨期には毎年のように氾濫を繰り返し手のつけられぬ暴れ者でもあった。

この川は中国山地に源を発し氾濫のたびに砂を下流の簸川平野に運び、一説にはこの平野はこの流砂によって出来たと言われる（今の出雲市の在る広はんな地域を指す）。そしてこの平野を潤し、宍道湖に注ぎ中海を経て境水道を抜け日本海へと連なる大河であるが、そのほぼ中間に位し、しかも雲南三郡の中心点に位置した木次町は、この奥出雲の豊富な物資（木材、木炭、米等）の集散地として発達し、また、そこには「八岐の大蛇」にもたとえられる「炬（たたら）」と称せられる、優

良な砂鉄を原料とする優れた製鉄の技法が発祥していたのである。（この砂鉄を採るため山を崩し山土を水洗したので、その水で川が赤く緋の色に染まり、下流まで達したので緋の川転じて簸の川、斐伊川となったとの説もある。これを通称カンナ流しと言いい、秋の彼岸から春の彼岸までとされていた。農業用水としての配慮からの掟であろう）

さてこの斐伊川を利用したの木次は出雲市、松江市方面との物資交流の中継基地として重要な役を持ち（汽車もクルマも無い時代）殷賑を極め、従って通称「木次者」と言われる利に敏く目先の利く、悪く言えばずる賢く油断のできぬ人間という「畏怖」とも「尊称」とも「侮蔑」とも取れる呼称を頂いたのである。

その頃と言っても大正末期頃までは、歳末ともなれば、この小さな町は町全体が一大バザールの場と化し近在はもちろん遠く仁多、飯石方面からも正月用品購買客でこつた返した。それでは冬期奥地と木次間の輸送方法はどうか、これには主として馬轡を使った。積雪の上をこれが主道を走り廻り、凍結するとアイスバーン化して、てかてかと光り、子供達にはスケートリンクの役をしてスリ減ったゴム靴で滑り、日が暮れるまで遊んだもの

である。この他、木次の牛市、「千歯<sup>せんば</sup>」脱穀機<sup>だくかくき</sup>の考案による全国的な活躍のフロンティア精神、水害に対する備えとしての「一文上り」の話など、クルマ社会になるまでは当地方の表玄関だったが、鉄道の斜陽と共に今は昔日の面影はない。が、「木次もん」の子孫がこのまま拱手壊滅する筈はあるまい。

さてこの間、わが川柳はこの地域でどうなっていたのか、これを書かねば話は終らぬ。

大正11年1月、松江の松陽新報社に柳壇が登場（米村あん馬選、これに刺激されて県下各地に川柳会が結成され、木次でも同年十月難波何冀（力）が主唱して結成、参加者は、加藤蛙羹（一路）、足立枯菴樓（撫子）、井上吉外、森山辛気楼、西村余一、舟木吞気坊、難波柳子等で、大正十二年末まで継続、それぞれ個性を持った人達がいた。それ以降、消息を絶ち、戦後へと移行するのだが、一、二名を残しすべて故人である。その生存者も今は川柳とは無縁の存在となっている。

小砂白汀氏（島根県木次町）は、わかあゆ川柳会を主宰、川柳「わかあゆ」誌を隔月発行し、この十一月号をもつて三十号を迎えた。



## 高木桃里氏の逝去を悼む

松本 忠三



去る十一月四日  
(川柳)並木会・高  
木桃里会長ご逝去  
の訃報にとるもの  
もとりあえず駆け  
つけました。あま  
りにも突然のこと  
にて奥様にどうお

悔み申しあげてよいかわかりませんでした。  
ご遺体に接すると、いつもと少しも変らぬ温  
顔で今にも目覚めて「忠三さんどうしたんで  
すか」と声でもかけるような様子で、これ  
がせめてもの救いでした。桃里会長は一年半  
ほど前から健康を害せられ、入院退院のくり  
かえして見舞に伺っても「会長が入院で役立  
たんで困りますが万事よろしく願います」  
と笑顔で会の運営やら柳話に面会時間も超過  
する始末でした。

川柳を志したのが大正の中頃(旧制中学時  
代)からで、この頃既に雑誌談話倶楽部へ投  
句、井上剣花坊の選にて再三に亘りメダルを  
獲得した(初代会長木山遠二翁談)とか。ま

た川柳雑誌時代からの同人で温厚なるお人柄  
に数多くの柳友を有し、太萬川柳におきまし  
ては常に優秀な成績をおさめ、弓削の西日本  
川柳大会、竹原の近県川柳大会へもたびたび  
足を運び上位入賞を得られたのであります。  
地区内におきましては遠二、忠三等と共に昭  
和二十七年川柳並木会を結成、川柳雑誌を軸  
に、田舎は田舎なりの特色を生かして川柳の  
普及につとめたのであります。雅号桃里は、  
この地が桃の特産地として広く知られ、また  
郷土をこよなく愛したためであると聞き及ん  
でおります。

昭和五十七年十月十一日市制施行三十周年  
記念笠岡市川柳大会を開催し、文芸文化的な  
催しのなかで笠岡市はじまって以来の大盛況  
であり、並木会の面目躍如たるものがありま  
した。大会終了後桃里会長から司会進行を担  
当した私に「こんな嬉しいことはありません  
まさか川柳塔の恵二朗、千翁、静水、七面山  
等、錚錚たる選者のお越しを願えたなんて」  
と手をとって喜んだのが昨日のように思  
えてなりません。

なお葬儀は十一月六日自宅でしめやかに執  
り行われましたが、奇しくも当日、山陽新聞  
朝刊に山陽柳壇橘高薫風選として

農を継ぐ娘が居り案山子若がり

高木桃里  
が入選句として発表され、導師がこれをご霊  
前に朗読するや参列者一同の新たな涙を誘っ

## 翠柳吟社創立10周年

記念川柳大会

日時 昭和60年4月28日(日) 10時開場  
会場 岐阜県郡上郡八幡町新町  
群上農協八幡支店3階ホール

事前投句  
兼題 「スタート」青木 惜春選

|      |        |
|------|--------|
| 蹴る   | 浜口 剛史選 |
| 越す   | 会田規世選  |
| 再生   | 田中 明二選 |
| 主張   | 丹羽 麦舟選 |
| 素通り  | 中江 一魚選 |
| 狭い   | 橘高 薫風選 |
| 尊敬   | 野口 初枝選 |
| 頼む   | 曽根 幸広選 |
| 調子   | 名波 勝選  |
| 特別課題 | 西尾 朶選  |
| 「着く」 |        |

☆本社では大阪からデラックスバスで大  
会参加、郡上八幡と白河郷2泊3日の  
旅を企画。詳細は次号で発表します。

たのであります。

私達は会長のご遺志を尊重し微力ながら一  
致団結し、小さな川柳の灯火を絶やさぬよう  
頑張る所存でございます。どうか倍旧のご指  
導・鞭撻を切にお願い申し上げます。

感謝

渡辺独歩選

三食がおいしく感謝の箸を置く 美穂  
愚痴へ戸をたてて感謝の灯を点す テルミ  
勤勞感謝錢の無いのを休ませる 久仁美  
感謝祭買わぬデパートからハガキ さと美  
功德への感謝遍路の結びとす 吟平  
二人っきりの時間を呉れて有難う置かず子  
ふと感謝忘れて悔ゆる老いの性 玉恵  
有難いことに手足がまだ動き 枯梢  
感謝していても時々愚痴が出る 弘朗  
悪友の感謝は一升提げて来る 軒太楼  
ゆつくりと手足伸ばした終い風呂 冬子  
感謝する心の悔いが暮へむく 夢酔  
妻が居て子が居て孫と遊ぶ日々 甲子郎  
感謝する生活に消えた怨み節 代仕男  
感謝状飾って村の散髪屋 静子  
感謝する言葉はいらぬ夫婦愛 宵明  
感謝状一枚世間に忘れられ 可住  
一粒も残さず食べて拝む箸 右近  
手に職があつて楽しい白い眉 公一  
感謝するポーズを知らぬ日本人 どんたく  
あなたはと決り文句の感謝状 幸一  
感謝祭などと商魂逞しい 七面山

忘れてた行為感謝の文届く 忠三  
見返りのない親切へ手を合せ 素身郎  
電話口老母が気弱な礼を言う あやめ  
みどり児の指の揃いに感謝する 森脇和子  
感謝する心が徳を引き寄せる 規不風  
四季四季の恵みに謝して村のどか 寛然坊  
関白が感謝している妻の鈴 重人  
生きている感謝に朝の歌が湧く 新一郎  
名物を言うような礼状届けられ 伊津志  
ものを添えて小さな世話の礼 明水  
飽食へ感謝に遠いゴミ袋 雄々  
三食昼寝夫の背中へ手を合わせ 赤木和子  
有難うただ一言の協和音 多賀子  
夫への感謝で靴を光らせる 荒介  
公園の掃除が呼んだ感謝状 寿美  
かな釘の一字一字にある感謝 只士  
佳 寿馬  
生かされて今山寺の鐘をつく 静歩  
この靴妻が感謝のタブレット 木魚  
大地にも感謝のキスをするパウロ 正敏  
言葉には出さぬ感謝を顔で知る 春日  
雑炊がああ美味かった日へ感謝 カズエ  
人 したたかな杖です妻に感謝する 里風  
地 感謝状一つが温い父の部屋 優  
天 感謝状頂いてから繋がる 耕花

軸  
老麗でありたい日々を妻と居て  
捨てる

竹中綾珠選

信仰に生きても欲は捨て切れず 兼治郎  
振り捨てた心算の過去が疼き出し ひで  
捨てた恋愛経てみれば懐かしく よし美  
ゲートボールに捨てて来ましたが愚痴 寿美  
翔んでゐる女が物を捨てたがる つくし  
捨てられた雑誌で拾う明日の知恵 山久  
一戸建夢は捨てない宝くじ 天彦  
捨て台詞残し押売りふりむかず 忠三  
捨てられる予感妻にもある覚悟 寛然坊  
吸殻の捨て場に困る子供の目 千秀  
煩惱を捨てた僧衣で訴訟沙汰 本蔭棒  
アフリカを偲んでパンの耳捨てず 右近  
時折はストレス捨てに故郷へ行き 冬子  
意地捨ててからが気楽な平社員 公一  
何もかも捨てて浄土へ旅仕度 寿馬  
赤紙一枚南の島に命捨て 春日  
お隣の茶の間へ不満捨てて来る 耕花  
人情を捨ててまで追う私利私欲 章久  
石段を数えて煩惱捨てて来る 今日子  
捨てた子を頼る親でも親は親 甲子郎

身に ついた 勿体ないが 捨てさせず  
女にも 捨ててはならぬ 意地がある  
捨てた 母慕つて 残留 孤児 帰る  
捨てられた 種が 芽を出し 花を 付け  
捨てて 来た 犬が 氣になる 夜の 雨  
我が 家まで 持つて 帰れぬ 花名 刺  
捨てる には 惜しい 会社 の 生字 引  
捨て 切れぬ 妬心 一つを 胸に 秘め  
過去 捨てて 酒だ 一人に しておくれ  
子を 捨てた 罪は 女を 狂わせた  
自我 捨てて 家に 平和を 取り戻し  
住込み の 飯場 で 過去 は とうに 捨て  
捨てられた 過去 あり 人を 信じない  
肩書 を 捨てると 靴が 軽くなる  
欲 捨てて から 人間 が 円う なり  
親も 子も 捨てて 邪恋 の 橋渡り  
捨てられた 過去 を 問わずに 父母 を 恋う  
捨て 切れぬ 思慕 つの らせる 夕しぐれ

佳

使い 捨て 出来ぬ 時代 が 目の 前に  
捨てかねる 文藝 抱いて 老いの 坂  
捨てた 恋 拾つた 恋も あつて 古稀  
無縁 仏 捨てられた まま 苔が 付き  
捨てられる ことには 馴れた 泣き 黒子

人

捨てた 句が 名句 の ように 思えて 来

地

捨てられぬ 意地 が さつと 辞表 書く

天

弘朗

正敏

正坊

惠美子

義美

高明

軒太楼

ゆう也

素身郎

京子

代仕男

保男

宵明

明水

三吉

虹汀

赤木和子

元江

結局は 捨てられた の よと 煙草 の 輪  
捨て 去つた つもりの 過去 が 夢に 出る

軸

## 欲

### 川上 溪水 選

天彦

惠美子

よ志子

弘朗

たず子

喜醉

つくし

木魚

覚然坊

佳雲

どんたく

赤木和子

婦美子

夢醉

文平

重人

武水

テルミ

只士

明水

人の 言う 五欲 は 倍も 持つて いる  
欲の ない 奴と 受験 の 子 を 叱り  
三学期 二学期 追い越す 欲 が 出る  
本當 の 欲 は 算盤 など 持たぬ  
形見 分け 欲 な お人 が 値踏み する  
医者 ある 日 患者 の 欲 を かき立てる  
欲出した 馬券 は 宙に 飛ばされる  
赤ちゃんの 欲 は 乳房 を にぎりしめ  
欲捨てた 日 から 世間 が 広く なり  
子宝 が 重荷 を 背負う 親 の 欲  
妻不貞 寝欲 求 不満 から らしい  
勝ち進んで 来ると 無欲 が 嘘 になり  
食欲 は 普通 それで 肥満 型  
欲の ない 人と 見られて 人が 寄り  
私利私欲 閑魔 の 前まで 提げ 歩く

佳

エリート の 欲 は 汚職 に けつまずき  
欲捨てて 見れば 言いたい 事が 言え  
どの 欲も 十分 に 持つて 達者 なり  
欲の 群れ 十日 戎 が 笑つて いる  
射程 距離 となつて 欲心 また 芽生え  
持てば 持つ 程 欲 が 深くなる

人

欲の ない 指切り だ から 騙せない  
凡人 の 欲 は 冥土 へ まで 続く

地

暗耕 雨 説 が 株屋 へ する 電話  
長生き の 欲 に ひ孫 の 顔 が ある  
老婆 に 着飾る 欲 が まだ 残り  
欲捨てた 時 から 見える 人の 裏  
数珠 を 繰る 指 から 欲 が 捨て きれぬ

天

テルミ

サチコ

欲がある から 目標 に して 競い







相談をする父母がいて張りもあり 忠 広

(相談役の父母が達者で張りもあり) 同

(相談に行けば行ったで愚痴ばかり) 同

(相談に来てドラマと愚痴ばかり) 同

(相談をされたのはみな決定後) 同

(決定後相談される隠居部屋) 同

(身上相談シナリオ通り演じてる) 同

(身上相談シナリオ通りに演じ分け) 同

(相談もなしに失敗を持つてくる) 同

(相談もなしに失敗持ちこまれ) 同

(相談もせずに失敗押しつける) 同

(恋人に相談出来ぬこともあり) 同

(相談の余地もない無視した煙草) 同

(相談を無視するような紫煙の輪) 同

(何事も相談する面倒さ) 同

(これしきの事も相談また相談) 同

小 愛

克 子

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

物言いがついて改め相談す 同

(物言いの矢が相談に突き刺り) 同

(多忙でも遊ぶ相談すぐ出来る) 同

(遊ぶ相談なら多忙でも多忙でも) 同

(母の日の相談母に内緒でし) 同

(母の日の相談 母には内緒ないしよ) 同

(相談欄自分の恥を全部書き) 同

(相談欄恥さらけ出しさらけ出し) 同

(女生徒の相談大人呆れさせ) 同

(金の無い同士の相談まともらず) 同

(金欠病同士の相談らちあかず) 同

(チビ達のわるさの相談すぐ決まり) 同

(チビっ子のわるさの相談すぐ決まり) 同

(歳費上げの相談野党も乗ってくる) 同

(無理難題美容相談困らせる) 同

(低姿勢相談ごとを匂わせる) 同

(相談役の出演が無くて平和です) 同

歌 子

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

聞きたくない相談も来るお人好し 保 夫

譲歩するブラスアルファー持つ相談 同

相談に行つて老父には言いそびれ 同

相談は二つに一つ金と知恵 同

新聞の相談欄の全裸像 同

行政相談破れ太鼓の音がする 同

相談の糸口掴む海が風ぎ 同

来年の相談をして枯葉落ち 同

相談に応じますよは高金利 同

相談はしたがメダカの群は消え 同

離婚劇あれが相談だったのか 同

根回しが効いて相談形だけ 同

なまじつ相談にのり金が要り 同

相談があると呼び出し縄のれん 同

相談に乗つて虎穴の深さ知り 同

相談の力を借りた意志表示 同

双方へ虹の懸橋する相談 同

夫の他に相談出来る人が居て 同

相談へ夫は相槌打つばかり 同

コンピューターのボタンに相談して見ろよ 同

相談へ胸開け放つ鍵がない 同

相談をしたら古疵疼き出し 同

相談へネジ一本を信じ切り 同

同 同

同 同

# 川柳塔社常任理事会 (11月1日)

出席者 栗・薫風・水客・紫香・太茂津・与

呂志・柳宏子・鬼遊・重人・凡九郎・岳人・

天笑・萬的・笛生・史好

《議事並びに報告事項》

▽栗主幹の喜寿・金婚・句碑建立五周年記念

川柳大会は60年9月29日(日)新阪急ホテル

2階紫の間で行うことに決る。実行委員によ

り具体案を練り、追つて本誌上で発表する。

▽8月21日放映の『よめやうたえや川柳天国』

の句集(NHK発行)に掲載の本誌広告を見

て添削の希望者がふえ、黒川紫香氏に添削指

導を依頼。

▽明年の新春おめでとつ会を別掲(表紙裏)

の如く決定。

▽竹内花代子、落合正江両氏の同人推薦を了

承。

▽日川協幹事に西田柳宏子氏を推薦。

(史)

■12月の常任理事会は1日(土)

題 樗 12月10日締切(2月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四

⑦七一一 本 田 恵 二 朗

(投句のきまり) はがきに五句まで――健

吟あれ

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

# 柳界展覧

集録・板尾岳人

★「犬吠」 創刊10周年記念誌上川柳大会・作品募集課題と選者

「木」

斉藤 大雄選

「火」

西尾 栞選

「土」

宮本 紗光選

「金」

去来川巨城選

「水」

川俣 喜猿選

各題三句・句箋一枚に一句

大森風来子選

二組(同じ句)

渡辺 蓮夫選

投句料 千円

磯野いさむ選

締切 60年1月31日必着

成田 孤舟選

投句先 〒276千葉県八千代市高津637 西村方 誌

上川柳大会係宛

★日本川柳協会6月24日第8回全日本米子川柳大会の作品集が発行された。入選作品20頁

★さらば大陸川柳人同窓会9月29日・30日天見温泉南天苑で19年続いた大陸川柳が幕を下し川柳塔相談役東野大八先生は「川柳塔中国吟行の旅」からすぐ空港より参加、上海の風を身につけられたまま解散の挨拶を述べられた。

★川柳ますかつと第3難詠の選後記に寺尾俊平氏は、平凡に生き人間のひたむきな生活観の中から句は生まれ、表現化されるばかりである。いたすらな造語の時代はもう過去のものになったと述べられている。

★川柳レベラアップ 関 水華著

三六一頁の美装本で定価二千八百円、近代文芸社より発行(内容)古川柳と違つて現代川柳・女子大生の川柳観・発想の転換・句集「終りなき旅」等

★川柳「松江番傘」聚落鑑賞にて田中好啓氏が本杜同人・堀江正朗氏の句(耳だけの欲でも満たされる日々よ)を取り上げ、遙々の路程を、毎年、路郎忌に参加する作者で尊いことだ、伴せの日々も永遠に続く、と絶叫したと結んでいる。

★川柳きやうり吟社創立65周年記念句会が60年4月21日(日)東京都千代田の神田明神……明神会館にて開催

★第38回長野県川柳大会が松本商工会館にて総員一六四名の参加を得て盛大に開催された。

★本社副理事長・若柳潮花(法名・秋岳茂照居士)の遺句集が編集・黒川紫香氏によって発行、11月7日本杜句会参加者全員に配布された。

★10月28日尼崎サンシビツクで開かれた兵庫県民川柳大会で林はつ綾さん(同人)が県会議長賞を、児玉歌子さん(誌友)が神戸新聞社賞を受賞された。

★色鮮やか「川柳ふすま」久米南町・泰西寺の庫裏に四季の句と花木を描かれた川柳ふすまがお目見え、このふすまは、倉敷市で川柳道場を開いているベテラン川柳家の水粉千翁氏(本社参事)が描いた。依頼した泰西寺長谷川住職も紫光の雅号で知られ、54年にも千翁氏に頼んで本堂客殿のふすま6枚を川柳ふすまにしながらの庫裏に続き、近く完成する茶室も千翁氏の筆で飾る予定。泰西寺より、川柳寺として有名になるかもと評判になっている。

★誌友・永田俊子さん(熊本)は去る11月4日熊本川柳大会に於て総合点第一位に、最優秀句に左記の句が選ばれた。

ハンモック明日の地球を知らず揺れ

また誌友・大川幸子さん

（熊本）も熊本県民文芸コンクールに於て川柳部門第一席の榮譽を得られた。

▽お便り△

■私、生れが北朝鮮です。終戦で体一つで引き揚げ、父はあちらで病死、母は四人の子供を育てるのにそれはそれは大変でした。10月に女学校の同窓会があり朝迄語り明かしました。父が国鉄マンでしたので、北京奉天等いつも遊びに連れて行ってもらったことがなつかしいです。大陸は広いでしょう。一度ぜひ行きたい

（小野 克枝）

中国旅行お蔭で楽しい思い出の数々、ようこそ仲間に入れて頂き感謝の気持ち一杯です。

（平野百合子）

■中国吟行の旅のつかれはすっかりとれました。米子はそのそろ寒いので風邪に負けないようにしてはいるのですが、命を大切に、また旅が出来ますよう。一つ消し一つ生れる月の夢

(八木 千代)

でも想い出となりました。

■10月27日朝日新聞夕刊の

(林 瑞枝)

文芸欄に貴誌9月号の誌評

掲載、数多い柳壇誌からト

ップに選ばれましたこと、

お喜び致します。

(繁野 貞吉)

■尼 緑之助先生は10月22

日出雲市の中央病院へ入院

されました。会は代仕男先

生がしっかりと守って下さ

るようお願いして協力する

つもり、尼先生のお留守を

固めたいとおもっております。

(堀江 芳子)

■二賞発表句会に参加出来

住吉大社の太鼓橋を渡りと

所・寺田町・高松会館

兼題||真つ平・見栄・結ぶ

名士

■南海電鉄川柳例会

日・12月20日(木)夕6時

所・南海会館内南海電鉄本

社地下食堂

兼題||内線・炭・借る

■東大阪川柳同好会

日・12月22日(土)夕6時

所・東大阪社会教育セン

ター布施駅北へ5分

兼題||枝(わざ)・指輪・

留守・儲け

■富柳会(忘年川柳会)

日・12月13日現地AM11時

所・河南町・太子温泉

兼題||忘れる・スランプ・

近道

■堺川柳会

日・12月18日(火)6時

所・堺青少年センター3階

兼題||窓・私・酒・いたわ

り

■もくせい川柳会

日・12月17日(月)1時半

所・豊中市立中央公民館

兼題||鍋・暮・自由吟

## 新同人紹介

竹内花代子

水客・紫香・白漢子推薦

落合正江

一葉・薫風・緑之助・紫香推薦

白百合川柳社主催

## 第19回岡山県川柳大会

日時 昭和60年1月27日(日)9時開場

場所 岡山県邑久郡邑久町 中央公民館

兼題

妬く 西尾 栗選

紙 室田 千尋選

握る 橋高 薫風選

冷える 水粉 千翁選

底 浜野 奇童選

天国 山本 柳化選

傷 大森 一甲選

影 前田芙巳代選

締切11時・各題2句

席題 当日一題

特別席題 当日一題(全部に呈賞)

会費 千五百円(発表誌、昼食呈)

投句 縦22cm横4cmの句箋、各題2句以内

投句料500円を添え1月25日必着

〈投句先〉〒701-42

岡山県邑久郡邑久町山手1116

嘉数 幸栄宛



若柳潮花追悼

本社十一月句会

なにわ会館

七日・午後六時

仲秋の名月を見ることなく逝った潮花さんを悼むかのように、まん円い月が中天に懸っている。全頁黙禱で句会の幕が開く。花代子未亡人に代り紫香氏がお礼の言葉を述べた後潮花さんの思い出を語られたが、小学校四年の時の出会い以来、約六十年間一心同体であつただけに、川柳のこと、踊りのこと、女のこと、と話は尽きない。「この上は水客君と二人で三人分、川柳一本で頑張っていく」と結ばれた。

今日のために忍ぶ草として配られた「潮花遺句集」を拝見し、改めてその抒情溢れる潮花川柳を懐しく思ったことである。

初出席は上原逸・笠嶋恵美子(高槻市)、茂見よ志子(吹田市)、岡本天平(寝屋川市)。今月の月間賞は河内天笑氏が獲得。(史)

(受付)与呂志・重人  
(進行)天笑 (記録)健司・射月芳

出席者—与呂志・水客・花代子・白漢子・杜的・逸・紫香・雀踊子・千秀・只士・千代三・漢介・景子・寿美子・敏・天笑・金太・天平・みつる・三男・正博・隆二・喜風・武庫坊・年代・柳影・満津子・道子・三十四・古都路・右近・恵美子・よ志子・薫風・栞・岳人・幸・智慧子・英壬子・光代・登志代・カズエ・狸村・花村・はつ絵・美代子・白水英子・智子・規不風・蕉露・冬葉・鬼遊・勝美・覚然坊・重人・久子・春蘭・柳仲・太茂津・凡九郎・勝晴・白兔・浦野和子・きみ・千寿子・いわる・女・みつ子・笛生・柳宏子・形水・節子・洋敏・史好・寿美・悦郎・幸生・射月芳・楓楽・小路・洋子・度・頂留子・吸江・健司・文秋・好郎・月子・寿子・喜一・弘生

席題「つまむ」 岡本天平選

穴埋めへつまんだ金が命取り  
つまみ喰いきつちり子供に見付けられ  
味付けの味賞めているつまみ食い  
つまんだらたかがビールナツでは済まぬ  
塩をひとつつまみ仕上げの味にする  
鼻つまみものだが気骨ある男  
神様がつまみ忘れた低い鼻  
ひとつつまみにされごんたくれ裁かれる  
青田がり新大卒をつまみぐい  
つまむ根をしつかり知ってるいい男  
女から見れば男のつまみ食い

光代 柳宏子 笛生 景子 柳影 鬼遊 寿子 みつる 与呂志 与呂志 与呂志

つままれてやっぱり僕はほり出され  
ちよくちよくつまんで大きな穴になり  
どんぐりをつまむとやがて冬の声  
糸くずをつまむ振りしてそつと寄り  
試供品つまむと買えと言いたそつ  
一つまみ姑に習つた隠し味  
可愛く一寸つまんでみたくなる  
ひとつまみの塩で砂糖生きてくる  
つまみ喰いあたらしい生棒にふり  
鼻つまみ噂はどでもい男  
枝豆をつまめばビール欲しくなる  
そつのない妻で先につまんでる  
つまみ食い出来ぬグリコと書いてある  
減量の誓い忘れて菓子つまむ  
交わらぬ紐をつまんでいる二人  
つまむだけつまんで後は知らぬ顔  
指先でつまんだ塩で味をしめ  
一摘みスパイス添える母の味  
塩ちよつとつまんで母の味を出し  
退職を早めた部下のつまみ食い  
つまんだらいかん男がいる隣  
地域ぐるみ協力非行の芽をつまむ  
心ない言葉が伸びる芽をつまむ  
塩ちよつとつまんで出方待っている  
三十年今も昔もつまむ妻

凡九郎 景子 みつ子 恵美子 洋敏 英子 よ志子 幸 満津子 雀踊子 幸 美代子 千代三 敏 みつ子 隆二 いわゑ 浦野和子 右近 三男 小路 三十四 寿美 小路 天平

席題「パレード」 中尾藻介選

パレードが終りぐつたりする市長  
つくりばなしがパレードの先頭にある  
白兔 女



バレードを見ながら野球聴いている  
 バレードの鼓笛が見にく気にさせる  
 バレードを飛び出したいナと思う  
 バレードの仲間になりたい街の犬  
 バレードに横丁の方が混んでいる  
 バレードに森永グリコ店を出し  
 バレードの主役に銃口向けられる  
 バレードを見に行く隣のおくさんと  
 バレードを抜けてラーメン食へてくる  
 龍が出てきてバレードも最高潮  
 バレードの通行止めという遅刻  
 バレードへ天気予報はくんだり坂  
 バレードを引っ張る孫の鼓笛隊  
 バレードに地下足袋はいて参加する  
 反戦反核のバレードならば参加する  
 自衛隊のバレード税金消えていく  
 バレードのおでこにとまる花吹雪  
 バレードの中にグリコ犯いるらしい  
 自衛隊入れれとバレードし  
 バレードのダンスへ口を開けている  
 バレードに合わせた旅のスケジュール  
 バレードが済めば銀杏が散るばかり  
 バレードにもまれ故里の秋思う  
 バレードへわたしも走る安協癖  
 糟糠の妻とバレード見て帰る  
 天神祭りほどにバレード燃えてこず  
 バレードへ一際目立ち家の子だ  
 バレードの運転位は出来そうだ  
 バレードの主役をいちどはつとめたい

形水 幸生 太茂津 楓楽 小路 吸江 射月芳 度 浦野和子 景子 千寿子 カズエ 白水 岳人 カズエ 鬼遊 栗 笛生 形水 文秋 年代 太茂津 和子 勝晴 洋敏 光代 正博 年代

銀杏を踏んでバレードやって来た  
 バレードの途中で小便したくなり  
 バレードに出たいと思う車椅子  
 バレードに参加しました付添いで  
 バレードへ母も乗せたい勝ち力士  
 バレードの列でその気になつてくる  
 バレードへ団地の窓がみんな開く  
 友達みたいな父とバレードを見てる  
 バレードの先頭後ろむきで行く  
 バレードがとつても似合う御堂筋  
 バレードの昂奮テレビから貰う  
 バレードの日には出て来るだらうマリア  
 バレードに誰より高い肩車  
 バレードの息子をずっと撮りつづけ  
 バレードの中に知ってる顔がある  
 バレードの横で売ってるハンバーグ  
 バレードはテレビで見てるのに限る  
 真剣な顔でバレード見えています  
 バレードのバトンガールを知っている  
 バレードに防弾チョッキつけている

美代子 金太 金太 柳宏子 きみ 登志代 杜的 智子 武庫坊 洋子 光代 悦郎 みつ子 景子 紫香 健司 智子 雀踊子 天笑 藻介 兼題「舞台」 藤村 女選

もりあがる舞台黒子の汗光る  
 太道具小道具急ぐ舞台裏  
 まぼろしや武原はんに雪がふる  
 手品師は客を舞台で手伝わせ  
 安来節踊る舞台の道化人  
 撞れた舞台を馬の脚で踏む  
 寿司喰いねえ舞台の海は風いである  
 柳の雨蛇の目が舞台で忍び泣く  
 舞台化粧落せは追つて来る子供  
 再びは舞台にのらぬ舞扇  
 道行きの舞台へ出番紙の雪  
 舞台には鼠小僧がいるらしい  
 羽衣のきらりと潮花舞い納め  
 舞台にも木の葉舞い散る村芝居  
 泣き虫が度胸を見せた初舞台  
 太郎冠者に問いかけられた能舞台  
 舞台終え玉三郎もGパンで  
 お師匠さんが舞台の袖に居てくれる

亡夫 若柳潮花儀死去に際しましては  
 皆様方より御鄭重な御弔慰と御香志を戴  
 き有難うございました。去る十月二十七  
 日、滞りなく満中陰の法要を営みました  
 ので御報告し厚く御礼申し上げます。  
 猶、年始の御挨拶は勝手乍ら御遠慮致  
 しますので悪しからず御諒承下さいませ。

竹内花代子

重人 よ志子 鬼遊 景子 勝晴 右近 千代三 寿美 年代 柳影 小路 藻介 きみ 光代 英子 凡九郎 月子 三男



友達はいつも手ぶらでやってくる  
 友達の一ぱい日めくり忙しい  
 友達が居るかもしれぬ森へゆく  
 旧友のすこし猫背に安堵する  
 友達が本気で恐いことを言う  
 友達も孫へみやげを買っている  
 友達の旦那と比較しなさんな  
 友達という一線はしかとある  
 女房の言う友達の家を持ち  
 ふり向かずに走る友達はこのない  
 友達がときどき釘を打ちにくる  
 友達の言い訳をする借があり  
 友達が来ると気まますしたくなる  
 しょうもないこと友達に電話する  
 もっ少しおつき合いて友とする  
 義理固い友へときどき肩が凝り  
 友達のその友達に騙される  
 肩書きがとれて昔の友となる  
 友達の家には広い庭がある  
 友達に勝手なことを頼むなり  
 友達に浅田彰を読む男  
 E.T.となら友達になれそつだ  
 母さんは僕の親友気に入らず  
 友達の友達と来て冬景色  
 野良犬に友達が居る裏通り  
 友だちは何にも知らぬ顔をする  
 友達には花を持たせて置きましょう  
 こともあろうに友達も胃が痛む

笛生 月子 しみ 洋子 水客 英子 久子 天笑 白兎 洋敏 健司 道子 幸 柳伸 満津子 寿美子 白溪子 史好 武庫坊 射月芳 天笑 鬼遊 史好 月子 岳人 形水 藻介 金太 太茂津

友達がくれる大きなにぎりめし  
 友達がきつと待ってる無人駅  
 友達を見れば私がわかるだろう  
 喋らずに済む友達となら旅を  
 とても疲れて友達のこと想う  
 兼題「香水」 西尾 葉選  
 香水の匂う男は信じない  
 香水を変えて話題になっている  
 香水の匂いがきつい二カラット  
 香水の匂いに負けぬ父の汗  
 香水は老後の話など知らぬ  
 寝間香水昼の情事の罪となる  
 香水の匂う女とモンロー忌  
 ビノキオの鼻に香水匂わない  
 幸せてシャネル五番を知らぬ妻  
 香水へ女は本音秘めている  
 ジャスミンの香り飯場をまごつかせ  
 香水に企みがある夜の風  
 美しい仏へ香水おしみなく  
 香水が甘い嘸き置いて去に  
 香水の匂い残してつんと行く  
 寝たきりへそつと香水置いてくる  
 香水に興味は持たぬ青畳  
 ドンファンが高価な香水買っている  
 免税の香水を待つお見送り  
 香水もわきがも男悩ませる  
 ヘリオトロープの甘さで攻めてくる女  
 シャネルからバリーが匂うてくるみやげ

寿美 楓楽 智恵子 浦野和子 智子 智子 景子 重人 隆二 幸 雀踊子 射月芳 幸 隆二 カズエ 鬼遊 洋子 久子 寿美 紫香 杜的 柳伸 雀踊子 千寿子 花村 浦野和子 滋雀

香水が脳の力を誤らせ  
 嗜みという香水がきつ過ぎる  
 ライバルが逃げだす香水持つてくる  
 香水の匂いで場末だと判り  
 デイオールもシャネルも知らぬ母でよし  
 法善寺横丁で香水すれ違い  
 香水を消したギョウザを胃が嫌い  
 香水で稼いだ空しい銭の音  
 シャネル五番やがては敵として背く  
 美しく老いたい香水一二滴  
 シャネル五に負けない妻の健康美  
 四十坂シャネル五番は苦手です  
 香水が匂うドレスの胸が開き  
 残り香をかくす香水かも知れぬ  
 残り香は香水だけで負けている  
 香水を振つても二十にはなれず  
 香水を捨てふるりの土を踏む  
 恋女房の肌香水を寄せつけず  
 ビストルのかわりに香水持つている  
 シャネル五昨日は昨日のものの語り  
 (清記・楓楽)

武庫坊 杜的 狸村 紫香 岳人 千秀 正博 敏 隆二 健司 白溪子 柳伸 水客 笛生 冬葉 天笑 天笑

竹内花代子さん(高槻市)から  
 亡夫若柳潮花お供養として  
 金一封拝受致しました。

川 柳 塔 社







親の夢叶えて呉れる娘に育ち  
お若いと殺し文句で買わされる  
白緋亡夫に似て来た子の背丈  
それそれに個性の出て来た兄弟  
中年の魅力白髪をちらつかせ  
来年の暦へ娘の星を見る  
生国は播州姫路おらが城

### 川柳後案

井上柳五郎報

綱引きの綱から敵の血が通い  
人生坂荷車夫婦で綱を引き  
ほめかすだけで調書手こずらせ  
老人大学だからと下手をほめかす  
ほめかす口はもぐもぐして始め  
善人の嘘真実をほめかす  
ほめかす嘘が不幸な罪背負い  
思い切り抱けば折れそな腰の線  
すぐ折れる人で何とも頼りない  
一匹になると頑固が折れてくる  
反核へ祖母と孫とが鶴を折る  
折り鶴の一羽はきつと翔びたてる  
夏ばての顔に見られた徹夜明け  
夏ばてを知らず子供のトンボ取り  
夏ばての奥眼をさらにおし込ませ  
夏ばてへ血の一滴も蚊にやれぬ  
控訴審忘れた頃に初公判  
投資家の欲を持ち逃げした中江

### 川柳しんごう

川上

溪水報

富子 八千代 昌子  
大輪 幸好

撮影所の屋根は地上に置いてあり  
車窓より屋根鮮かな新興地  
洗車して彼が迎えに来た昔  
無精髭意外に車よく洗う  
親と子のスキシンシッとなる洗車  
おい息子車洗二百円  
ひたむきに働く父のする洗車  
印度洋から来てたこやきのたこになる  
タコ焼きの列で終つていた祭り  
タコ焼きを横目で睨む令夫人  
たこ焼きが人気をさらう盆踊り  
タコ焼きの熱さを踊らす舌の上  
満足な日々が長寿のいい笑顔  
波立たぬ子等に満足してる母  
満足の笑みがこぼれる美容室  
満足を知らぬ過保護な子に育て

### 川柳大阪

井上

喜醉報

嘉孝 謙翠 弘雄 だるま 晃山 もとみ 鉄心 みる 喜醉 与呂志 洛醉 天平 比呂志 重人

開戦の内幕知らぬ兵の墓  
内幕を身内が崩す畏もある  
超能力スプーンが売れた日があった  
能力は内に秘めてる鷹のつめ  
能力を爪のあたりに溜めておく  
川柳ねがわ  
島国のみなと港にある銀座  
新札に又来る道を教えとく  
満腹になって中流意識もち  
過去は過去色目で見るのはやめておけ  
銀行の表で秋の虫が鳴る  
もう一語しゃべりたかった瞳がうるむ  
新札のたどるドラマはどのような  
新札をカードのように銀行屋  
冷房へ天井向いてる扇風機  
一つだけ聞きたい事ある墨の色  
真ん中にいないと忘れられえうで  
寿の中に新札正座する  
浪人をママが満腹させ過ぎる  
立ち読みがいつか散歩の癖になり  
母の忌に話題の癖を温める  
トットちゃん満腹させたい子と握手  
人間に無理に直され松の癖  
全斗煥見送った夜のうまい酒  
恋をする少し斜めた席がよい  
新札がいよいよ入る小銭入れ  
新札の束みで心無になれず  
誰のため足跡残すかたつむり  
酒癖はなかった筈の貴方だが  
満腹にしてから切り出したい話  
朝顔をぼんやり眺めて日曜日

敏 希久志 司 金太 創吾 松庄 一菁 勇三郎 まさお 杜的 シマ子 求芽 よしひろ 勝美 君子 春子 あやめ 光子 静江 かすみ 一途 一笑 冬葉 吉之助 明代 晴風 一泉

新札に交ると羽根がとれて久し振り満腹感や故郷の味

亜成 右近

新札へ銀行員の無表情  
連想が広がるダイヤのAが出て  
だまされて癖がわかつた勇み足  
三面鏡三面机に老けている

英千子 勝一

美人という枷腹七分目にしとく  
お通夜でうっかり笑う癖が出る  
新札に勝手に狂うスリの指  
花街に育って色目のコツも知り

敬山 鼓城

下宿屋は満腹するまで食わさない  
病人の方が上手に皮をむく  
テレビからウインク覚えた満一歳  
もうあかん言うて三杯目は茶漬

麗水 垂鈍

わかあゆ川柳会  
小砂

あいき 覚然坊

掌にのせれば花みな美しい  
草いきれあ若き日の体臭よ  
トビの目に小麦色の肌まぶしかろ  
酸味なくほった味の新品種

柳宏子 紫香

流灯に靈魂のせて着くは何処  
幻想をのせて盆会の灯を流し  
去りかねる流灯そと押しあけ  
無信心流灯ながめで夕涼み

小 路

流灯が川面に連の孤を描き  
明暗を分けたバレーのワンタツチ  
へソクリを黙って吸いこむワンタツチ  
流灯が流れをかくて戻り出し

敏明 歳栄

逆転のチャンスを決めたワンタツチ  
大戦を二つまたいだねばり腰  
流灯の行く方に浄土信じたし  
ワンタツチ地球が消えるかも知れぬ

惠美子 三和

はるみ 美栄

鈴江 清泉

はるみ 美栄

鈴江 清泉

ねばり腰鬼の最後を見とどける  
京都塔の会

白汀 杜的報

料理する喜びに尼僧満ち足りる  
池に鯉入れて孫待つ夏休み  
高ぶりもなく歩幅のそろう老いふたり  
ボール蹴る秋がストンと落ちて来る

杜的 芳子

一泊の旅が決つてはしやく妻  
旧友にこの前逢つたのも葬式で  
和服なら出せませう中年の魅力  
賤ヶ岳戦のあとを夢とさく

明代 武庫坊

止り木を一つ譲つて打ち解ける  
猛暑でも萩確実花をつけ  
雨脚が湖面を走つて山を消す  
代筆の一字一字へ気を使い

年江 春花

足音で鈴虫かしらなきやみぬ  
指に唾しつかりもんだ蜜にがす  
みの虫の目に百舌鳥の恋かん高し  
松虫草のうす紫が秋を呼ぶ

美穂 紫香

虫つかぬ娘気になる適齡期  
過疎へ来て虫の声には充たされる  
さあ主婦を忘れて宿の箸をとり  
時々はその向いてる夫婦箸

孝江 求芽

駅弁の箸を上手に口で割り  
箸を持つ手に過去の傷ふつともえ  
吉野特産割箸の日向はこ  
簗だけレジャーへ売れた輪島産り

花代子 水客

外孫がわが家のレジャーかきまわし  
川柳サークル卵の花

紅陽 巨詩

彼岸花無縁仏に寄り添いて

如生 飛鳥

白漢子報

里子

秋彼岸赤く燃えたつまんじゅしゃげ  
彼岸花潮満つ如く咲き始む  
お寺さんバイクでお布施かき集め  
お彼岸のおはぎを姑から覚え

栄子 惠美子

彼岸寺に燃えるものあり彼岸花  
秋彼岸尋ねる人の計に出合つ  
侍つす女好きの彼岸花  
三姉妹敵を作らぬ娘から嫁く

眉水 笑雪

敵意なき石榴は腹まで割つてみせ  
甲子園昨日の友は今日の敵  
笑い顔とても奇麗な敵である  
敵のない一生だった亡父の墓

千歩 杜的

ライバルは血圧上がるので持たぬ  
敵のないお家で内緒が通じない  
齢とれば敵も味方もなつかしい  
うなすっているが敵意は燃えている

高子 柳影

正確に量つて作る美容食  
正確につけて家計簿赤字です  
正確に言えと眼鏡かけ直す  
正確に出て駅長は帽子置く

伊三郎 鐙太郎

ホールインワン腕の確かさだけでない  
正確にこづかいねだる孫ばかり  
出動は正確課長補佐どまり  
主客転倒正確なメモ見せられる

求芽 伊三郎

劇場を出て現実には逆戻り  
秋風にやつと外した軒すだれ  
文壇の才女華麗に駆け抜ける

芳子 清子

主客転倒正確なメモ見せられる  
出動は正確課長補佐どまり  
主客転倒正確なメモ見せられる  
劇場を出て現実には逆戻り

水客 白漢子

主客転倒正確なメモ見せられる  
出動は正確課長補佐どまり  
主客転倒正確なメモ見せられる  
劇場を出て現実には逆戻り

嘉子 清子

主客転倒正確なメモ見せられる  
出動は正確課長補佐どまり  
主客転倒正確なメモ見せられる  
劇場を出て現実には逆戻り

芳子 清子



無人駅椅子にヒントが置いてある  
雑巾を踏む足うらに秋があり  
打つこともならじ弱りし秋の蠅

### 倉吉川柳会

渡辺 善句報

よく喋るセールスマンに立てもせず

残り火を抱いて女のひとり旅

残り火が燃える予感に水を差し

笑顔には腹芸見せぬ罫もある

丸優を気にする程の貯金無し

古里の噂も詰めた梨届く

預貯金に目をつけ出した三代目

営業用の笑顔セールス提げてくる

世の耳が新たな噂聞きたがり

立ち話やがて噂は腰下ろし

いろいろと村の噂が寄る焚き火

美人また嫁かず噂が風にのる

ダメ男に案外艶のある話

噂たしめに行くべし酒を買う

残業を笑顔の妻に迎えられ

お喋りが過ぎて男をかるくする

よく喋るオウムにねじをかけられる

喋るだけ喋って逃げた極楽鳥

貯金には縁もゆかりもない家系

食べ残す子よ難民は飢えに泣く

木喰の笑顔絶やさぬ野の仏

喋るのが大儀になったボンコツ車

成仏が出来ぬか縄の灰のこる

演壇に立つて見事な機関銃

血の薄い親子で笑顔絶やさぬ

七十五日耐えると強くなる女

切札を残せば舞台が回り出す

如 洲

博 遊

鬼 遊

碧 水

文 子

千 子

寿 朗

律 子

康 子

かつみ

民 子

秋 人

しづ江

とめ子

松 女

千 秋

柳 風

満 春

弘 朗

や え

まさる

ゆり子

車 楽

おさむ

荒 介

御 前

石 菜

瑞 枝

秋 女

独 歩

無花果が残っているから挽ぎに行く

川柳ささやま

河原みのる報

かけひきのカケラも要らぬ夫婦仲

かけひきを武器に米ソの話し合い

かけひきを知らぬ女で奇麗すぎ

ああ言えばこう言う主流反主流

腹八分おしやべり五分で丸く老い

姑となる日から忍の字腹に据え

腹立ちの証提返事が粗くなる

いざこざはみんなお腹に母おさめ

達筆のサイン不渡りとは哀し

サインペン女は妻になり切れぬ

頼まれたサインが重くのしかかり

落書のようなサインをうれしがり

船出して嵐の海にかけける意地

八十がまだ反逆の嵐抱く

前ぶれの嵐風鈴けたたまし

川柳塔きやら木

石垣

四季を終えやがては皮も眠り出す

体験の不足で乗った口車

レザーシューズ隣の花はより紅く

若き日の思い出こもる皮袋

檜山のバスへあせらず乗るとする

嫁姑脱皮しながらまるくなり

約束を破る仲間に乗せられぬ

波に乗りすぎて方角見失ない

大船に乗る日を年の順で待つ

桃太郎に逢えそうと皮をむく

炭の皮小さな謀叛しなくなる

新築の湯ぶねに匂う柚子の皮

毛皮着て雪の深さの真ん中に

菩 句

米 朝

愛 子

エキオ

胡次郎

ゆう也

テ ル

和 子

貞 子

文 平

可 住

きしゑ

素 水

静 珠

宗 珠

そまゑ

花子報

寿美子

花 子

日 枝

朗 子

伊 都

八重子

純 子

田 鶴

富美子

とも子

な み

時 子

瑞 枝

秋の汽車は夕陽と同じ方角に

けもの道皮の一つも残さない

吊り皮にたよってゆれて終点へ

電話線ぬくい人柄乗せてくる

脱皮してひつそりこもる繭の中

川柳藤井寺

赤木

日々乾く女は未来を捨てている

秋晴れにぼこぼこ大和の白い道

都々逸を聞くテーブルの豪華すぎ

片方の耳から噂出してやり

唇が乾いた女の独り言

釣れるまで穂先にじつと赤とんぼ

選ばれてなお準ミスの不満顔

さわやかな風アトリエをのぞき込み

千 代

玲 子

晶 子

千 枝

富 枝

和子報

与呂志

哲 朗

喜代志

美代子

つ や

治 子

一 香

### 佳句地10選 (前月号から)

田中正坊選

咲いて散る命がほしい水中花

平凡に生きる喜び新茶汲む

子を寝かせ女に戻るしまい風呂

倅せは今宵母娘の遠花火

一戸建てしばしチラシの中に住み

孫と居る一刻マリアに近くなる

定年で降りた駅には道がない

サングラスかけてないのが組のボス

平和ですボンボンボンと港明け

図書館で眠りつつせている古典

米 朝

きく子

みど里

喜 風

昭 子

倫 子

只 士

覚然坊

素 石

武 太

松茸も外国産が大いばり

しみじみと若さが欲しい独り言  
親子とも招待受けた敬老日  
国賓で来て天皇に謝らせ

こおろぎの引つ越し待つて草を抜く  
如雨露へ蛙くるりと向き直り

高原の朝さわやかに羊追つ  
早朝のジョギング心さわやかに

一本の歯をも欠かさで喜の祝  
大阪の中に山あり茶臼山

愛の果て憎しみの果て心澄む  
さわやかなロマンを語る老い二人

乾くまで小屋でくつろぐ俄雨  
街路樹の乾き潤す通り雨

海女が干すわかめ纏れたまま乾く  
さわやかに負けて人氣の高見山

病む人の心をそっと抱いてあげ  
川柳塔唐津支部(十月分)

久保正敏報

案内する忍者がからくり屋敷見せ  
町の子は汗ある日々に食倍加

部屋主はご免早々退院願ひ上ぐ  
二万本と大見栄切つた花菖蒲

母の背の丸み気になる仕付糸  
子の宝開けてはならぬ主手箱

残る夜を拗ねてみたくて父母と寝る  
海山の亡母を憶わず子を想う

空振りの話に恩師うなすけり  
貿易の摩擦が農奴の首を締め

川柳塔唐津支部  
久保正敏報

律子

吸江子

昭子

本蔭棒

伴男

繁人

清心

秋園

和美

和美

雅美

末一

みのる

麻雄

ふさ

たかし

御先祖に感謝彼岸の墓洗う  
生しいたけ買ってきたのに妻が捨て

りユーマチが毎日に痛み増す不安  
銀行へ振り込む給料憎らしい

誰がため集りなのか敬老会  
午後太陽が陰る窓斜陽族

天秤棒床の間飾る立志伝  
日本史に汚点残した無条件

川柳わかやま  
転んでもあしたの切符手放せぬ

堀端  
喝采の風のさむさに目が覚める

駆けぬける歴史の塔は聳え立つ  
どん底の蟻で築いた金字塔

闇カルテ白い巨塔へメスを入れ  
松頼の余韻漂う月の塔

心に塔建ててわたくしなりの自負  
砂の塔崩れて海が風いている

語り部としての主張を塔はもつ  
生きざまを刻んで塔を積み上げる

まな板に四季初物の弾む音  
愛の種まいておんなの四季を織る

四季毎に心の窓を開く花  
四季巡り思い出つめるつれ箱

農一途四季の流れに逆らわぬ  
松茸の誇りが四季へ妥協せぬ

地均しの道幾筋か父の四季  
野仏の膝に優しい四季の花

感情の起伏を四季に操られ  
繰り返す四季へ絡まる人生譜

句のものに頂く味のよさ  
転ぶのも一緒と決めた三々九度

虹汀

義美

ちよ

高明

素石

朴竜

正敏

あき

三男報

狂虎

幸秋

信雄

きみ

凡太

和子

正子

転ばすもふんばるだけで骨が折れ  
寝転べば空が私に味方する

転んだらばつきり見えた蟻の汗  
振り向けば転んだ道も平なり

転びました何度も強くまりました  
意地悪な風が転がす冬帽子

逆風にも歩幅を変えぬ広い肩  
風のように生きて人に逆らわず

転ぶたびに亡母のやさしい声がする  
翠洋会

まっ白なままで別れた女その後  
秋日受け歩行器どうし立話

エプロンの白さが残る亡母の夢  
白を切る男のついに胸張らず

研修の旅レポートに興ざめる  
バスポート僕は確かに日本人

短日のにわか旅に出たくなる  
妻の自負白はあくまで白く干す

一筋に歩き続けた靴を脱ぐ  
旅の宴御当地ソング皮切りに

グラウンドの白線にある青春譜  
積立の旅へ追加の酒が来る

母に逆ろうて歩いて行くと云う  
南大阪川柳会

町を掃くただそれだけの年がたち  
長続き夫婦どちらか耐えている

かあちゃんに手綱渡して五十年  
長続きだけが取柄の趣味に生き

あべこべの性格だから長続き  
長続きします先生好きだから

あたりまえだが長続きした夫婦  
中川滋雀報

文代

照子

公代

光子

克子

雀踊子

武雄

桂香

三男

いつを

綾子

良江

光子

照子

みつ子

宏子



長続き陰の力に支えられ  
 長続きしてる椅子から愚痴を聞く  
 妻なればこそ看病の長続き  
 切れそうで続く夫婦のくされ縁  
 救急車とまる雀が寄ってくる  
 引き潮に似て賑やかなギャルが去り  
 賑やかにしてる淋しい女である  
 賑やかな町で育った人嫌い  
 見舞客賑やかすぎて叱られる  
 うれしい日心の鈴も鳴りつづけ  
 賑やかな友と気の合う無口です  
 賑やかに閉会式の幕降りる  
 ぬかに釘遺してくれぬ島がある  
 幸せな手がぬかみそをまぜている  
 糠みその祖母、母、妻と継いだ味  
 ぬか漬へ古い女として生きる  
 ぬか漬は我が家のメイン茹子の紺  
 糟糠の妻もだんだんうるそなり  
 ぬか味噌の味を氣にして母達者  
 熱心な視線は一直線に来る  
 熱心にお百度天は見逃さず  
 熱心になると心配する世間  
 毛糸玉小さくなった昼下り  
 熱心な手入れが咲かす菊一輪  
 熱心な信者は独り者でした  
 覗かれるだけで女は金になる  
 溜息の出るウインドをまた覗き  
 法螺吹いてマダムに財布覗かせず  
 極楽も地獄も見せる覗き穴  
 覗いてる方も覗いた壁の穴  
 無関心よそおい乍ら覗く耳

庸 風 佑  
 晴 風  
 雅 風  
 田 女  
 度  
 章 久  
 凡 九郎  
 千 里  
 春 蘭  
 弘 生  
 ハル子  
 喜美子  
 慶 三  
 重 人  
 柳宏子  
 雀踊子  
 寿 美  
 蘭  
 山 久  
 楓 楽  
 悦 郎  
 頂 留子  
 勝 美  
 善 信  
 芙佐女  
 只 士  
 文 秋  
 喜 風  
 公 一  
 冬 葉  
 柳 伸

滝壺を覗けば地獄が目の前に  
 もくせい川柳会 田中 正坊報  
 寛然坊  
 富子  
 しず  
 よし子  
 寿美子  
 正坊  
 賀代  
 英子  
 明吉  
 慶子  
 隆  
 英子  
 房子  
 博史  
 美祢子  
 きく子  
 岳人  
 鬼遊  
 薫風  
 誠一郎  
 すえ  
 玉子  
 保蔵  
 正一  
 ときお  
 ミツ  
 佳秋  
 かず子  
 美代子  
 枕のしびれを母はそっと引き  
 ついて来いそのひと言にしびれたの  
 クラシック聞いてしびれる雨の夜  
 しびれてる足が氣になる焼香順  
 一期一会しびれるような美女に逢い  
 後の月川面に揺れて笑ってる  
 同じ川同じ水ではない流れ  
 パイパスに江口の渡しさからえす  
 長良川鶴は川底を知りつくす  
 逝った娘にこれしかできぬ花を替え  
 睦まじく夫は夫 妻は妻  
 念仏を唱えながらに活造り  
 サイ銭は先程妻が入れました  
 長生きはしたいが煙草大好きで  
 かまきりがわたしが煙草を振り上げる  
 煙突の高さ見上げる渡し舟  
 政治不信一揆が走る土煙  
 人悲しすぎる木屋匂いすぎる  
 尼崎いくしま川柳会 角野かず子報  
 飲みすぎた時には酔った氣がしない  
 夜もすがら小皿叩いて酒をのむ  
 地下街の死角で浮浪者蹲る  
 皿洗ひしたことある社長さん  
 皿割つてからの別れが言いやすい  
 包丁のリズムに乗って朝が明け  
 古い堀野菊が秋をのぞいてる  
 この電話出たら火種が燃えあがる  
 幸せになりたい包丁光らせる  
 マンツーマンかたい頭でこぼれ落ち

## 定金冬二作品集

### 『無双』 発行川柳句会

日時 昭和59年12月2日(日) 10時半  
 会場 大阪府立労働センター6階  
 京阪・地下鉄天満橋駅下車西へ5分

#### 題と選者

「ひらく」 (当日発表/渡辺 和尾  
 「敵」 橘高 薫風/田中 好啓  
 「生きる」 岩井 三窓/寺尾 俊平  
 「本」 小松原爽介/土居 哲秋  
 「さがす」 平田のぼる/堀 豊次  
 共選につき同一作品を各題  
 2句出句、席題なし。

▽作品集「無双」鑑賞……墨作二郎  
 欠席投句拝辞 出句締切12時

▽おはなし……泉 淳夫  
 北川絢一朗

会費 千円(発表誌呈)  
 「無双」三千円(当日発売)

主催 川柳一枚の会

火を消して男少うし怖くなる  
うけ皿のない淋しさをぶちつける  
口開けて目薬をさすおじいちゃん  
飽食の自嘲がつづく昼の月  
堀越えて母からにげた青い毯  
囁託という肩書の緑を食む  
与えられた包丁だから研いでおく  
包丁がリズムに乗ると恐くなる  
片付かぬ皿に遠慮がひとつある  
悠々自適男が洗う昼の皿  
憎しみが虚しく消える喪の知らせ  
山鳩が啼くふるさとの忌に帰る  
仲のよい夫婦一つの皿に盛り  
すっぱりと斬る包丁を研いでいる  
いい月で駐在さんを誘い出す  
満更でないのが一人澄ましてる  
月芽えて妻と別れた凍てた道  
埋み火の思いきれない灰になる  
十五夜もいざよいも雲月だんご  
闇のボス地下のルートを支配する  
入墨の男に包丁よく似合う  
隣からいただく皿がまだ温い  
宿に得いてから老夫婦何もせず  
忘れ得ぬ人と二人で食べた皿  
武庫川で親子がバツタ追いかける

川柳高知

川竹

松風報  
伸

良征 静江 伊三郎 かすみ はし芽 一 郎 晴 子 札 子 幸 子 牧 郎 郁 栄 水 声 君 子 年 代 紫 香 歌 子 墮 駄 美 智 子 恒 三 春 子 伊 升 定 人 幸 次 郎 すすむ 常 子

トンカツになる運命を知るか豚  
曲り角だろうか夫が鼻につき  
考えの甘さを悟る曲り角  
お化粧の時間が長い曲り角  
曲り角曲ると妻の灯があかい  
晩酌が過ぎてリズムが狂いだし  
指笛となる少年の淡き恋  
少年に軍靴の音は聞かすまい  
妻よりもお先に寝入る曲り角  
紅一点去んでほめたりくさしたり  
河内 月子報  
新鮮な空気に抱かれ葉が着く  
流し目を素直に受けて恥をかく  
人事異動で癒えるの空気入れ替える  
濡れ縁でやすらぎの花数えてる  
神様に芋供えと冬の風  
じんわりと預金が増えるやすらぎよ  
他人にはわからぬ合図持つ夫婦  
仙人が好む空気が濡れている  
やすらぎへでかい構図を描いてみる  
押入れの空気はとて母思い  
空気のような人には一寸なれないぞ  
父と子の空気険しくなってくる  
スモッグに煙が溶けたサンマ色  
芋の蔓食べた仲間にある絆  
出迎えてくれた空気はみどり色  
空気吸う少々税がかかっている  
あの峠こそせわが家の灯が見える  
山からの便り芋ハン押してある  
秋の灯の中でゆっくり変身す  
豆球を点してからのやすらぎよ

登舟 千鳥 佳風 幸泉 竹萌 和興 節子 菊野 三吉 松風 東雲 金三郎 柳右子 柳伸 甘平 素灯 元紀 悦郎 岳人 凡九郎 奈志 武庫坊 年子 妻代 登舟 天笑 月子 笑痴

おんな対女の距離にある空気  
城北川柳会 野呂 右近報  
一と雨がほしい埃の御堂筋  
儲かると持ちかけられて欲を出し  
意欲あるのに停年の赤ラネプ  
ギャンブルへ慾の無いのが又儲け  
白線の向うに黒い噂居る  
鈴虫が鳴かなくなつて秋終る  
慾捨てて剃髪しても生きている慾  
日に感謝月に感謝の老いの日々  
慾捨てて心安らぐ昨日今日  
外人の目には不思議な常夜燈  
クレヨン先の先からピカソ誕生し  
働ける今日も健康ありがとう  
はき捨てた過去が恋しくなる落葉  
核々と進歩する程心配だ  
何事も神の御守護と感謝して  
生涯を無慾に生きて名を残す  
生きて居た良かった祖国見えた時  
長生きの慾に曾孫の顔がある  
乱映の虚実を映す秋の月  
果物の秋の実りに感謝する  
平凡に暮せる日々が感謝です  
逆光線に佇てばまだ美人です  
うまい話つゝ慾が出て身の破滅  
生きている慾雑木林の競い合い  
慾得を捨てて裸で野天風呂  
文楽に招待されて肩こらす  
感謝して取る箸ますい物は無い  
墓地をかう話もはずむ老夫婦  
亡き姑に感謝も少し彼岸寺

紀美女 圭介 晴子 悟郎 頼一 山久 綾珠 仙吉郎 八重 星斗 静歩 重彦 公一 茂樹 すみれ 志保 達一郎 弘生 新一郎 炬子 節子 婦美子 午郎 だし 麻黄 悦子 正之 右近 達子



鷺草に女は夢を追って行く

たとえばの話でゆれる夫婦仲

感謝する心を子等に植えつける

長生きの秘訣は感謝の二字とあり

愚痴の苦勞へ感謝の年になり

愚痴へ戸を立てて感謝の灯をともし

優しい人に真珠を贈る夢に酔う

母さんの後姿が道しるべ

### ハワイ柳ウイロー社 市岡 暁舟報

ロボットに人が使われそうになり

ロボットのどうやらユニオン潰す気が

台所ロボットに委し長電話

ロボット労働の職場移かし

ロボットのピアノ弾く手はグロテスク

コンピュータテクノストレス蔓延はす

ロボットの動きに合せ動く人

コンピュータ人間共が馬鹿に見え

交通へロボットうまく旗を振り

子供達ロボット君と握手する

アメリカの赤字に拍車ロボットから

オーバータイムロボット不服述べもせず

### 岸和田川柳会

植山 武助報

条件が良すぎて迷う求人蘭

マイベース崩さぬ仲間て孤立する

生返事裏で友達待つている

あれこれと五十の夢を持つ

歩かねばご利益ない二里の道

急逝の才女に老いは来なかった

歳月が面影だんだん遠くする

転勤で面影変えた子の帰省

面影と傷跡ホクロで知れた孤児

泰世

静子

茂一郎

倫子

道子

テルミ

満津子

登志代

暁舟報

山

公女

蒼生

張賀

陽子

香夢

虹宵

一牛

秀山

万里歩

紅溪

曉舟

武助報

こう

ひで

楽天

富志

さよ子

寿美子

礼子

希久志

ゆづる

寄せ書きに面影残る筆の跡

鉄瓶の錆び笑い合う老夫婦

片付けて又又孫に叱られる

豊作で雀を許している案山子

面影を偲ぶと揺れる丸木橋

面影もなく故郷の駅に降り

面影をたたくスギターの月の牙え

### 富柳会

藤田 泰子報

味方して得する方に人がより

風の神味方に雨も連れてくる

悔いにくつ積んで港の灯がともる

ボンボン船帰る港で妻が待つ

出口までつなぐ手があるあたたかさ

核漏れて港に着けぬ無駄な船

詩のない港軍靴の音がする

恋情を包む港の波頭

港から出たことのない島の母

母と妻亭主はどちらに味方する

更けてゆく港は海の底になる

愛憎の極み出口見つからぬ

出口のない私の地図を書きかえる

小さな出口蟻には青い空がある

嫌いではないはず黙ってつてくる

鼻唄が出口へ来るのは要注意

ふるりを捨てて港の船はるか

港から色々演歌生れる

戦に勝つと味方が敵になる

味方から崩れてしまふ砂の城

傷だいて船は母港へたどりつき

幸せをつかむ出口がない日暮れ

刑務所の出口に落ちていた財布

狸村

幸代

武助

射月芳

甘平

白光子

操子

泰子報

千代女

章久

森子

文次

今日子

莊次

富久一

優

美緒

トシエ

花梢

美代

ベ女

維久子

喜酔

与呂志

美津子

喜代

弘生

狂虎

久子

山久

岳人

反核で港の水を騒がせる

人生模倣な出口に出てしまふ

りんご船お祭り好きの血がさわぐ

サークル檸檬

田形 美緒報

喜多郎は空をつかんでポーズとり

猫の眼にねずみをつかむ意志みえず

掴まえてくれるのを待つつかくれんぼ

つかんだと思つたのはうしろかけ

ふるさとで運をつかんだ風だより

掴みどり大きな手にはかかわない

盛装の人もにぎりは手づかみで

ダイヤルを途中で止めたのはヒント

敗戦で掴んだ自由謳歌する

美しき川も狂えば泥水に

豊かすぎて猫はねずみをつかまえず

石一つ流れる水の分岐点

つかんだと思いつかまれたと思つ

川柳ベン皿(前月分) 鈴木 節子報

赤とんぼ簞笥の中の茜色

いたずらな子がいて引手のないタンス

古ぼけたタンスが歴史を知っている

暮し向き詰めるタンスのきしみ出し

洋ダンス娘の彩になつてゆく

古ダンス我家の歴史しまい込み

嫁に行かぬ儘に古びし桐タンス

古簞笥たしも五十を過ぎました

また一枚買うてタンスの肥にする

打吹川柳会 奥谷 弘朗報

得意顔すると見えない矢が刺さる

有頂天得意の足がけつまずき

得意顔心の錆に気がつかず

柳太

凡九郎

泰子

雅子

今日子

美房

森子

久子

千代女

三四子

美代

美緒

登美子

美子

泰子

薫風

節子報

田鶴子

いくの

いく子

勝子

好子

満智子

智子

節子

弘朗報

雄々

梅朗

興一

得意先汲めどもつきぬ愛の水  
得意などないが明るいところで  
浪花節得意な父で貧乏で

お得意を一軒ふやす汗を拭く  
得意気な舌三寸は奥が見え

飛入りに得意な喉を勧められ  
宴会は何時も得意な黒田節

左前馴れぬ着物にご満悦  
仲人の得意の舌が攻めている

得意とは言わぬがこの道五十年  
得意先今日はペコペコ飯の種

子の見合い嫁が得意のお茶を立て  
角さんは得意のポーズ忘れな

上得意信じて裏で裏切られ  
お得意のカバーが効かぬ九回目

得意技出せないままに終つちやい  
尾浜川柳会

鍵っ子がまた乗りに来る縄電車  
俺はまだ冥土の地図は要りません

縄のれんやたら目につく時期となり  
灯台守は海の素顔を知っている

野良犬と仲よしになる雨宿り  
昔乳母いまはテレビが子守りする

狛犬は神のお留守を知っている  
老いてなお女でずもの髪染める

白地図に二人の道を書き入れる  
二の坂を楽しく登る共白髪

思いきりサンマが焼けるマイホーム  
老いてなおいちど逢いたいひとがいる

足音にいちどに止んで秋が消え  
一度だけ盗んだキスのほろ苦さ

吉朗  
松女

観洋  
弘生

豊  
いわず

志づ子  
文子

川楽  
重信

孝彦  
一心

八太朗  
ミヤ子

早苗  
弘朗

夢之助  
弘治

貞吉  
礼子

すみ  
寅之助

貞男  
江美

武庫坊  
いわず

歌子  
佳秋

保  
弘

待合室患者なかなか名医なり  
事故現場地図に花の絵描いておく

いちどだけあとふりむいて旅に出る  
青い鳥世界の地図から逃げたのか

ひよこひよこ小犬がついて来て困り  
ポツクリさんへ矢印がある母の地図

川柳ペン皿  
鈴木節子報

石女の夢に終わった三輪車  
三輪車吾兄の成長を見つめてる

三輪車の青い坊やだと思つ  
弟に今日はゆずつた三輪車

三輪車古びぬうちに子は育ち  
兄さんに負けてはおれぬ三輪車

赤とんぼ追いかけて行く三輪車  
亡き人の想いを断てず茶を淹れる

男の子が一人ほしい三輪車  
公園にぼつと残る三輪車

川柳はびきの  
塩満

美人にはゆるい財布の紐である  
蒸発の妻を探せば龍宮城

吸殻に囲まれ時計見上げてる  
大阪砂漠そんな言葉は似合わない

二代目は芸より目立つ私生活  
腹の子ども食べてますのと呆れさせ

補聴器の雑音低く妥協する  
箸袋思ひ出貼つて旅日記

二代目へ船場の風はきびしすぎ  
ゴム紐と同じにゆるむ顔のしわ

昌子  
光重

よつぐ  
良征

紫香  
牧郎

勝子  
妙子

年代  
ふみ

好子  
田鶴子

いく子  
智子

節子  
敏報

吐来  
昭子

重樹  
美代子

淑子  
繁男

末一  
隅谷義一

只士  
みつる

泰子  
隆

母の留守白紙を埋める子の日記  
夜明け前泣いているのか月見草

紙幣との苦楽を謝しに太子廟  
ホテルイン横文字ばかり息を呑む

秋の夜少し濃い目のコーヒを  
生き恥の二つ三つは持ち合わす

川原のデートせせらせさだけ聞こえ  
友情が輪になり歌碑に影つくる

羽曳野を翼八軒胡村歌碑  
石川の清き流れに胡村碑立つ

中一のキザ横文字で落書きし  
おっさんも髭を剃つたりズボン替え

露の世の出口は地獄でないように  
浄土へは紅の花緒を履いてゆく

單身赴仕妻のさんまが欲しくなる  
水槽の鯛は絵師から見離され

手鏡といつも相談しています  
飲んで食つて遊んで浄土やおまへんか

男ひとり秋の奢りのさんま焼く  
浄土には会いたい人がたんといる

うちもサンマ隣もサンマ平和です  
出口では綺麗な鬼が待っている

秋の絵の中で笑っているモンロー  
愛す少し上手にさんま焼くおんな

絵が少し傾いている倦怠期  
世話好きが相談ごとに家をあげ

うぬぼれにすぎた出口を見失ない  
乱獲のやがてさんまに飢えてくる

相談するには母も老いすぎて  
捨て台詞大きな声になる出口

与呂志  
伴子

忠宏  
昇

隆二  
寿美

石橋義一  
胡村

一屯  
喜代子

白水  
敏

鬼遊報  
蕉露

寿馬  
章

みつる  
凡九郎

度  
雀踊子

射月芳  
冬葉

柳宏子  
弥生

鬼遊  
糸葉

覚然坊  
頂留子

美幸  
シマ子



マロニエの木陰で溶ける絵具皿  
ボックリ寺の地図にやっぱりある出口  
旅好きが遂に浄土の旅にたち

西宮北口川柳会 妹尾 春江報

裏窓の下ヒソヒソ話聞く

虫の鳴く窓の辺りをもとあけ

霧時雨団地の窓の灯がうるむ

裏口の窓はいつでも開けておく

またきまず別れた窓は今はない

風和む余生の窓花を置く

窓たたく風が父母連れて来る

どの窓も併せそうに灯がはいる

窓いっぱい開けて女は身構える

窓開けた心に高い空がある

北の窓絆ひとつを浅く持つ

飛び出した子待っている母の窓

窓を開ければ貴女の匂い消えそう

ロボットがいまにチューハイ飲むだろう

疲れたと言えずロボット故障する

ロボットに知れたらあかん程もつけ

ロボットでなかった養子の使いこみ

ロボットが持たぬ真心で勝負する

人間味なくてロボット稼だけ

ロボットが届けてくれたラブレター

ロボットの不気味な寝言さかされる

ロボットの乾いた手からもうお茶

ロボットの弱味血液型が無い

赤い羽根つけて見上げる空は澄み

栄転の日の空あくまでも澄み切つて

天高く別れのことば聞きもらす

澄んだ瞳に本当のこと打ち明ける

柳伸 悦郎

眉水

一 郎

好 江

紫 香

保 蔵

はつ絵

年 代

笑 女

水 声

園 歩

札 子

恵美子

静 子

佳 秋

弘 生

しげお

花 村

千世子

明 生

求 駄

望 芽

幽 香

志 津

杏 女

み つ

心底を話せばこころ澄んでくる  
修羅幾つ越えたか澄んだ瞳と出合う  
靴擦れを澄まし行く身に汗が噴く  
教会で少女の澄んだ瞳に出会う

蛋白が澄み退院の声を聞く

捨てられて居るとも知らず子猫の目

屑かごに入りたがらぬ書きつづし

逢える日の鏡が天邪鬼になる

鉛玉を子にねぶらせて惹きさむ

どの風にもなびくコスモスの根の強さ

秋の肌秋の温度を知るシャワー

津軽から宅急便で秋が来る

世の中は仏と鬼が居て夫婦

我が家にも秋栗めしが炊きあがる

触れるまばら母の便りと柿の艶

荷をとけば母の便りと柿の艶

兵児帯に秋を巻き込み金木犀

船が行く小さな秋を積み残し

善人の列のいちばんビリに居る

当り前の事しただけと取り合わず

川柳たけはら

森井 善居報

よるじやないのにおつきさませいのの三歳千

シャンブーのあわはソフトクリーみたいたな四歳昌

ようちえんおともだちがいるからすき

しんがったあたらしい本もらったよ

おえかさだすきキんにくマンかい

本やさん見たいかい本ばかり

動物えんおや子のさるがかわい

にげないでカマキリが向かってくる

うれしいな習字がやつと五段です

はえたたきねらいさだめてにげられる

かすみ

春 江

よ志子

婦美子

冬 子

泰 世

春 子

文 平

半 歩

よし津

寿 馬

紀 雄

伊三郎

柳 影

春 蘭

武庫坊

光 代

幸

白溪子

枝

之

五歳史

小一はるみ

小一あきみ

小二裕子

小三方昭

小四純平

小五美保

小五亜貴子

川柳塔柳箋

一冊 二百円  
送料 二百四十円

この暑さ応援するのも楽でない  
中学生自覚がずんと重くなる  
くせ字だと言われて気にするテスト前  
もきテストテストなんとなく三年生  
そのうちに見つかりますと駐在所  
原点へUターンして楽になる  
やる事がいっぱい妻も子も達者  
歯が一本ポロリと抜けた秋である  
まやかしの愛かも虹を抱きつづけ  
出勤へ子が頑張つて来いと言う  
さりげなく女値ぶみをして別れ  
スラングが僕を無心にして呉れぬ  
少しずつあきらめあつていて夫婦  
浅はかな女で目先にかまけすぎ  
満月は童話を知らぬ子が育ち  
神々はいずこにお在す悩みごと  
逆光へさきもはかなげに蝶が舞う  
父の背の温みを感じる子を背負う  
サングラス掛けた自画像でも描くか  
幕参り昔話はずむ里  
むすかれば親に渡せる孫の守り  
浄土への足を鍛える遊歩道

中一恵子  
中二仁昭  
中三希世子  
中三紀愛

高 三

静 水

房 子

こうじ

蘭 幸

令 子

比呂子

純 舟

淑 夫

節 夫

美佐雄

笑 子

白 狐

一 路

貞 子

博 子

シゲヨ

## ● 募 集 ●

**二月号発表** (12月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栗選  
 水煙抄 (10句) 黒川 紫選  
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風選  
 課題吟 (各題5句以内)

「首」 恒松 町紅選  
 「意見」 福浦 勝晴選  
 「騒ぐ」 仲 どんたく選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りません。  
 ★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

**三月号発表** (1月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栗選  
 水煙抄 (10句) 黒川 紫選  
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風選  
 課題吟 (各題5句以内)

「公園」 榎田 英詩選  
 「大胆」 園山 多賀子選  
 「艶(つや)」 堀端 三男選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。  
 ★用紙は川柳塔社柳箋をこゝ使用ください。

12月の常任理事会は1日(土)

〒545 定価 五百円(送料50円)  
 半年分 三千二百円(送料共)  
 一年分 六千三百円(送料共)

昭和五十九年十一月二十五日印刷  
 昭和五十九年十二月一日発行

編集兼 発行人 中島 蓬太郎  
 印刷所 藤原 童心社

大阪市阿倍野区三木町二一〇一六  
 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社  
 電話 (〇六) 一六九一四番  
 振替口座大阪 813336八番

## 本社12月句会

日時 十二月七日(金) 午後六時  
 会場 なにわ会館  
 天王寺区石ヶ辻町19-12  
 地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南  
 電話 06・772・1441番

兼題 「おはなし」  
 「銀河」  
 「ふらふら」  
 「松」  
 「平行」

席題 二題 当日発表  
 野村 太茂津選  
 児島 与呂志選  
 神谷 凡九郎選  
 江口 度選  
 阿萬 萬的選

会費 五百円  
 各題三句以内厳守

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

1月の兼題 「立願」 「場い」 「バランス」 「港」

1月の本社句会は7日(月)

## 夜市川柳募集

第七回 「雫」

中田たつお選  
 締切 12月末日

第八回 「のろし」

高杉 鬼遊選  
 締切 1月末日

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九一

河内 天笑方  
 堺川柳会

## 編集後記

☆私の今年はNHKのテレビ放送、川柳天国の番組出演から明けた。川柳塔誌寿還暦の年を振り返って、意義のある充実した年であったと思える。

☆記念句集の発行と中国への友好の旅という二つの企画がスムーズに運べたのも川柳塔の和の証で、大方のご支援の賜による。また、月々三十部の増冊を続けられたのも川柳塔の「天の時」と言うことが出来よう。

☆川柳天国のテレビ放映は夏にも行われ、反響は大きかったが、川柳界内部の批判も厳しいものがあつた。☆川上三太郎の川柳の選評にコミカルな筆法を用いて大衆にアピールした時代があつた。時事川柳の選の担当にも自らがジャージズムへの防波堤にならん気概を持っていたのである。余人では、まだまだ川柳の質を下落させられると考えていたわけで、ジャージズムの川柳に対する扱いは今も

その当時とさして変わっては

いない。森中恵美子さんも私も、厳しい批判には耐えながら、少しでも裾野を広く、質を高くと指向して力を尽くしているのだが川柳誌上でこの批判はともかく、一流新聞の選者が場違いの選評の欄で、番組の一部の低俗さのみを指摘されたのには心が痛んだ。ひたすら川柳向上の実を挙げるべく励む外はないと思う。

☆若柳潮花さんの追悼句会でしみじみ感じたことは、不二田一三夫さんが亡くなされた四年前と比べて、本社句会の出席者の顔ぶれが半数以上も様変わりしていることであつた。新しい力の台頭が感じられ、これを將來までこまで伸ばせるかが大きな課題であらう。

☆来年年十月には川柳塔改題二十周年を迎える。今年の充実をさらに飛躍させたい。☆直原玉青画伯には、すでに頂いていた表紙を、中国旅行の特集にふさわしいものに描き直して頂いた。毎号の表紙は本誌の得難い財

産である。

☆同人誌友の皆さん、よいお年をお迎え下さい(薫)

▼ある日ある家の法事に参席した。仏壇の線香立ての灰があまりに白いので、どこかで買って来たのかと訊いた。それは線香の灰そのものの白きであつて、その線香は白きよりも香りもよいのである。そんな馬鹿げたことがあるのかと一瞬疑つたが、目の前で、煙りも立てず匂いもせず火をつけているではないか。いかに頑迷固陋であつても、いかに不ふながら納得しないわけには参らない。多分あの世でも煙捲権がやかましく環境庁へ進言したのかも知れない。第二次中曽根改造内閣は女性の石本茂さん(現環境庁長官に起用した)。女史は「長年、厚生行政に係属してきた経験を生かしてきめ細かな行政をやりたい」とおっしゃっている。まさか嘘ではないだろう。二十一人の大匠のうちでこのお一人を信じたい。

が流行して、餅屋は勿論、家庭でも何の抵抗もなく受入れていた。確に便利である。それなのに「平城の会」の半煮句会では石臼を持ち出して本式に餅を搗いたのである。それは一体何なのか。参加者に餅をふるまう厚意からの発想であるが、便利さを排して、あえて杵をふり上げた行為は、ホンモノをこよなく愛おしむ情熱にはかならないものだと思ふ。酒宴をよそに杵やせいろを洗つておられた笛生氏の奥さんの後姿にホンモノの苦勞を知った。(き)

☆今年もあと一と月余。月並みの感想だが、月日の経つのはまことに早い。早いと感ずるのは、日々幸せで充実していたからか、或いは、あれもしよう、これもしようと考えはするが結局何一つ実行できなかった悔いからか、思えばその何れでもない。ただ何となく過ぎ去ったというのが偽らざる実感である。我れながら進歩がない。☆進歩がないと言えば、政界というところも保守・革新おしなべて旧態依然のように見える。そこで論語の中に次の一条があるのを出した。

「子曰く、古えの狂や肆(し)、今の狂や葛(くわ)とう(う)。古えの杵(き)、今の狂や葛(くわ)とう(う)。古えの杵や怠(たい)ふ(ふんれい)る。古えの愚(ぐ)や詐(いつわ)るのみ」。

☆昔のやくざはやくざなりに自由奔放の良きがあつたが、今のやくざは出鱈目だ。昔の政治家は志があり骨があつたが、今の政治家は小さなことに腹を立て、人と争うことを仕事を心得てゐる。昔は愚直だった小役人も今は卑屈に業者と結託して人をだますものが多い。昔は皆それなりに良いところがあつたけれども、今はその良きさえなくなりかけている、と孔子は嘆いているのである。

☆昔と今は大違いと孔子を慨嘆させたのは二千五百年前の時代。それから何も変わっていないということか。



日刊

# 電波新聞

## 投稿欄案内

川柳 選者・橘 高薫 風

(掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者・小寺 正三

(掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者・佐々木 信夫

(掲載日) 毎週月・木曜日

### 投稿規定

はかき一枚に二句(音)以内(川柳・俳句・短歌と明示すること) 投稿随時

自由課題・秀句には掲載紙贈呈

### 投稿先

〒五三〇・大阪市北区中之島三十一・朝日新聞ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

# 豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店  
 その他有名百貨店でどうぞ



ほうらい



TEL641-0551